2019 年度 関西学院千里国際中等部・高等部 学校評価を終えて

１．はじめに

関西学院はKwansei Grand Challenge 2039を策定し、その実施計画の中の「総合学園の枠組み再構築」に含まれているように、総合学園の「見える化」が進められており、関西学院大学のみならず、高等部・中学部・初等部とのつながりも深まっています。関西学院では、学校教育法の改正を契機として、大学以外の諸学校においても各学校が互いに連携を取りながら整合性のとれた学校評価を実施する制度を構築しています。今年度も、関西学院が幼稚園から大学院まで連なる総合学園である強みを生かし、接続する学校の先生方に、専門的な視点からのご意見をうかがうことで、第三者評価と学校関係者評価の両方の性格を併せ持つ「第三者評価／学校関係者評価」をお願いしました。加えて、保護者代表にも評価をお願いしています。頂戴した評価をもとに、自己点検・評価を再度総括させていただきました。この度、関西学院千里国際中等部・高等部の学校評価が学院総合企画会議（短大・各学校内部質保証部会）において承認されましたので、公表いたします。

２．設定目標の振り返り

2019 年度は、「学校生活・教育課程・学習指導」、「生徒活動・国際交流（Two Schools Together：ＴＳＴ）」、「教育環境整備（テクノロジー・ＩＣＴ）」、「キャリア教育（進路指導）」を評価項目に設定しました。各評価項目について、生徒・保護者・教員にアンケート調査を行いました。加えて、今年度からアンケート調査に関西学院のスクールモットー “Mastery for Service”についての質問を「学院共通項目」として設定しました。「学校生活・教育課程・学習指導」では、特にポストＳＧＨプログラムに力を注いできました。具体的には、カリキュラム・ティーチング・ラーニング：ＣＴＬ委員会と、その下部組織としてのＳＴＥＭ委員会を発足させ、教育内容や教授法に関して教員間で議論を重ねてきました。多様な文化が共存する本校の教育環境の中で、生徒が主体的に考え、問いを立て、答えを導きだすプロセスは大学における高等教育の基礎となることが期待されます。

「生徒活動・国際交流（Two Schools Together：ＴＳＴ）では、アンケート結果を踏まえ、検討を重ねながら大阪インターナショナルスクール（ＯＩＳ）との共同学習（音楽、美術、体育）および共同活動（文化祭、体育祭、ミュージカル、部活動等）を行っています。また、アメリカ、ドイツ、ポーランドの学校との国際交流事業を通して、ホームステイを受け入れたり、日本の伝統文化を外国人生徒に紹介したりする機会を得、生徒たちは学校生活以外でもさまざまな異文化理解や国際交流を行っています。来年度は、平和教育の視点から、国際交流の意義やその教育的効果について検討する予定です（アウシュビッツ、ポーランドへの訪問）。

「教育環境整備（テクノロジー・ＩＣＴ）」では、ＯＩＳと合同で今年度ＳＯＩＳ ＴＥＣチーム（ＳＯＩＳ Technology in Education Committee）が発足し協同的な課題の把握と

問題解決に努めました。また、今年度の後半より中学１・２年生にChromebookを導入し、その成果が期待されます。テクノロジー環境については、中学生・高校生共に満足度は概ね高く、高校生においては昨年より若干ではありますが回答が向上しています。ＳＮＳの使い方は生徒指導とも関連するため、重要なテーマであると位置づけています。デジタルネイティブ世代の情報リテラシーを生徒にどう教えていくかについては今後の課題とします。

「キャリア教育（進路指導）」では、昨年度に引き続き、生徒・保護者・教員にアンケートを実施、分析しました。その結果から、関西学院大学との高大接続の促進活動や、大学の新たな動きの周知が、生徒や保護者に肯定的に受け取られ院内推薦の増加につながったと考えられました。海外大学進学については、ＳＯＩＳの３人の専門教員が連携して生徒の支援を行っています。９月には本校を会場として関西地区海外大学進学フェア2019（16の国から120校を超える大学が参加）を実施し関西地域から多くの高校生と保護者が訪れ、好評を博しました。引き続き、本校の外国人教員や専門職員の人材を生かし、海外進路の充実を図っていきます。

なお、アンケートにつきましては、過去数年来と同様、ネットワーク上の設問に各自が答える形式で実施しました。回収率は昨年度からの若干の低下がみられました（表１）。より妥当性の高いデータを得るためにも、保護者と教員については、回収率を高めるための工夫が必要だと考えます。

表１

	中等部生徒	高等部生徒	保護者	教員
2018	97.1%	90.0%	63.3%	64.1%
2019	96.2%	83.9%	58.2%	39.6%

３．最後に

ご提出いただいた第三者評価を真摯に読ませていただき、改めて今年度設定した目標を振り返り、自己点検と評価を致しました。本年は、重大なインシデントが発生し、学校としての在り方や教育方針を深く問われる１年でありました。次年度以降は、５つのリスペクトの一つである「他者へのリスペクト」および「自己へのリスペクト」の真の意味を生徒に考えさせ、身に着けてもらえるよう、５リスペクト委員会の発足や人権教育の充実を強く推進します。

皆様のご意見を真摯に受け止めより良い学校をめざして職員一同鋭意努力してまいります。

今後ともご指導とご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

2020年3月13日

関西学院千里国際中等部・高等部

校長 井藤眞由美

学校評価

教育理念・使命・目標

***二つの学校　一つのミッション（Two Schools, One Mission）**

私たちのミッションは、生徒たちを、「知識と思いやりを持ち、創造力を駆使して世界に貢献する個人（“Informed, Caring, Creative Individuals Contributing to a Global Community”）に育てることである。

生徒たちは強い自我を育み、自己の文化、他の文化を理解し、経験の多様性を楽しめる人物へと成長する。世界におけるお互いのかかわりを認識し、多文化環境に対応できる、包容力があり創造性のある成人へと成長する。

生徒たちは自己責任の意識を持って教育活動に取組、自分の能力や才能に気づき、それらを伸長させて学習面・人としての成長面における自分の進む道を切り開く。自らの努力で切り開く強さをもって進む。

生徒たちは健康で生きがいのある生活を尊重し、個性を大切にし、知恵と忍耐力を持って苦しいことを乗り越えていく。国際社会の一員であるという意識を広げ、人類のよりよい未来のために他者への思いやりをもったリーダーシップを発揮していく。

I. **二つの学校は一体である

1．私たちは、二つの学校が常に一つになろうと努力することが、生徒たちにとても大きな利益になると信じる。
2．私たちは、二つの学校の緊密な関係が私たちのすべての理念を成功させるために非常に重要だと考える。

II.　考え方の交流

1．私たちは、このキャンパスが教員や保護者、生徒たちにとって自由に教育上のことやその他の知的な考え方の交流が行われる場所であるべきだと考える。
2．私たちは、生徒や教員、保護者たちの多様な経験を尊重し、自由な意見の交換はこの姿勢をよりよいものとすることを信じる。

III.　文化の理解

1．私たちは、このキャンパスがホスト国である日本の文化の学習、鑑賞、理解に深くかかわるべきであると信じる。
2．私たちは、このキャンパスが日本と近隣のアジア諸国の文化の関係、その他の世界各国の文化との関係についても同様であると信じる。
3．私たちは、私たちのコミュニティーが多様な文化によって成り立っていることから、このキャンパスでは異文化間の理解が規範とされ、研究され、尊重される場であるべきであると信じる。

IV.　キャンパスでの学習

1．私たちは、このキャンパスの特別な性格が、生徒たちに調和のとれた個性的で責任感のある考え方や行動のできる人材となるよう力づけるべきであり、その目的を達成するためにキャンパスでの教育内容は変化に富んだ豊かで厳しく博識なもので積極的な参加を求めるものであるべきであると信じる。
2．私たちは、このキャンパスの主要な責任の一つは、生徒が成人になっても学び続けられるように学ぶ方法を習得させるように努めることであると信じる。

V.　共通の基盤

私たちは、このキャンパスの二つの学校が日本と外国の物の考え方や習慣、生活信条伝統の共通の基盤を示すべきであると考える。

VI.　規範

1．私たちは、このキャンパスの二つの学校が他の学校の規範として存在するべきであると考える。

２．私たちは、このキャンパスの目標の一つは日本国内や海外の学校に教育の新しい考え方や実践、技術システムなどを示すことであると考える。

<u>*二つの学校</u>　：関西学院千里国際中等部・高等部（ＳＩＳ）は帰国生徒受入れを目的として設立された一条校であり、基本的に学習指導要領に従ったカリキュラム編成となっている。生徒の構成が、帰国生と一般生（日本において通常の初等教育を受けた生徒）がほぼ同数となっている。また、主に外国人を対象に国際バカロレアに基づいた教育を行う教育機関でもある、キャンパスに併設の大阪インターナショナルスクール（ＯＩＳ）との合同授業（音楽、体育、美術が英語による授業）が行われており、バイリンガルな学習環境となっている。また、高等部では、大学と同様に、生徒がほぼ自由に時間割選択を行い、授業を受講するシステムをとっており、生徒の自主性を重視した学習環境を整えている。2013 年度からはＯＩＳの 11、12 年生と授業を共有することによって、国際バカロレアのディプロマプログラム（ＩＢＤＰ）を取得することができるようになった。

<u>二つの学校は一体である</u>**　：冒頭に記載した「ミッション」達成のため、ＳＩＳとＯＩＳは一体であることが、両校にとり最も重要な要素である。また、同一キャンパス（校舎）に両校が併設されていることが最大の特徴となっている。この点について、昨年度に引き続き評価項目として取り上げ分析を行った。

2019 年度の評価項目

１．学校生活・教育課程・学習指導（独自設定評価項目）
２．生徒活動・国際交流・Two Schools Together （独自設定評価項目）
３．教育環境整備（テクノロジー・ＩＣＴ）
（「学校評価ガイドライン（平成 28 年度改訂）」に例示されている項目）
４．キャリア教育（進路指導）
（「学校評価ガイドライン（平成 28 年度改訂）」に例示されている項目）

１・２・３・４ すべて、昨年度からの継続項目。

１は法人合併当初からの継続項目であり、ＳＩＳ教育において最も重視しているステイクホルダーの満足度を確認する意味で外せない項目である。

２は、上述の「二つの学校　一つのミッション」にあるように本キャンパスにおける教育理念の根幹である。

３は高等部において 2017 年度から開始したＢＹＯＤ(Bring Your Own Device) の成果を検証することと、計画中の中等部のＩＣＴ環境に関する意見聴取を主眼としている。

４は法人合併から 10 年目となる年、ＳＧＨとして大学との連携を模索して５年を経た年度の進路動向について、また海外を含む他大学進学希望者にとって学校のサポートへの満足度への意見収集を目的としている。

2019 年度の評価項目とテーマ、自己評価、目標、具体的な取組の状況とその効果に対する評価、今後の方策

評価項目 **【テーマ】**	学校生活・教育課程・学習指導 **【生徒・保護者の学校への満足度維持】**	**自己評価**	B
目標	在籍生徒数が増加している状況にあり、基本的な学校生活・学習一般に対する生徒・保護者の満足度維持・向上。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	**（具体的な取組の状況）** ・昨年度より「カリキュラム・ティーチング・ラーニング委員会（ＣＴＬ）」を始動させ、2020 年度よりの中高６年間の新規カリキュラムの策定に着手している。枠組みとしてのカリキュラム策定と並行して授業力強化、評価のありかた、それらの教科を超えた統一性などの確立もめざしている。 ・ＣＴＬ委員会内に「ＳＴＥＭ委員会」「ＳＣＧ（ＳＯＩＳ Global Citizenship)委員会」というサブ委員会も発足し、それぞれ理科・数学・情		

	報の教員による合同プログラムの策定、６年間を貫く世界市民教育の育成に着手している。 ・ＳＧＨの指定が５年目最終年度として終了するにあたりＣＴＬ委員会が中心となり 2020 年度からのポストＳＧＨプログラムを確立した。 ・今年度の生徒数は、春学期に 512 人、秋学期 521 人、冬学期 523 人と、過去最多である。高等部の授業選択にあたり教務ではより丁寧な情報公開と調整を心がけた。 ・Kwansei Grand Challenge 2039 の一環としての施設改善計画： 法人とのワーキンググループで骨子を固め、その後は教員間での意見調整、必要に応じて生徒・保護者の意見を取り入れながら進めていく。ＣＴＬにて教育の中身を整理改善していくことと並行して学びの環境としての施設改善にも力を入れる。 **（取組の効果に対する評価）** ・基本的な生徒・保護者の満足度は、回答値から見ると昨年度と大きな変化はなく概ね高いものとなっている。具体的には質問１「学校で自分らしく過ごしている。」質問２「自分はＳＩＳに入学してよかった。」については安定して回答値は高い。しかし評価の低い回答があることにも注視すべきである。 ・中等部の回答結果では質問３「学校での授業に全体に楽しく取組んでいる。」質問４「自分の学習する力が伸びていることを感じる。」についての数値が若干ではあるが向上している。これはＣＴＬのサブ委員会「ＳＴＥＭ委員会」「ＳＧＣ委員会」の取組の効果が出始めていることと評価したい。とは言え、６段階の最低の評価（０～５の０）が一人以上いるということにも注視すべきである。 ・高等部では、過去のアンケートではＳＧＨの取組についての回答が高評価と低評価に分離するという現象が見られたが、ＳＧＨ指定校としての最終年である今年は正規分布の結果が出ており、全体に評価数値も向上した。（質問８「＜10 年生のみ＞知の探究の授業での学びを通じ、11 年生から本格的に取組む個人の課題研究が楽しみである。」「〈11 年生のみ〉課題研究への取組は、充実感をもたらす楽しいものである。」「＜12 年生のみ＞プログラムを通じて課題解決の力を伸ばすことができた。（他への応用ができたか・できそうか）」 ・教員の質問４「質の高い授業を目指し、教材研究や教授法の研究、授業研究を十分に行っている」への回答値が若干下がっている。教員の業務が複雑化・多様化し時間の余裕が減少しているのか。 ・保護者に対して毎年質問している質問３「学費に見合った教育を受けていると感じる」に対し、昨年度は若干向上したものの、今年は昨年度からの向上は見られないうえに６段階評価の最低評価（０～５の０）が増加している。また、全体的に見ても、平均回答値としては昨年度からの評価の低下は見られないものの、低評価（０～５の０や１）の増加や自由記入欄への厳しいコメントがある。「施設の不具合」「学校のセキュリティへの不安」「生徒問題に関しての学校の対応」「高等部の自由選択システムについて『取りたい授業が取れない』『進路によって必須となる授業が分かりにくい』などの不安」「教科・教員によって授業の方針などに差異があることへの心配」などが改善すべき点として挙げられる。

今後の方策	・2020 年度より教務センター内に「ＳＩＳラーニング部（仮名）」を設置する。ここでは中高６年間総合探究の学びを系統だてて運営し、その中の高等部の生徒を対象にしたポストＳＧＨプログラムを統轄する。またＳＴＥＭ委員会、ＴＥＣ（テクノロジ―委員会）、ＩＢ担当者も加わり、ＳＩＳの教育総合的な発展を目指す。 ・Kwansei Grand Challenge 2039 の一環としての施設改善計画がいよいよ具体化する。教育の中身の改善の議論と並行して学びの環境としての施設改善とする。 ・信頼・安心できる学校環境のために、セキュリティ関連のハードウェア、施設点検の仕組みを構築する。 ・生徒のモラル意識を高め、より信頼・安心できる学校環境のために、５リスペクトの浸透、生徒と教員のコミュニケーションを向上させる仕組みを構築する。具体例として以下の実施を決めている ・中等部（７年生・８年生）の定期的なアセンブリーを行う（学期に二度程度） ・５リスペクト推進チームを作る（校長・教頭・各学年の代表）

評価項目 【テーマ】	生徒活動・国際交流・Two Schools Together（ＴＳＴ） 【ＯＩＳと共にあるＳＩＳの使命を確認すると同時にＳＩＳ独自の国際理解教育を維持発展させる】 （重点）	自己評価	Ａ
目標	ＯＩＳと共に行う教育活動（シェアード活動）の一層の充実と、ＳＩＳ独自の国際理解教育の発展		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	（具体的な取組の状況） ・昨年度、校務分掌としての組織である「生徒活動センター」が年々増加している様々な国際交流プログラムの案内のためにブログを作成したが、今年度は一層幅広くプログラムを紹介し、また参加した生徒の報告も掲載して活用した。さらに校内二か所に掲示板を設置し、タイムリーに生徒への情報提供ができるようになった。 ・ポーランドのウッジ第二高校とは昨年より交流が始まったが、正式な提携を結び、今後は二年に一度お互いの訪問を実施することが決定した。今年度は 11 月にウッジ第二高校からの訪問を受け入れ、３月には本校の 10 名の生徒がウッジ第二高校を訪問する。 ・上記に加え、今年度は４月にアメリカのオレゴン州の Mt.Tabor 中学生の受け入れ、10 月にドイツの Gymnasium Grafing 生徒の受け入れもあり、ＳＩＳの多くの家庭のホームステイ受け入れの協力を得てこれら意義ある交流活動が実施できた。 ・ＯＩＳと合同で取組んでいる中等部生徒会・高等部生徒会は、今年もＯＩＳとの合同の行事、プログラムに工夫を凝らして運営した。 ・ＯＩＳのＩＢＤＰのカリキュラムのコアにあるＣＡＳの活動の紹介を中心とした「サービスフェア」を去年からＳＩＳ/ＯＩＳ両校の生徒が参加できるものとしたが、今年はＣＡＳの活動以外のサービス活動やボランティア活動・クラブ参加がさらに増え、一層二つの学校の合同の取組としての実施となった。 ・これまでＯＩＳの初等部での取組であった Book Fair がＳＩＳとの合同活動として実施された。（10 月最終週） ・授業外の活動として５年前よりＷＳＣ(World Scholar’s Cup)にＳＩＳとＯ		

	ＩＳの生徒が合同で取組、本校での関西大会、グローバル大会、イェール大学での大会に参加している。今年もそれぞれに 51 人、38 人、22 人が参加した。また昨年度よりＧＩＮ(Global Issues Network)にも両校の中学生が参加している。今年度も２月にバンコクでの大会にＳＩＳからも６名の中学生が参加する。 ・その他ＯＩＳと連携して行っているものとして夏のアカデミックキャンプ(アジア学院はＯＩＳ生も参加可能)、進路が決まっている高校三年生の「猫の手活動」でのＯＩＳ授業サポート(G8 Art、OIS Elementary Art)、Japan Heart の支援、赤十字の応急処置学習会の参加、動物保護団体の支援などが新規に増えている。 ・学校の取組ではないが、保護者会が、今年はＳＩＳとＯＩＳの合同の取組（Teacher Appreciation Day, Book Fair など）を増やされたことも学校内の Two Schools Together の促進に大きな貢献となった。 **（取組の効果に対する評価）** ・ブログや掲示板設置により生徒への情報提供が円滑になり、生徒たちが自主的に参加したいプログラムを選び応募することが進んでいる。 ・国際交流のホームステイプログラムや、ＷＳＣ、ＧＩＮをはじめとする学外活動への参加数も上記記載の通り順調に伸びている。 ・アンケートの結果からも、中学生は活動の機会や情報の量に関して、概ね「適切である」との回答を得ている。 ・中学生・高校生に共通の質問「国際的に視野が広がるプログラムが十分用意・紹介されている」質問「授業の中で、世界の一員として生きていること実感できる機会が多くある」、高校生のみの質問「地球市民としての意識が高まっている」において昨年度より目立って高い回答値が出ている。 ・「ＯＩＳの生徒や教員との交流の機会が多くある」「ＯＩＳが併設されていることで自分の生活や学習が豊かになっている」という質問に対して、中学生の回答値が高いが高校生になると減少するのは例年と変わらない結果である。しかし中学生、高校生共に昨年より回答値は向上している。
今後の方策	・引き続きブログや掲示板を活用し生徒への情報提供に努めると同時に、本校の姿勢として生徒の自主性を重んじた動機付けを心がける ・今年度は生徒活動センターからの情報提供の仕組みが改善されたことや新たにＯＩＳとの合同活動を取り入れたことで、この項目での進展がみられた。来年度は、さらに新しいものをと欲張るのではなく、今年加わった新しい活動の定着に力を入れたい。 ・来年度は中学（７年・８年）のアセンブリーを定期的に実施する。これはＯＩＳとの合同取組ではないが、ＳＩＳ生徒の自主的な生徒活動を共有する機会となることを目指している。

評価項目 【テーマ】	教育環境整備 **教育環境整備** 【テクノロジー・ＩＣＴ】（重点）	自己評価	Ｂ
目標	校内ＴＥＣチームを立ち上げ、一昨年度開始した高校生ＢＹＯＤの定着を把握すると同時に中学生にとっての Chromebook 導入の準備を整え、キャンパスＩＣＴ環境の将来構想の構築に繋げる		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	**（具体的な取組の状況）** ・予算年次計画により学内ＰＣのリプレイス、サーバー群の更新、校内ＬＡＮケーブルのバージョンアップ等を実施した。		

	・ＯＩＳと合同でキャンパス内のテクノロジー環境の整備・発展を目指す目的でＳＯＩＳ ＴＥＣチーム（ＳＯＩＳ Technology in Education Committee)が発足した。（これまではＳＩＳとＯＩＳに別々の委員会があった） ・高等部の環境は iPad 一人一台貸与から 2017 年のＢＹＯＤへの移行と順調であるが中学生の環境改善が課題であった。今年度の後半より、理科に新しい iPad,中学１・２年生に Chromebook が導入された。Chromebook は来年度４月の本格導入を視野にいれ 12 月より試行導入している。 ・高校生に対するＢＹＯＤに関するアンケートを秋に実施し、授業での活用方法やデバイスの使用頻度などについての回答を集めた。 **（取組の効果に対する評価）** ・テクノロジー環境について、中学生・高校生共に満足度は概ね高く、高校生においては昨年より若干ではあるが回答値が向上している。保護者からの満足度とＢＹＯＤ環境への理解も、同じく概ね高く昨年度より若干回答値が上昇している。自由記入欄にはＷｉ－Ｆｉの強化、充電場所の設置を求める声が多数ある。 ・高校生に対するＢＹＯＤに関するアンケートからは、昨年度よりも肯定的な意見が得られた。「ＳＩＳの授業全体におけるデバイスの使用頻度」については、依然として半数はこのままでよいと考えているが、残りの半数はさらに使用頻度を増やして欲しいと考えていることが明らかとなった。より積極的な活用方法を学校全体で研修する必要があると考える。 ・７・８年生への Chromebook の試行導入については、タイミングにより生徒の反応はアンケートの回答値からは伺えないが、観察の様子より生徒の満足度は高く順調な試行実施が進んでいるようである。 ・理科に導入された iPad が有効に活用されており生徒の満足度も高い。 ・校内ＬＡＮやＷｉ－Ｆｉは強化されて満足度は高いが、まだ場所によっては不具合が指摘されている。 ・ＳＮＳの使い方などで不愉快な経験をしたことがあるという声が自由記入欄に複数見られた。実際にこれに関することで教頭指導が必要な場面もあった。 ・高校生の間で、他人のパソコンの情報を無許可で覗き見るということが頻繁に行われていたことが発覚し、教頭から指導を入れた。
今後の方策	・テクノロジー機器の扱い、ネット上のマナーなどに関する教育の強化が必要である。ＴＥＣ教員と情報科の教員がチームを組み、６年間の成長過程を見据えたガイドラインの再設定に取組んでいる。来年度４月からの運用を目指す。 ・上記のうち、４月からの Chromebook の本格導入にあたり慎重に運用規定を策定する。 ・ＩＣＴに関しての教員研修にも取組む。生徒への指導内容の徹底、及び、教員自身のＩＣＴ活用能力の向上を目指す。

評価項目 【テーマ】	キャリア教育（進路指導） 【生徒一人一人に即した進路サポート　】	自己評価	B
目標	生徒が自主的に自分の進路を見つけ決定していくために必要な情報を必要なタイミングで提供する。特に関西学院大学に関しては、生徒保護者向けの説明会やガイダンスを通して留学制度や新学部の設置等、最新かつ正確な情報を提供することにより理解を深める。		
具体的な取組の状況とその効果に対する評価	**（具体的な取組の状況）** ・ＳＧＨ等高大接続の取組が生徒の進学先決定に大きな影響を与えている状況を踏まえ、今年度も大学の協力を得つつ継続して高大接続活動を実施できた。		

	・関西学院大学への理解を深める機会として引き続き「キャリア講演会」を年３回実施。今年度は更に大学の新たな動き（新学部の設置、国際学部のダブルディグリー留学等）についてもそれぞれ説明の機会を持った。 ・海外大学への進学については、世界の主要大学と高校をつなぐプラットホームである BridgeU を導入し、早い段階で生徒、保護者に周知し実際の運用(情報提供と出願サポート）を開始した。 ・本校を会場として関西地区海外大学進学フェア 2019（16 の国から 120 校を超える大学が参加）を実施した。 ・中等部７年生に対しても、今後の進路選択を見据えたキャリア教育ということで、第一線で働いている保護者を講師として招き講演会を実施した。 **（取組の効果に対する評価）** ・高等部生徒への関西学院大学に関する理解を深める取組に関してはアンケート結果（質問 28）より、満足度が昨年よりも 10 ポイント以上上昇しており、院内推薦比率の上昇にもつながっていると思われる。 ・10 年時の大学訪問、11 年時のオープンキャンパスについてはアンケート結果（質問 31.32）より、８割の生徒がおおむね満足していることがわかる。それに比べキャリア講演についてはアンケート結果（質問 33）より、満足度が低めであることがわかる。 ・進路ガイダンスや個別の進路相談については、高等部生徒・保護者ともにアンケート結果（高等部アンケート質問 30　保護者アンケート質問 29）より、おおむね満足の割合が昨年度に比べ 10 ポイント以上向上している。 ・高等部生徒・保護者ともに、関西学院大学以外の国内の大学に進学する場合の情報提供やサポート体制については、アンケート結果より（高等部アンケート質問 27　保護者アンケート質問 26）昨年度に比べ 10 ポイント以上向上はしたが、満足度はやや低い状態である。 ・海外進学希望者へのサポートは、高等部生徒・保護者ともに、アンケート結果（高等部アンケート質問 29　保護者アンケート質問 28）より、満足度が高く、専任担当者の存在と BridgeU 導入等の効果が現れている。また、本校で関西地区海外大学進学フェアを実施したことで早い段階で情報を得る機会を提供できた。
今後の方策	・高大接続の取組については、ポストＳＧＨ体制においても、継続して行い、さらに高大連携の充実を図りたい。新たな取組としては国際学部のダブルディグリー留学に絡めた授業連携等も進めていきたい。 ・大学への院内推薦比率 50%維持（Kwansei Grand Challenge 2039 の施策の一つ）を目指して、関西学院大学への理解を深める取組（大学訪問、オープンキャンパス、キャリア講演会やその他ガイダンス等）を今後も継続して実施する。次年度は学部への理解の部分を更に強化したい。 ・関西学院大学以外の国内大学進学に関する情報収集と提供等を行う担当者を決めることにより、生徒に即した進路相談が可能な環境を整え、サポート体制を強化する。 ・海外進学については進学先（国、地域）が多様化する中、その情報収集と提供、個別の進路相談の体制を強化したい。

（自己評価）

Ａ＋=テーマに対する目標を達成した。

A=テーマに対する目標を概ね達成した。

B=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行しているが、達成にはまだ時間がかかる。

C=テーマに対する目標の達成に向けた計画や方策などを実行していない。

総合評価

評価項目「生徒活動・国際交流・Two Schools Together」はA評価とできると考えるが、特にTwo Schools Together の機会拡大は引き続きの課題である。「学校生活・教育課程・学習指導」「教育環境整備（テクノロジー・ＩＣＴ）」「キャリア教育（進路指導）」はＢ評価とした。これら３つの項目ではアンケートの回答値の平均を見ると昨年度に比べて全体的に若干の向上が見られるが、今年度は、火災等校内の安全に不安を生じさせることが起こったことによると思われる、厳しい評価（0～５の０や１）や厳しいコメントがあることを重く受け止めた。

1980 年代の臨教審の「新国際学校構想」のもとにＯＩＳと共に教育を実践する学校として設立されて 29 年を経た。国際教育のパイオニア、帰国生受け入れを主たる目的とする学校としての使命を一層強く意識し 21 世紀の日本の教育を牽引する存在として 30 周年に向かいたい。

１月 31 日のＳＧＨ成果発表会の翌日、２月１日（土）には「ＳＩＳ教育ワークショップ」と題して設立からの 29 年を振り返り今後を考える時間を持った。

今年度の主な取組として、上記各項にて以下を記述した。

・授業力の強化：カリキュラム・ティーチング・ラーニング委員会（ＣＴＬ）、ＳＴＥＭ委員会、ＳＧＣ委員会、ポストＳＧＨプログラム
・生徒活動：情報提供のブログや掲示板、ＯＩＳとの合同活動の増加
・ＩＣＴ環境改善：理科の iPad・中学生の Chromebook 試行導入
・進路に関する情報提供：キャリア講座を中学生に導入、BridgeU 導入、海外大学フェア開催

上記以外では以下の取組があった。

１）生徒獲得戦略委員会（ＳＫＳＫ）：ＳＩＳの存在を伝える広報について、そして、本校の理念と教育の考えに共感される家族・生徒を国内外から獲得するための施策を練る委員会である。帰国生徒の増加、一般入試受験生の増加、という成果をあげている。来年度も継続的に活動を活発化させたい。また、今年度は３年目の取組となる「大同窓会（３月実施）」をさらに発展させ、卒業生と在校生の交流機会や広報活動のサポートなどに繋げることをめざす。

２）施設改善：法人の安全計画の一環として体育館にクーラーが設置され、暑い季節の授業やクラブ活動の実施の際に大いに役立った。来年度以降は、準備をしてきた教育環境全体の施設改善に着手する予定である。ＯＩＳと共にある教員集団、生徒、保護者とコミュニケーションを取りながら進める。

３）「落とし物・忘れ物（Lost & Found)」のウェブを活用しての情報公開の仕組みを作り、注意喚起も強化した。２年前に盗難の問題が起こったことを受けて対策を検討してきた中の取組の一つとして、「ものを大切にする」精神の育成に資することを願うものである。

４）安全管理：更衣室周辺を始めキャンパス全体のセキュリティ対策を検討してきた。実現には至っておらず来年度に向けての継続的な大きな課題である。また保護者会と協力しての取組んできた災害時の対策の以下の４点も継続課題である。
１．災害時の学校対応のフロー
２．災害時の登下校の安全確保
３．安否確認や学校の状況の情報伝達の仕組み
４．災害時の学校設備についての情報周知

2019年度の評価をふまえて2020年度に予定している評価項目、テーマ等

来年度に含めるべきと考えるテーマは以下のとおりである
・教育：５リスペクトの浸透、生徒指導
・カリキュラム：ポストＳＧＨプログラム、６年間の総合探究の構築
・施設：教育環境としての施設改善
・ＩＣＴ：個人情報扱いなどのマナー教育
・安全管理：学校全体のセキュリティ、災害時に備えての対策

第三者評価／学校関係者評価

生徒のアンケートからは、学校生活の満足度は相対的に高く、教職員の毎日の取組が生徒達に伝わっていることがうかがえます。

それは「自分はＳＩＳに入学してよかった」という質問に、８割もの生徒が肯定的な回答をしていることからうかがえるものでもあります。また、具体的な内容を見ると、例えば「授業を選択し、自分で時間割を作成するシステムに満足している」という質問や、「試験や課題に取組む時のアカデミック・オネスティについて自分は十分な理解を持って実践できている」という質問について、特に多くの肯定的回答を得ています。それ以外にも目を見張るのが「デジタル環境」に関する質問についてであります。これについては、ほぼすべての質問に関して肯定的な回答が得られています。これはＳＩＳの教職員のみなさまの取組の成果であると感じることができました。

一方で、生徒へのアンケートについて、ＯＩＳとの交流に関する内容が、唯一、「平均的」な数値結果となっています。ＳＩＳとＯＩＳという二つの学校が一つのキャンパスに併設されており、その強みを多くの媒体等でアピールしています。音楽、体育、美術といった授業を合同で行うことで、バイリンガルな学習環境を整えるといった大変積極的な取組が見られます。それ以外にも今年度の評価項目でも具体的な分析を試みられており、意欲的な実践がなされています。アンケート調査の結果としては、中学校の回答値が高い傾向があるが、高校生になると減少する傾向にあるとのことですが、中学校、高等学校ともに昨年度より回答値は向上しているとのことです。引き続き重点目標として、取組むことを期待します。

次に保護者へのアンケート調査結果ですが、おおむね保護者はＳＩＳの取組等について満足していることがうかがえるものです。生徒へのアンケート調査同様、「生徒は学校で自分らしく過ごせている」「ＳＩＳに入学させてよかった」という、全体的な満足度を評価する質問について、高い評価を得ていることが見て取れます。各回答についてもおおむね良好であることもうかがえます。

学校として保護者との連携についてどのような取組がなされているのか、そしてその評価としてどうであったか、特に詳細に明記されたものがありませんでした。しかし不可欠な視点ではないかと思われます。日々、教職員のみなさまにおかれましては熱心な実践があるかと推察します。引き続きの実践が継続してなされることを期待します。

また、教員へのアンケート調査結果について、特に「自分は教員として充実した気持ちで教育活動に取組めている」という職場の満足度を把握する質問について、非常に良好な回答を得ていることは注目すべき点です。加えて、多くの学校がひとりひとりの生徒への理解について、その困難性を抱えている現状にあります。ところがＳＩＳにあっては「少人数の授業環境を活かし、生徒ひとりひとりの状況を把握することが出来ている」という質問について、多少ばらつきは見られるものの、「把握することができている」と認識している教員が多く、教育環境として素晴らしいことと思いました。しかし、一方で理解している状況にない、と感じている教員も一定数いることについて、何等かの工夫や改善策を教員全員でシェアしあうことも必要かと感じました。また、多様な教育プログラム（キャンプやフィールドスタディ他、国際

的な視野が広がるプログラム等）についておおむね肯定的にとらえていることをうかがえる結果についても注目しました。一方で、教員の母数が「大きな集団」であるとはいえないにもかかわらず、このアンケート調査の回収率が芳しくないことが気になりました。

2019 年 10 月にＳＩＳを訪問しました。図書館では生徒ひとりひとりの多様な学びのあり方を保障する環境が感じ取れ、多くの生徒が集まる大教室において多様な工夫がありました。また体育教育では季節を問わずに水泳学習が可能となるプールも日々メンテナンスがなされており、こういう細やかな環境整備がいたるところになされていることを想像しました。毎日を過ごす教室は小規模で、それは少人数によるクラス単位を示したものであり、アンケート調査にあった、教員の生徒理解を促進することにもつながり、何より、生徒が安心して学校生活を送ることの基本が保障されていることの表れでもあります。

今年度は火災等の事案があったとのことが報告書にありますが、これを機会により実際的なリスクマネジメントの取組をなされていくことと思います。

統合的には、近年、改正導入された新学習指導要領の数十歩も先を行く教育実践の取組は目を見張るものがあり、感動的でもあります。日本国内のみならず、世界水準においても教育活動をリードする存在であることを期待します。

ＳＧＨ事業の最終年となり、ポストＳＧＨを見据えて、カリキュラムデザインを考えるＣＴＬを立ち上げ、さらにその下部組織として今後の教育の方向性にあったＳＴＥＭ委員会、ＳＧＣ委員会を発足させ、授業力強化、教育改善に着手しており、ポストＳＧＨプログラムがすでに確立されていることが高く評価されます。また、その環境を支えるための施設改善にもすでに取組んでいることも併せて評価されます。まだ、始まったばかりのそれぞれの組織ですので、今後着実に成果を出していかれることを期待します。ＳＧＨ課題研究の取組に対しては、かつてのように二分化するのではなく、どの生徒もおおむね好意的な評価と、良好な手ごたえを得ていることもうかがえます。

生徒活動や国際交流については、教員・生徒・保護者共にアンケートからは、かなりの割合で概ね満足の得る結果を得ていると思われますが、個々においては個別の意見があるようですので、その意見が妥当であるか分析し、必要があれば改善へと向けてください。「地球市民としての意識」の高まりが顕著にみられた結果が今後も得られるように努めてください。ただ、ＯＩＳとの関係においては、理念は共有されていますが、実感として感じられるところがやや薄いように見えます。実際のところ同じキャンパス内にあっても難しいことはよく理解できます。

教育環境整備については、その環境が整っていると学校全体で感じられているようですが、教員の中ではやや改善を求めると感じていると見うけます。生徒の積極的にデバイスの活用を求める意識と合わせて、よき改善方法を見出すことが課題になります。気になるのは教員の「生徒のネット上での個人情報の守り方」について意見のばらつきがあり、また生徒のほうではその点は概ねよく理解していると思っているという意識の乖離があることです。

キャリア教育については、全般的に様々な取組が功を奏しているようで、関西学院大学、他大学を問わずいい評価がされていますので、この評価を得続けることができるように努めてもらえればと思います。特に関西学院大学への関心が高まってきていることは感じとることができます。

ＳＩＳの場合、質問項目に「生徒指導」が含まれていませんが、学校の性格上この項目設定はそぐわないところもあることは理解できます。ただ、今後この領域に関するＳＩＳにあった質問項目を検討してもいいのではないかと考えます。

生徒・保護者・教員がTwo Schools Togetherの理念に共鳴しＳＩＳに誇りをもっている様子が見てとれます。ＳＩＳに入学してよかったと思う生徒が中等部にも高等部にも圧倒的に多いことがその一つの証でしょう。

ＯＩＳの生徒や教員との日常的な交流は頻繁・簡単に実施できることではないかもしれませんが、一つでも多くそのような交流の機会が実現し、多様なものが共存する学校を目指す今世紀型教育のパイオニアとして邁進し続けることを願っています。

学ぶことを楽しむＳＩＳ生は時代が求める「生涯学習者」の先駆けといえるでしょう。授業が楽しいと思う中等部生や課題研究を楽しむ高等部生の姿がデータでも裏付けられています。関西学院大学での講義教室では、その最前列に座って授業に取組むＳＩＳ卒業生が印象的であるとの声をよく耳にします。発足２年目の「カリキュラム・ティーチング・ラーニング委員会」などを通して学びの質がさらに高められ、これらからも多くのアクティブラーナーが育つことを願っています。

高い評価を得ているＩＣＴ教育においてはＳＮＳの使い方などに一部課題があるとのこと。先進のツールであるだけに未知のことが多くその課題への対応には苦慮するものと察します。ＳＩＳならではの５リスペクトの観点からも適切な指導が引き続き行われ、同年代に対して模範となるべき成熟したツールユーザーが育つことが期待されます。

継続的な課題と認識されているキャンパス全体の安全管理については、これからも保護者との意見交換や協力のもとに進展が図られることを願っています。

総評として、教育内容に対する満足度は生徒・保護者共に高く、教員の方々が日々質の高い授業を目指し、真摯に取組んでいる姿が高く評価されています。またＳＧＨ指定校としての最終学年を迎え、ポストＳＧＨに向けたＣＴＬ委員会の取組に対する期待感も高く評価される要因であろうと思われます。

・ＳＩＳとＯＩＳの交流についてですが、中学生までは多くの交流があるという評価が多数を占めていますが高校生になると評価は下がっています。また保護者からもＯＩＳとの交流が十分ではないという評価が多く、ＳＩＳの教育理念である『Two Schools, One Mission』を目指すためにも学校側からの新たな仕掛けづくりが必要なのではないでしょうか。
　我々保護者会としても生徒・保護者・教員の垣根を超えた交流イベントの企画等積極的に取組んでいきたいと思います。

・ＩＣＴの取組については、中学のiPad、Chromebookの導入、高校はＢＹＯＤと異なるがいずれも高評価を得ており、積極的な学校側の取組に感謝したいと思います。
　しかし授業にもっとＩＣＴを取り込んで欲しいという声も多数あり、生徒への指導内容の改善あるいはより積極的な活用方法の模索のため学校をあげて取組んでもらいたいです。

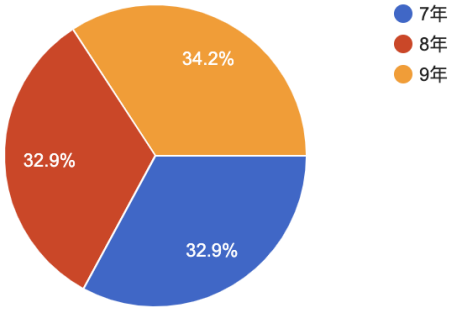
・今回の新型コロナウィルスの影響により、自宅でのネット授業がスタートすることとなりました。準備不足でスタートせざるを得なかったことは十二分に理解していますが、この経験からのフィードバックを貴重なチャンスとしてＩＣＴ環境の充実に取組んでもらいたいです。

2019年度学校評価

2019年度　関西学院千里国際中等部・高等部
学校評価　中等部アンケート

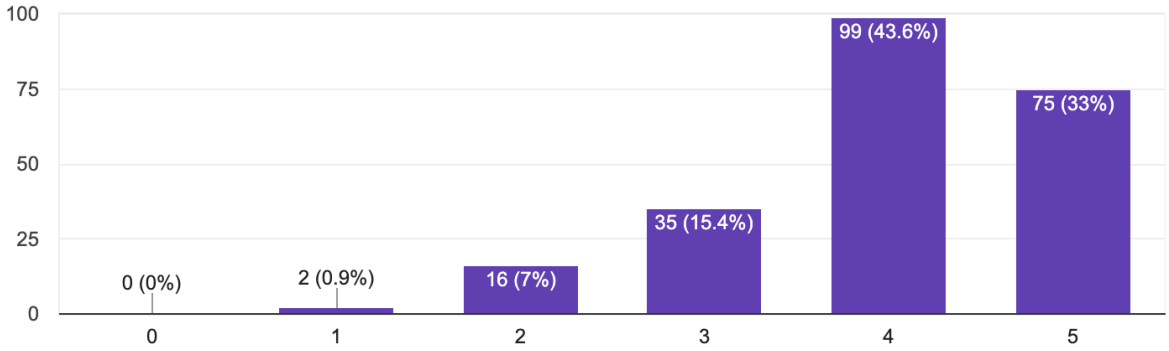
2019 SIS MS/HS SCHOOL EVALUATION REPORT - MS STUDENT QUESTIONNAIRE

学年	回答数	学年人数	回答率
7	75	77	97.5%
8	75	77	97.5%
9	78	83	94.0%
全	228	237	96.2%

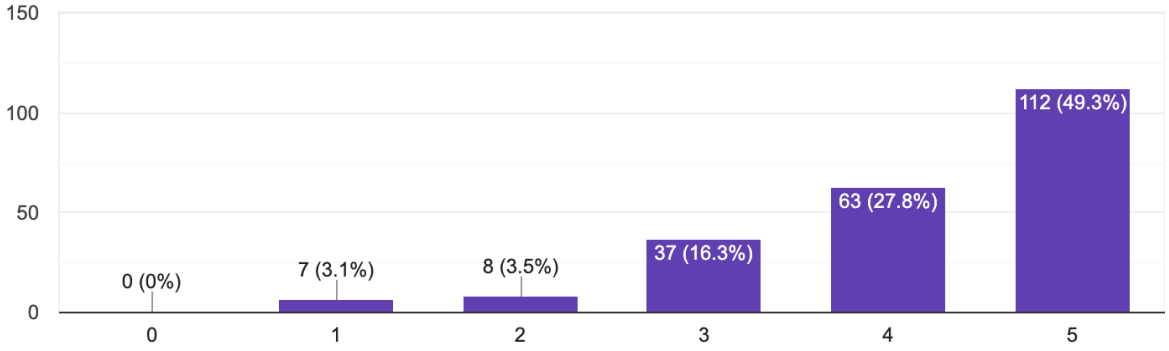


学校生活・学習について

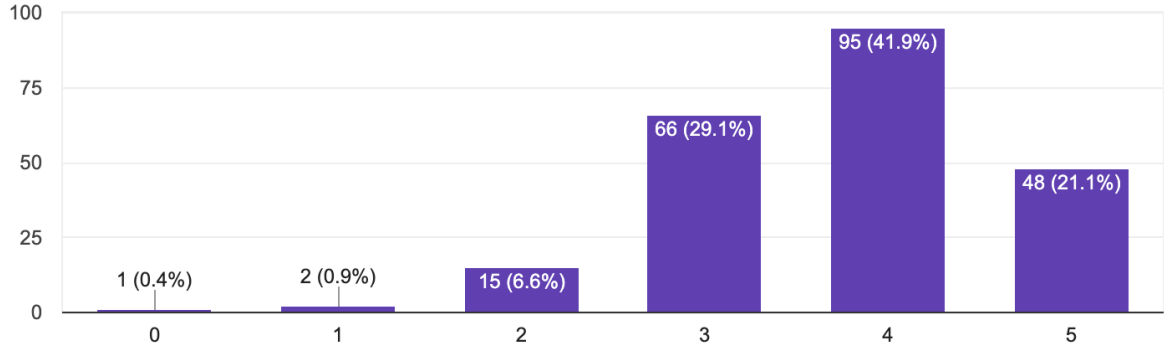
1）学校で自分らしく過ごしている。



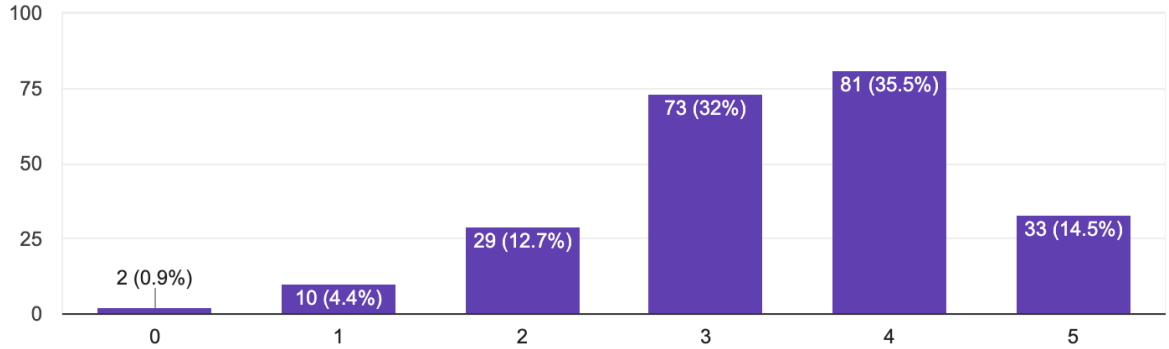
2）SISに入学してよかった。



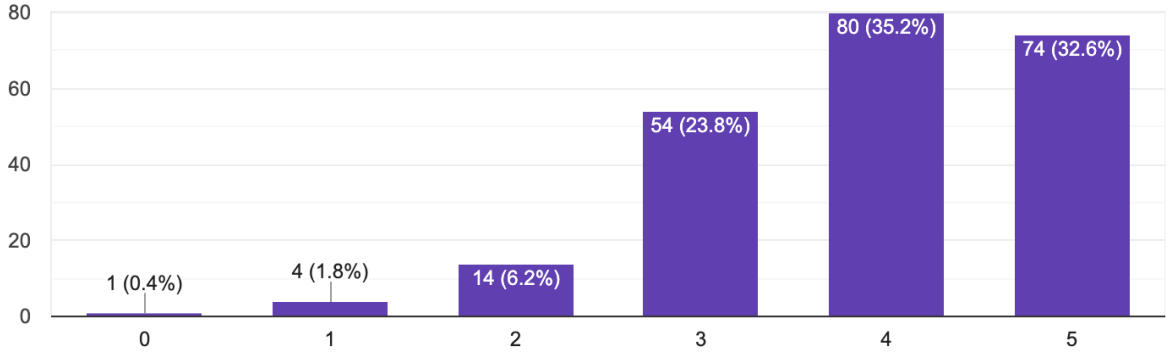
3）学校での授業に全体的に楽しく取り組んでいる。



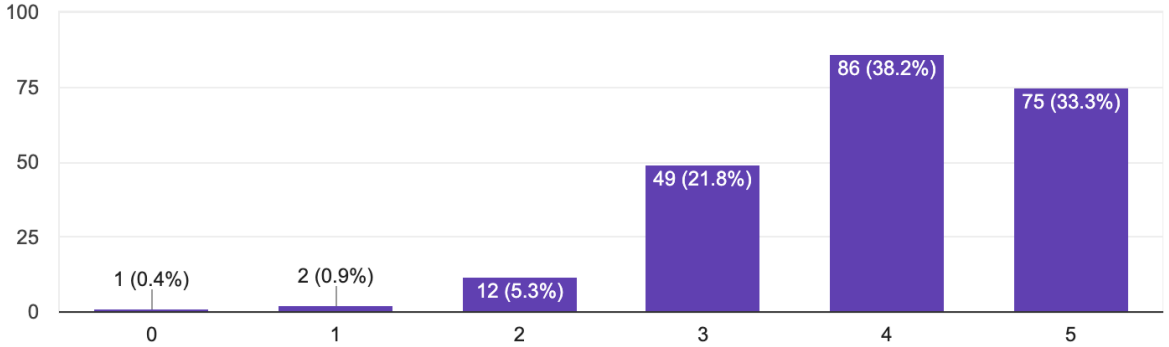
4）生徒は学校での授業を全体的に楽しく取り組んでいる。



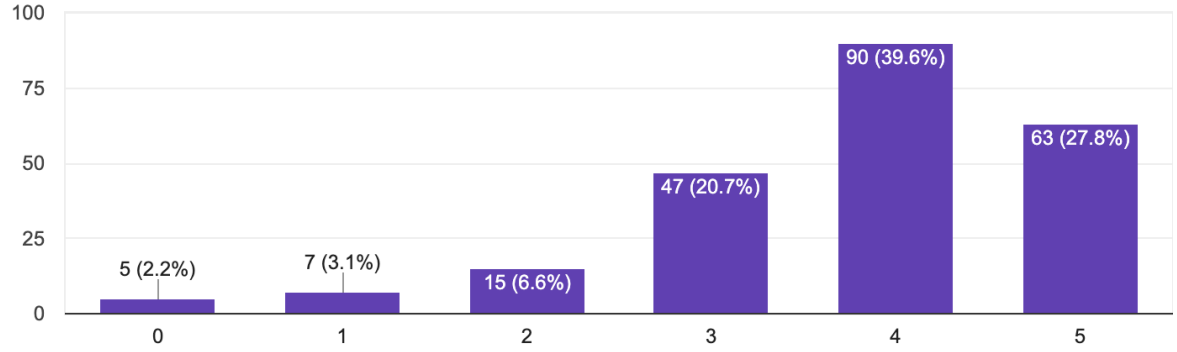
5）先生は授業の進め方や成績のつけ方などについて学期のはじめに説明をしてくれている。



6）リサーチの仕方やプレゼンテーションについて学ぶのは楽しく意義があると感じる。

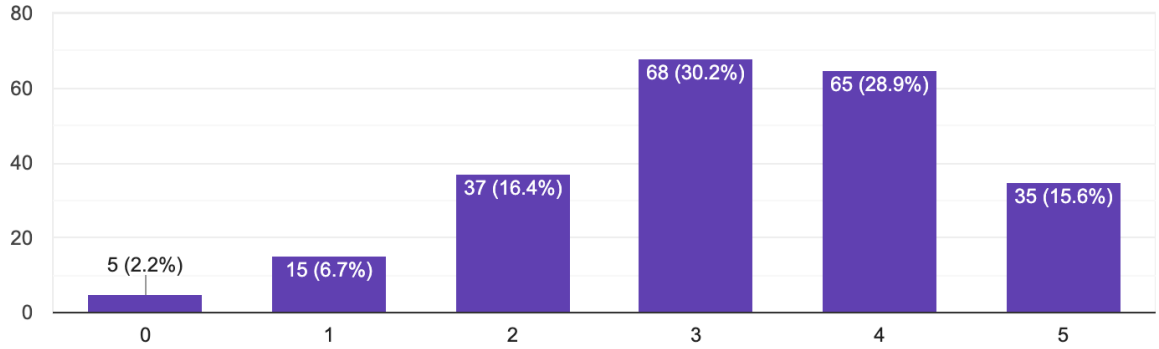


7）試験や宿題をする時のアカデミック・オネスティについて先生から指導を受けている。

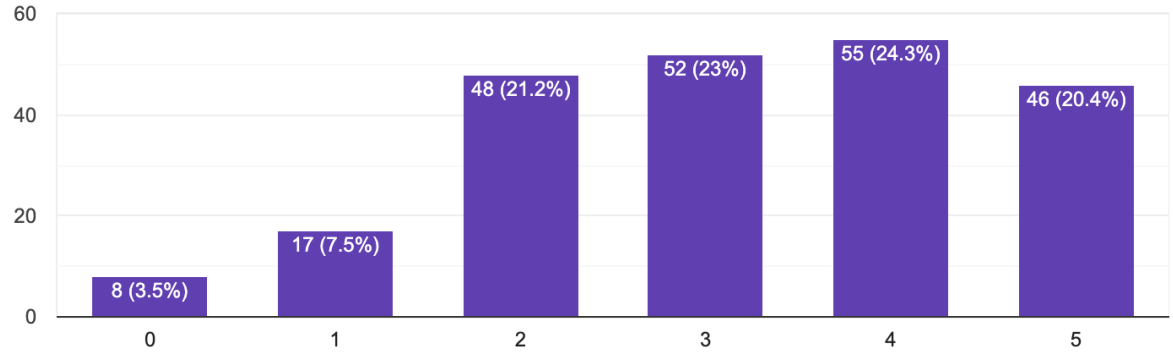


Two Schools Together

8）OISの生徒や教員と日常的に交流する機会が多くある。

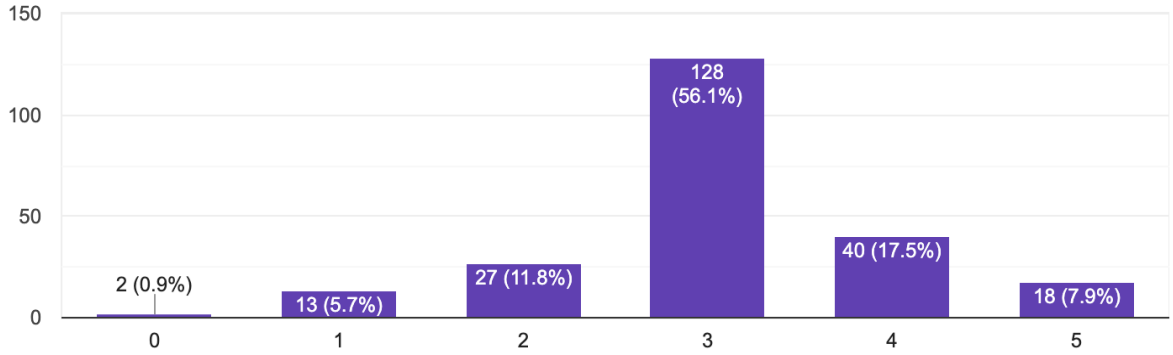


9）OISがそばにあることで、自分の生活や学習が実際に豊かになっていると感じる。

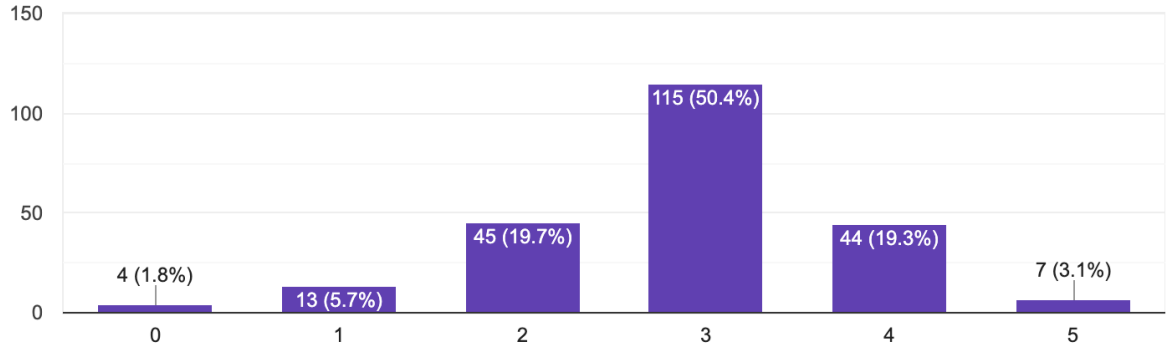


生徒活動・国際交流

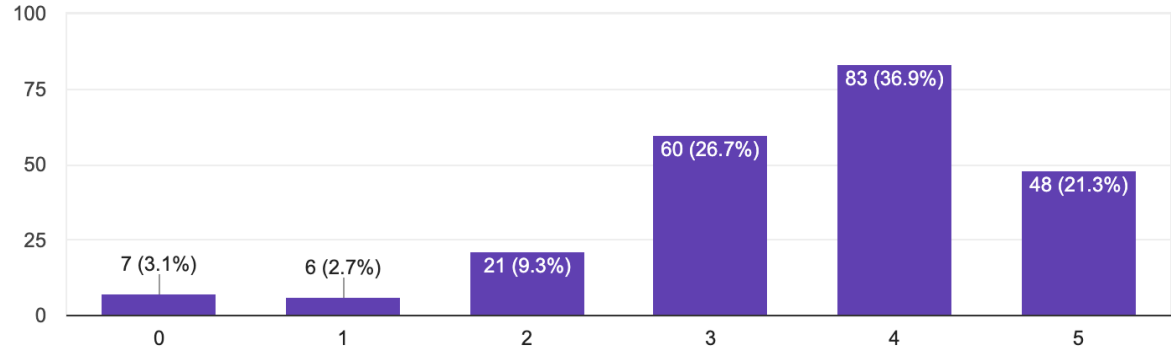
10）SISが提供している授業外の活動（クラブなど）の機会は適切なものである。



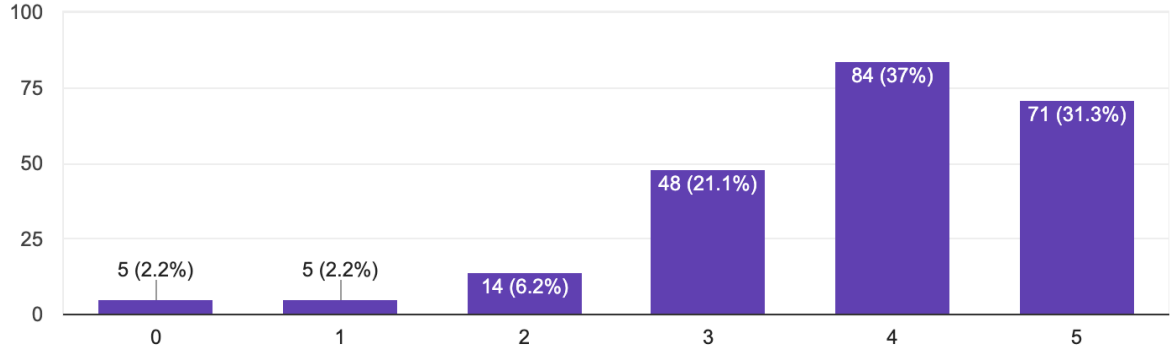
11）いろいろな活動についての情報の量は適切である。



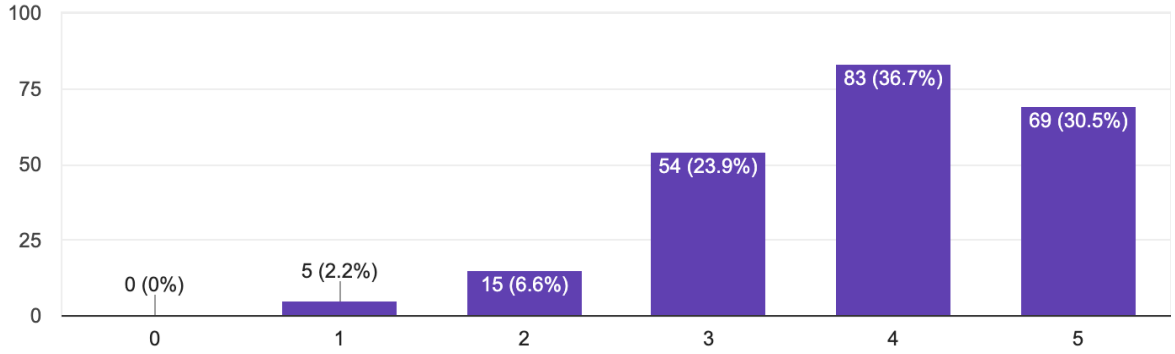
12） キャンプや遠足などの体験学習を通して、自身の自主性、創造力や協力する心が養われていると感じる。



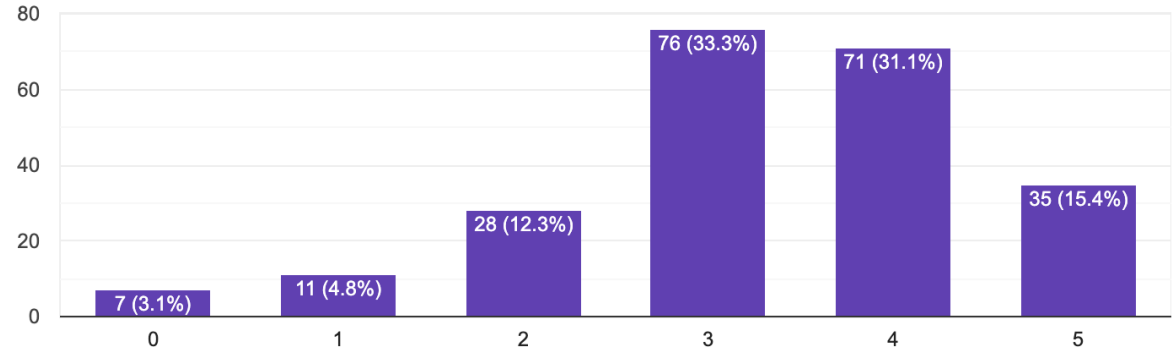
13）夏休み期間中の活動（キャンプやフィールドスタディなど）は充実している。



14）SISでは、国際的な視野が広がるプログラムが十分用意・紹介されている。

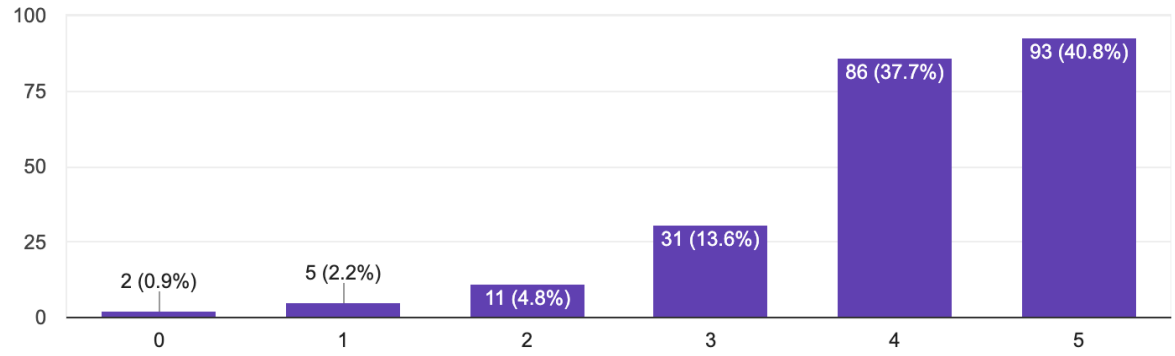


15）SISでは、授業の中で、世界の一員として生きていることを実感できる機会が多くある。

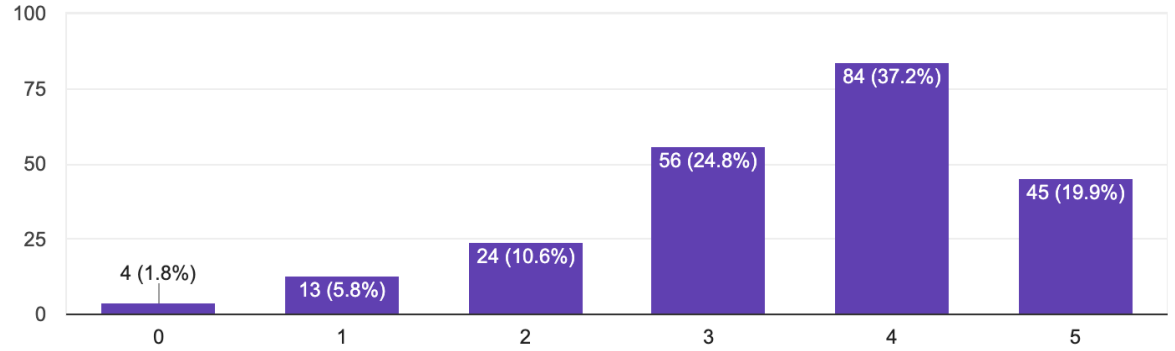


インフォメーションテクノロジー

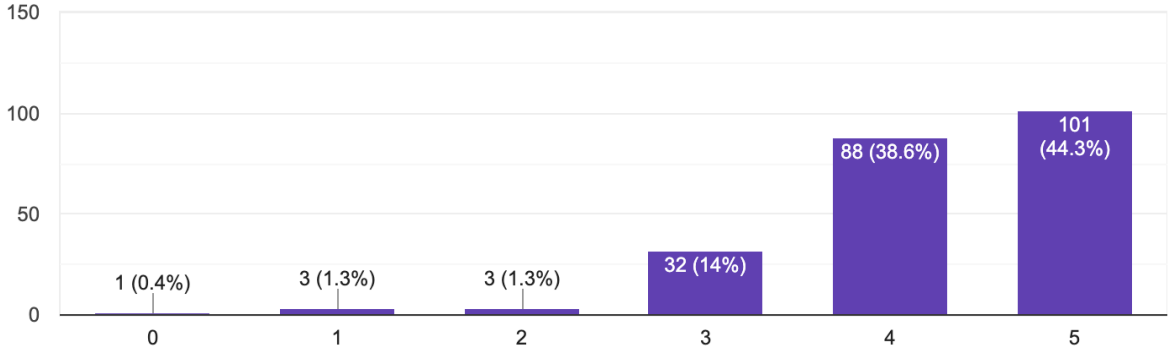
16）学校で、授業に必要なことでICT機器(コンピューターやiPadなど）を使うことができる。



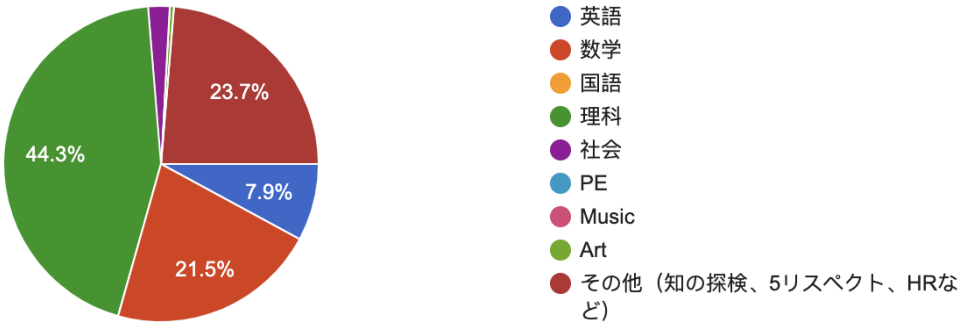
17）授業で、ICT機器やインターネットの使い方をよく教えてもらっていると思う。



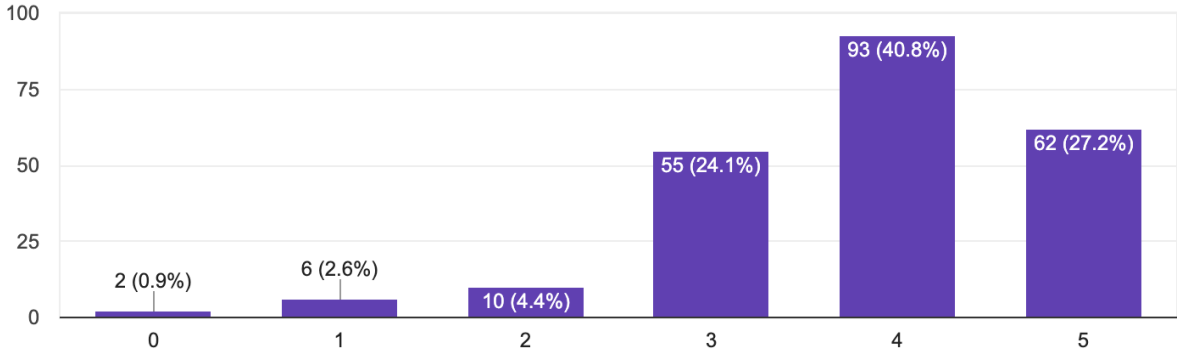
18）ICT機器やインターネット(携帯電話・スマートフォンを含む)を使うときに気を付けるべきこと（犯罪行為、いじめなど）についてよくわかっている。



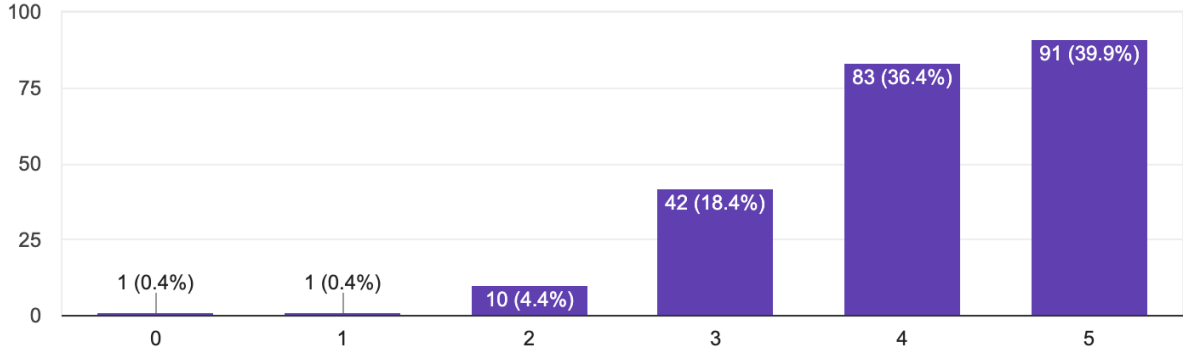
20）授業中にICT機器を最も活用している教科を以下の中から選んでください。選択肢→英語、数学、国語、理科、社会、PE、Music、Art、その他（知の探検、５リスペクト、HRなど）



20）ネットワーク上で個人情報を守る方法についてよくわかっている。

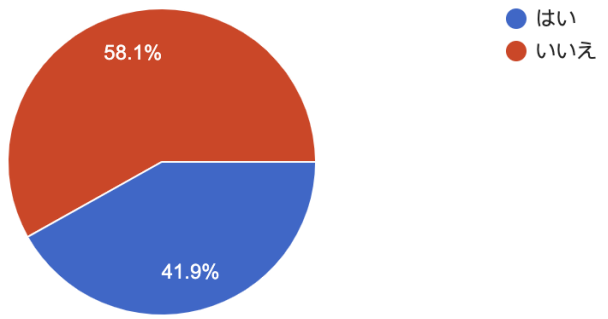


21）2017年度から始まったBYOD（高校生になるとパソコン等自分のデバイスを学校に持ってくる）という学校の方針を理解している。

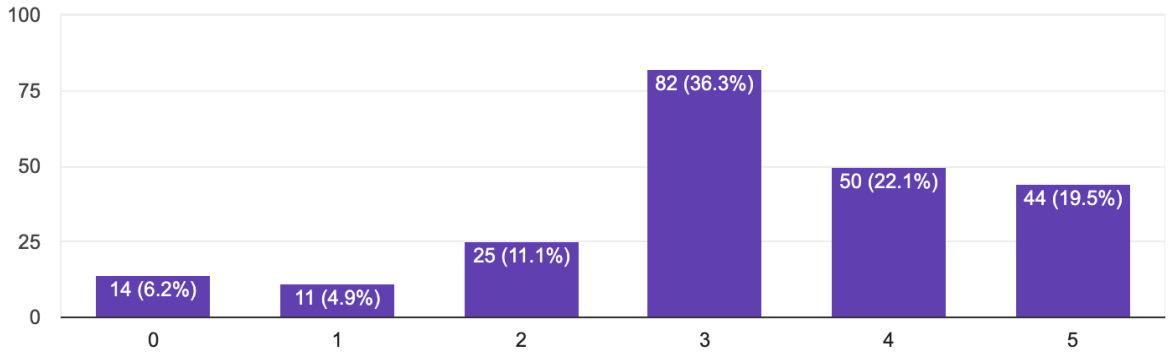


関西学院

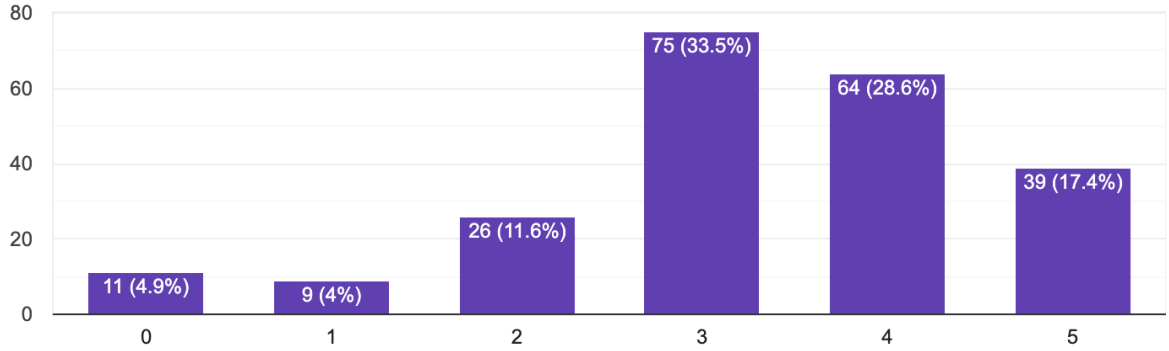
22）私は、関西学院のスクールモットーが"Mastery for Service"（マスタリー・フォア・サービス）であることを知っている。



23）私は、関西学院のスクールモットー"Mastery for Service"（マスタリー・フォア・サービス）に共感している。



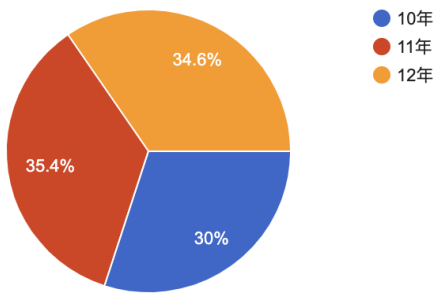
24）学校は、「"Mastery for Service"を体現する世界市民」の育成につながる教育を実践している。



2019年度　関西学院千里国際中等部・高等部
学校評価　高等部アンケート

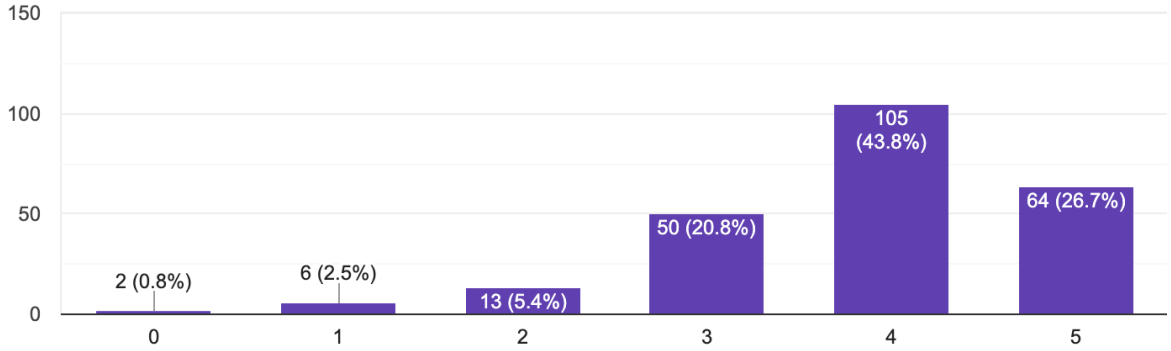
2019 SIS MS/HS SCHOOL EVALUATION REPORT - HS STUDENT QUESTIONNAIRE

学年	回答数	学年人数	回答率
10	72	92	78.3%
11	85	93	91.4%
12	83	101	82.2%
全	240	286	83.9%

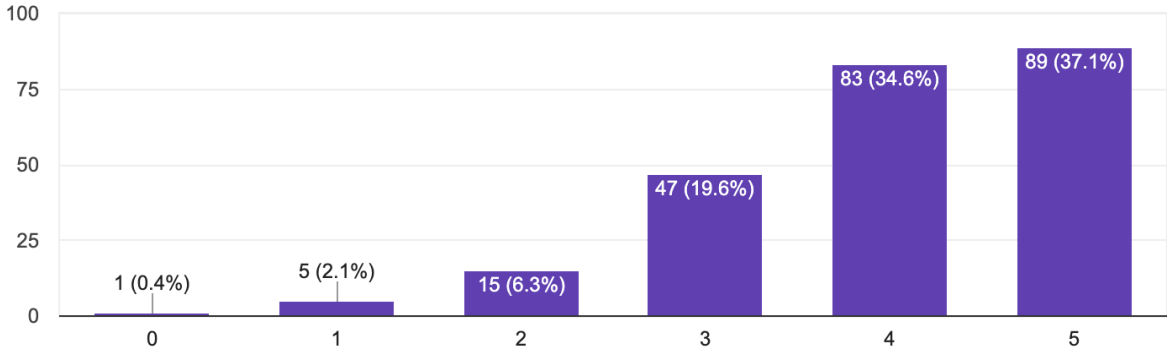


学校生活・学習

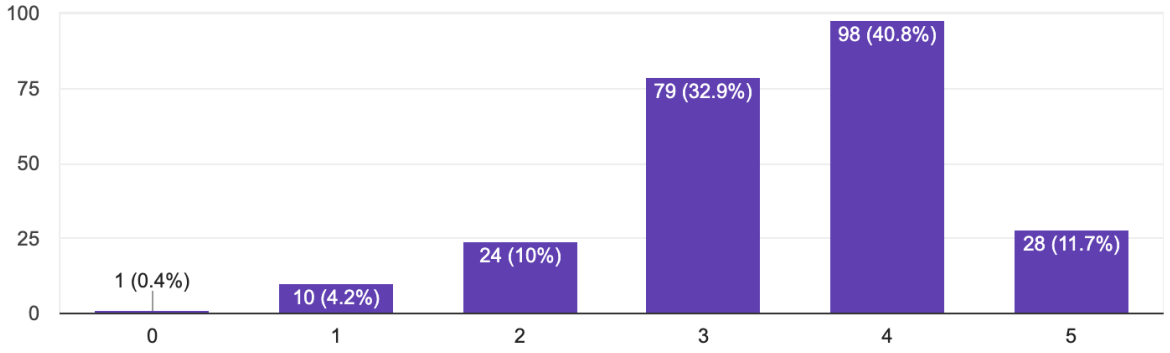
1）学校で自分らしく過ごしている。



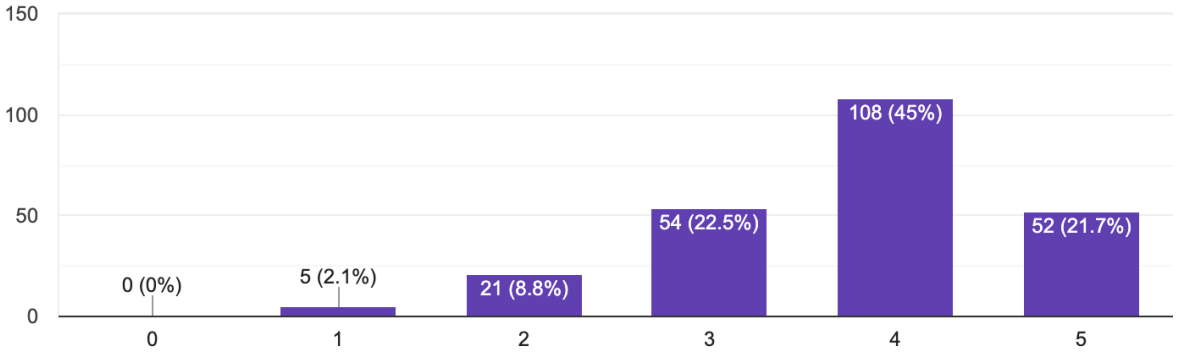
2）自分はSISに入学してよかった。



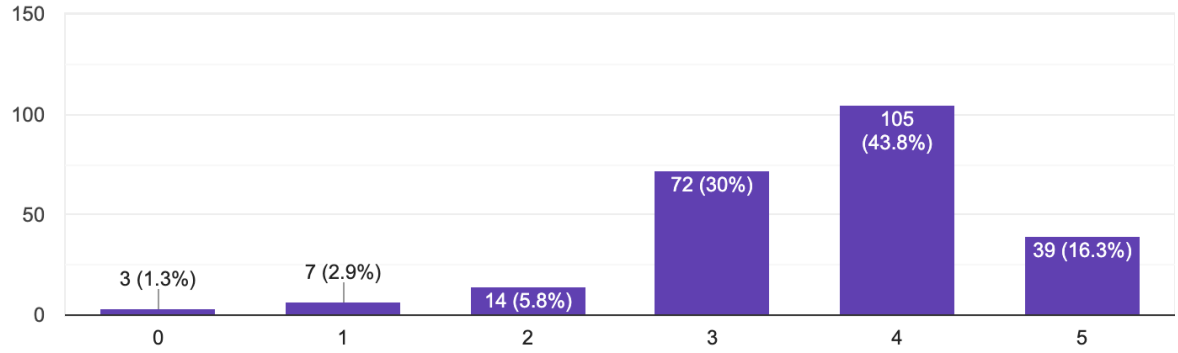
3）学校での授業に全体的に満足している。



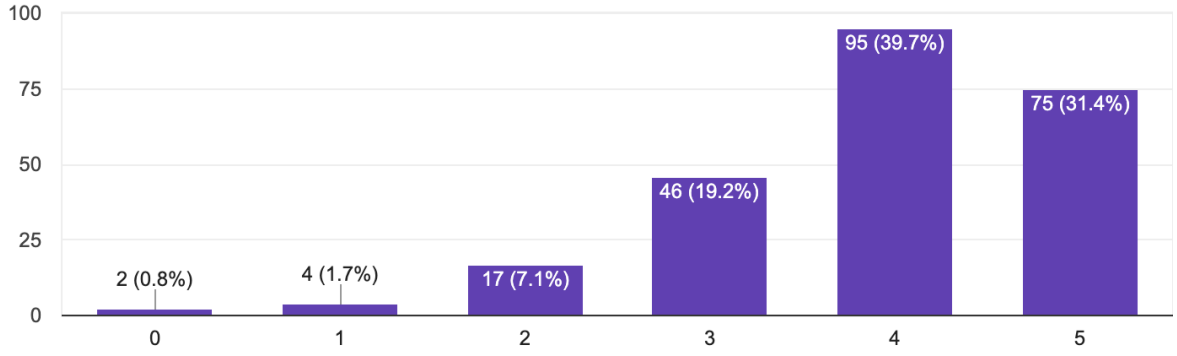
4）自分は意欲的に学習に取り組んでいると思う。



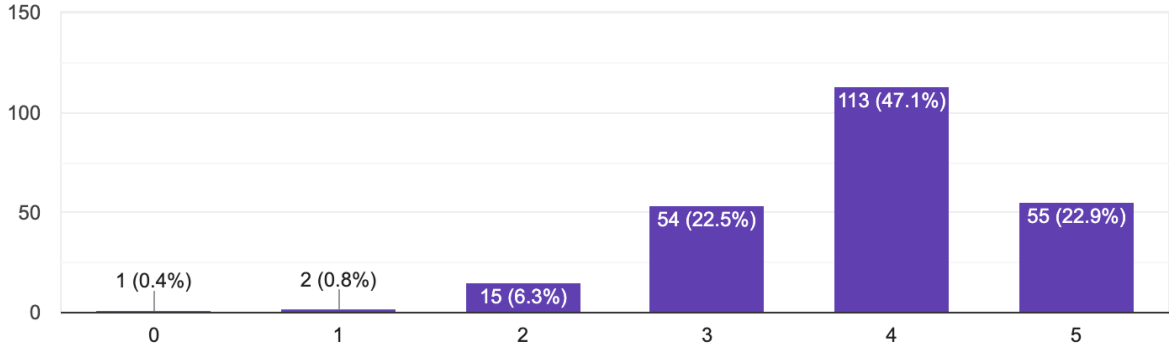
5）先生から授業の進め方や成績のつけ方などについて十分な説明を受けていると感じる。



6）授業を選択し、自分で時間割を作成するシステムに満足している。

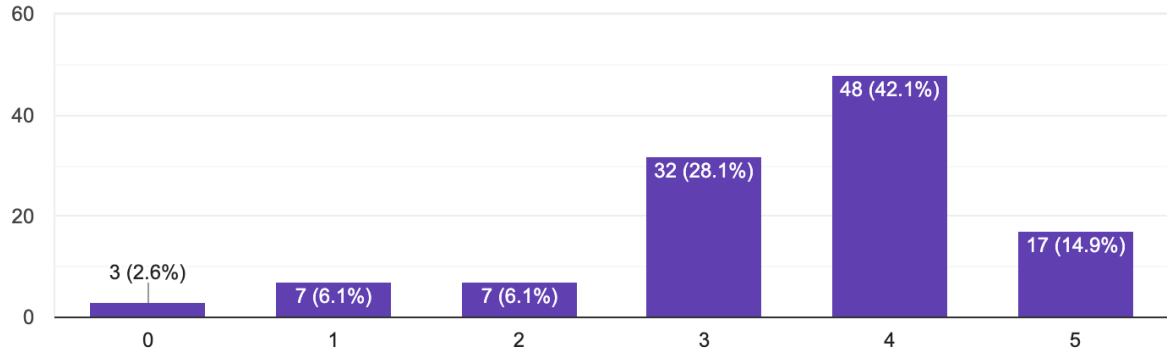


7）リサーチの仕方やプレゼンテーションなどの技術を体系的に学べていると感じる。

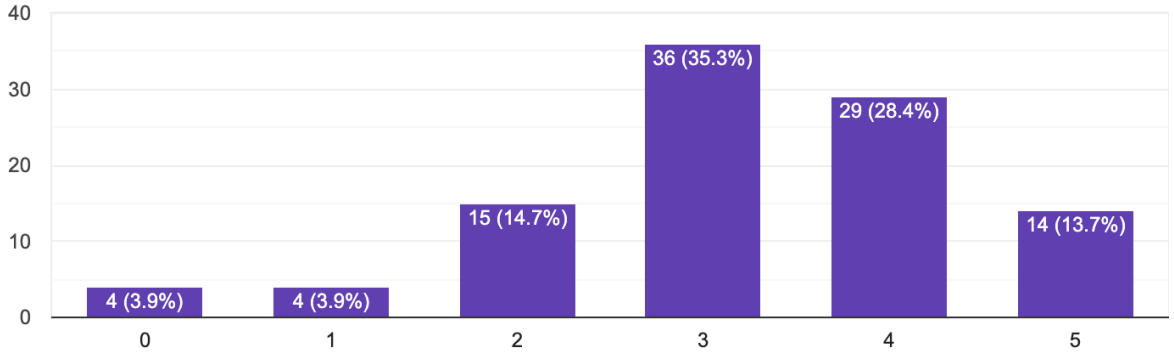


8）SGH課題研究の取り組みについて（学年のところのみ回答）

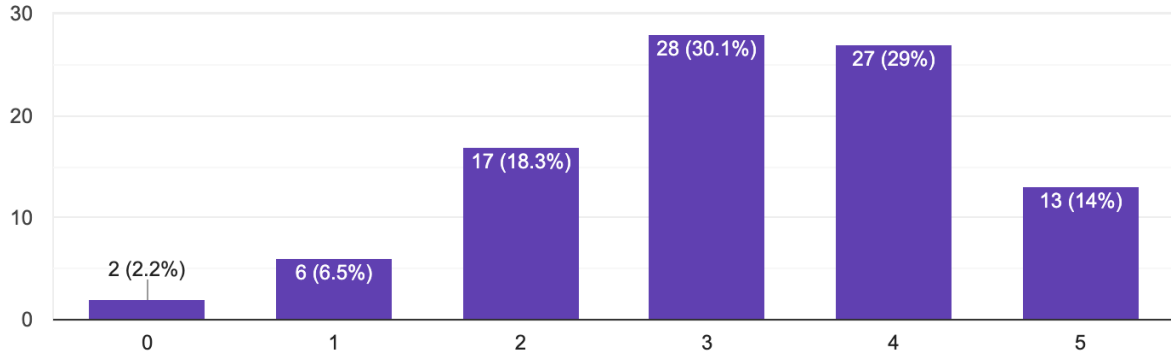
＜10年生のみ＞知の探究の授業での学びを通じ、11年生から本格的に取り組む個人の課題研究が楽しみである。



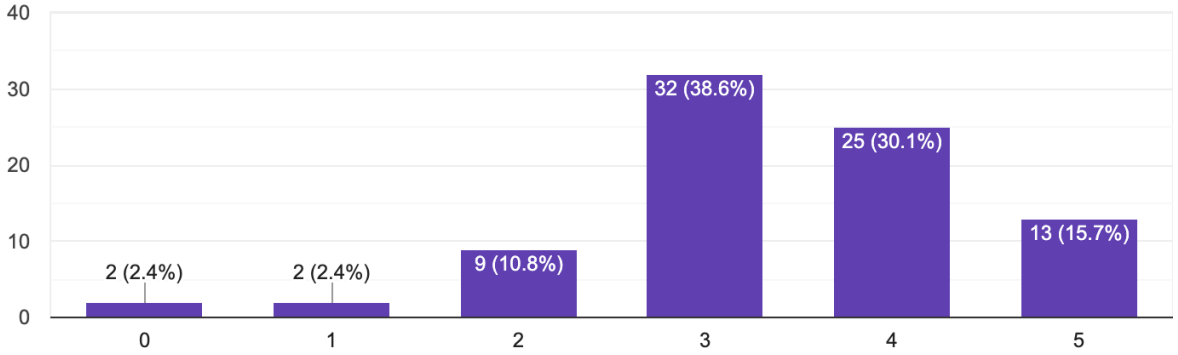
＜11年生のみ＞10年時の知の探究、11年でのフィールドスタディを経て課題研究に取り組むことが自己自身への理解を深めている。



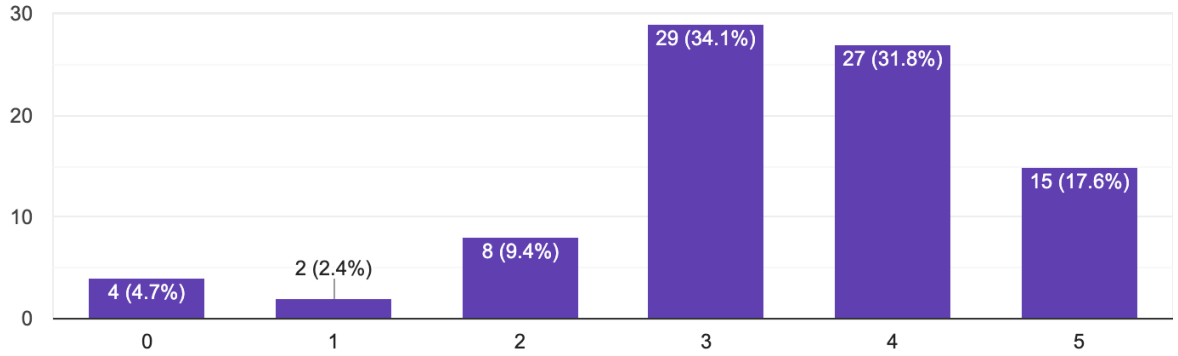
＜11年生のみ＞課題研究への取り組みは、充実感をもたらす楽しいものである。



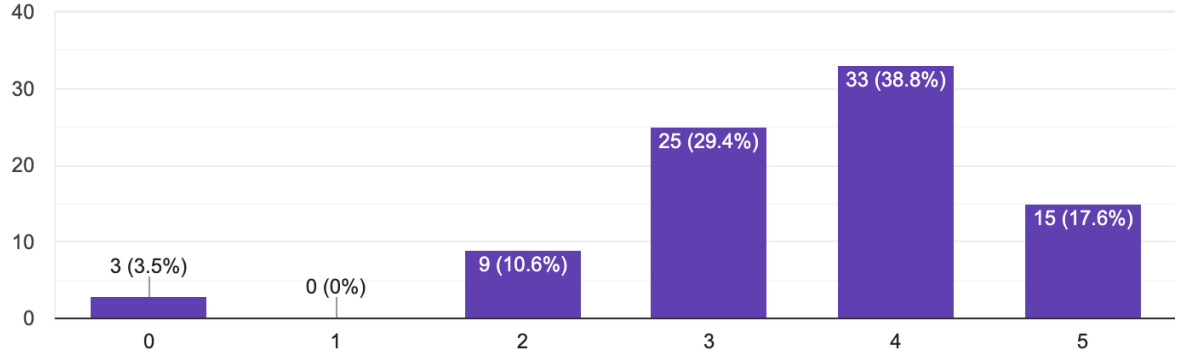
＜12年生のみ＞課題研究への取り組みにより自分自身への理解が深まった。



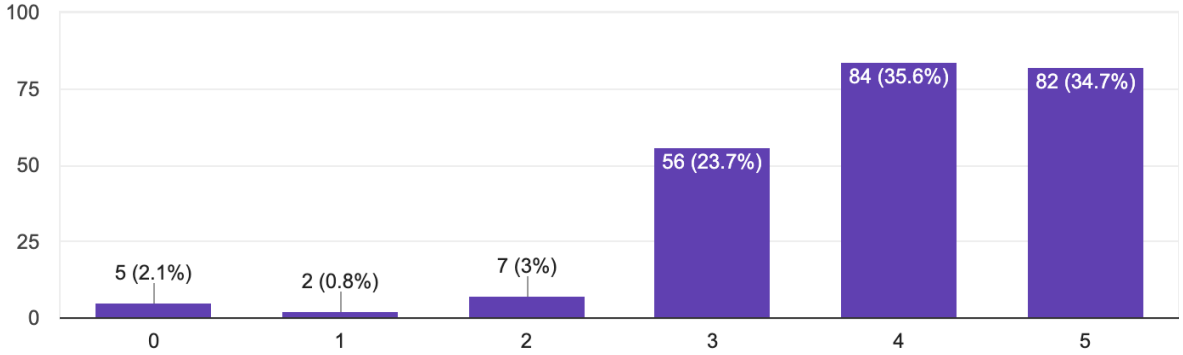
＜12年生のみ＞課題研究への取り組みにより、未来を展望する力が高まった。



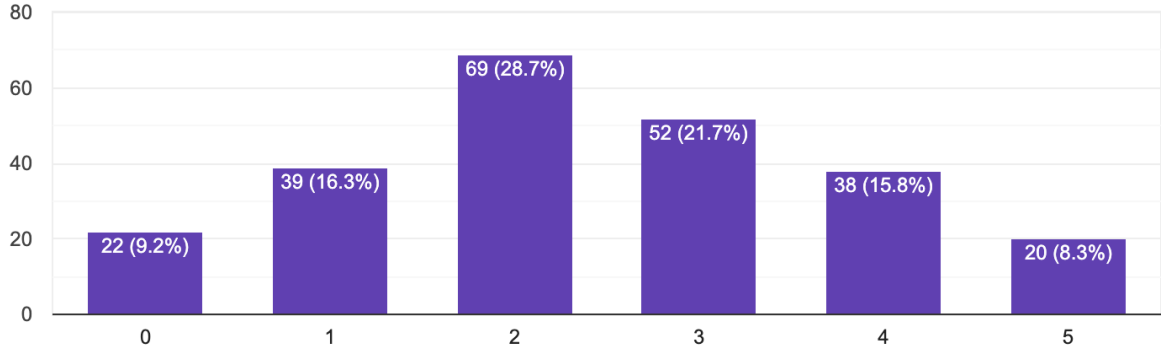
＜12年生のみ＞プログラムを通じて課題解決の力を伸ばすことができた。（他への応用ができたか・できそうか）



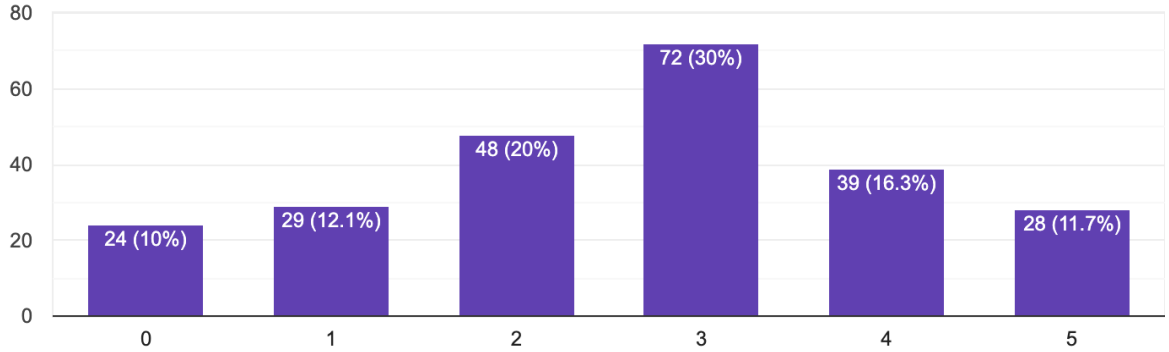
9）試験や課題に取り組む時のアカデミック・オネスティについて、自分は十分な理解を持って実践できている。



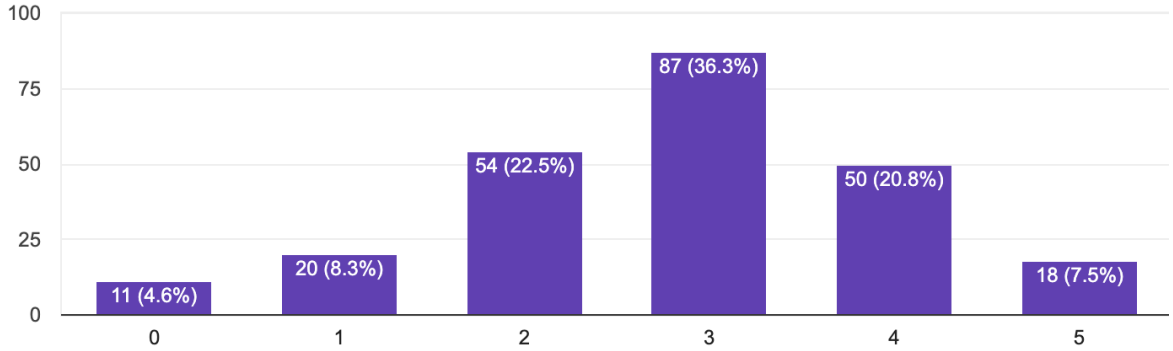
10）OISの生徒や教員と交流する機会が日常生活の中で十分にある。



11）OISが併設されていることで、自分の生活や学習が実際に豊かになっていると感じる。

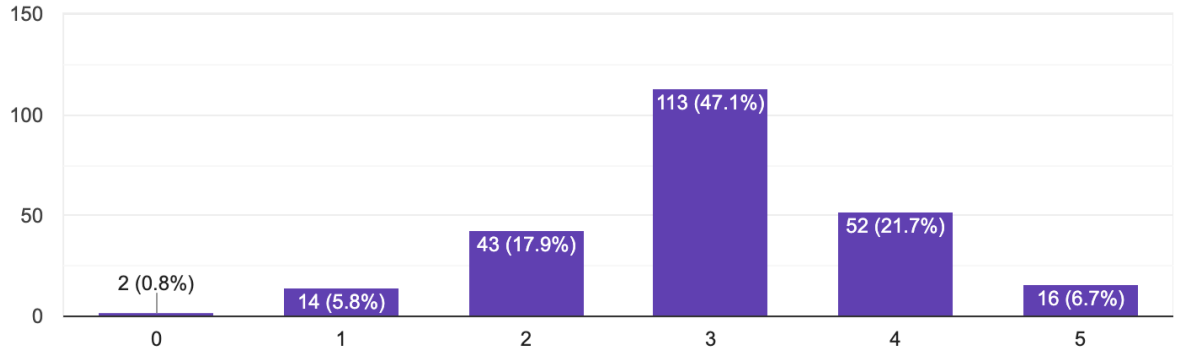


12）SISはOISと共に、「知識と思いやりを持ち創造力を駆使して世界に貢献する個人」を育てている。

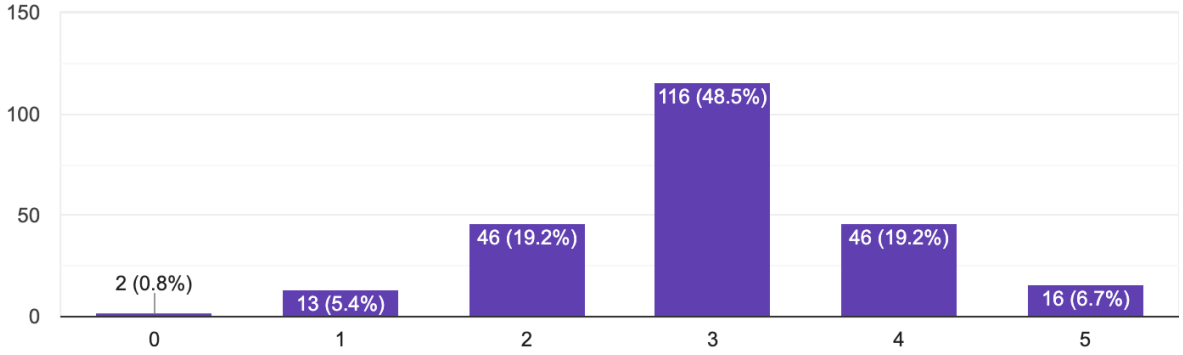


授業外活動・国際理解

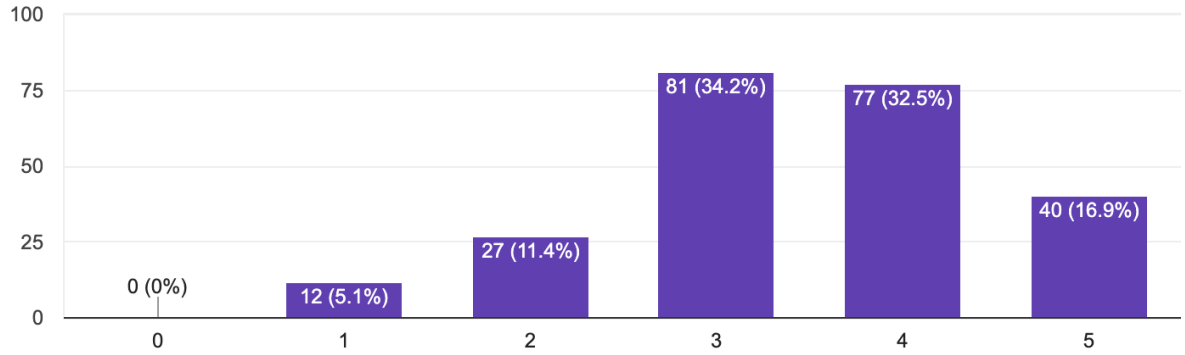
13）SISが提供している授業外の活動（クラブなど）の機会は適切なものである。



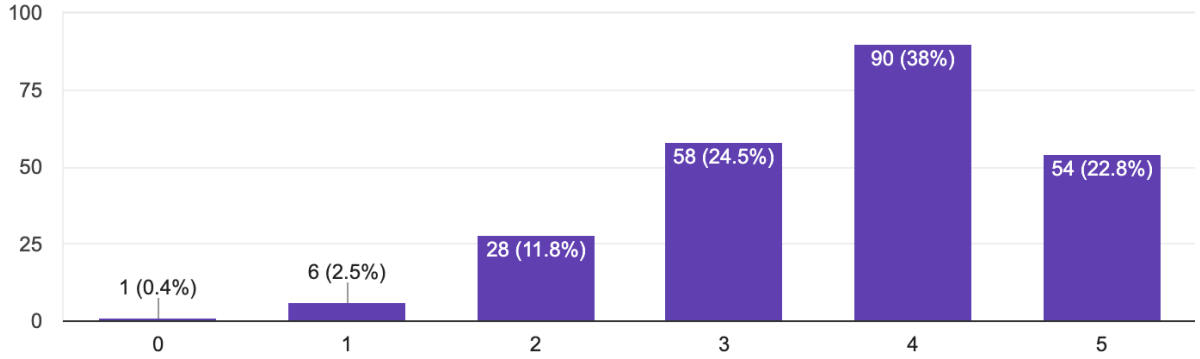
14）様々な活動やイベントに関する情報の量は適切である。



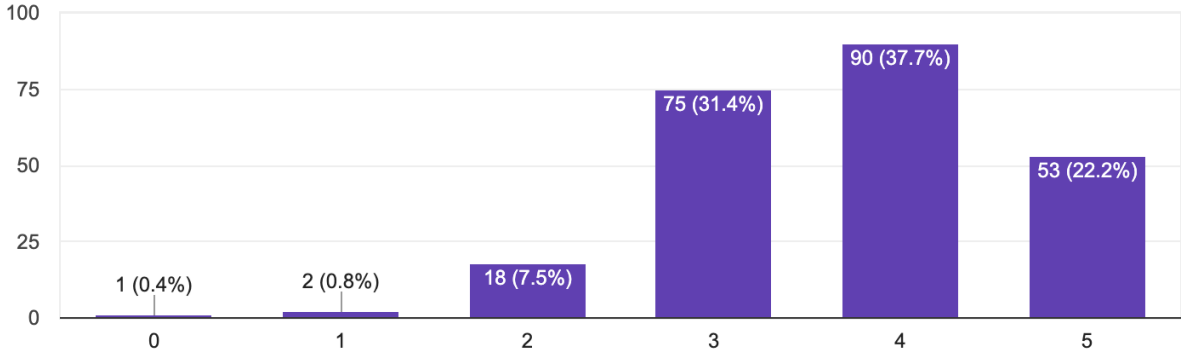
15）キャンプや遠足などの体験学習を通して、自身の自主性、創造力や協力する心が養われていると感じる。



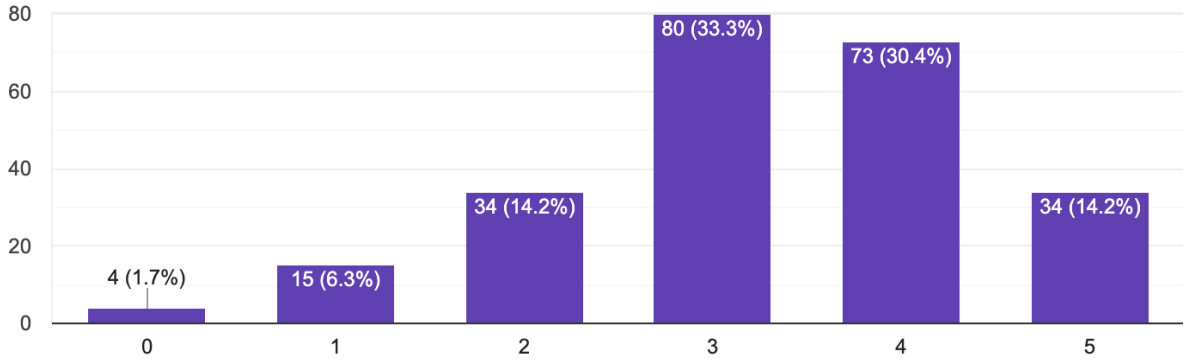
16）夏休み期間中の活動（キャンプやフィールドスタディなど）は充実している。



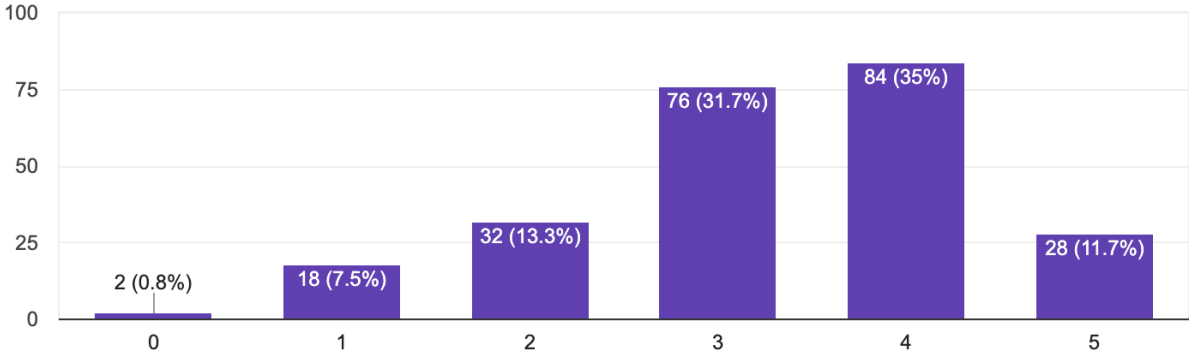
17）SISでは、国際的な視野が広がるプログラムが十分用意・紹介されている。



18）SISでは、授業の中で、地球市民として生きていることを実感できる機会が多くある。

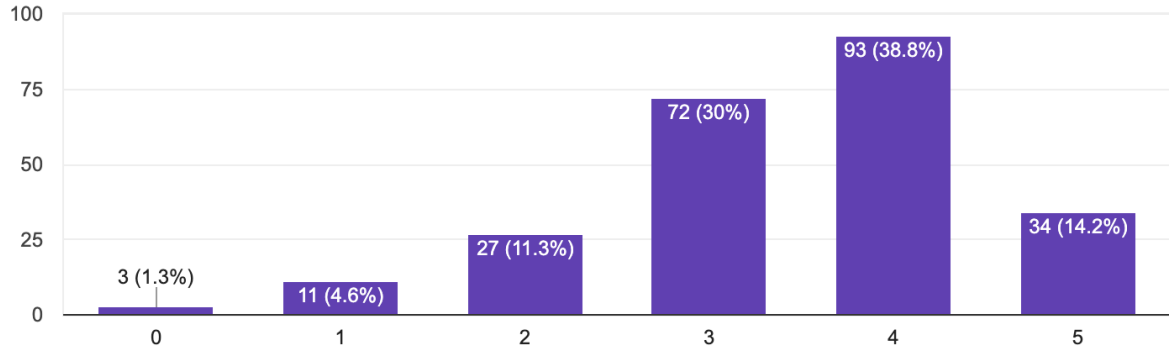


19）授業や授業外の活動を通じて、地球市民としての意識が高まっていることを感じる。

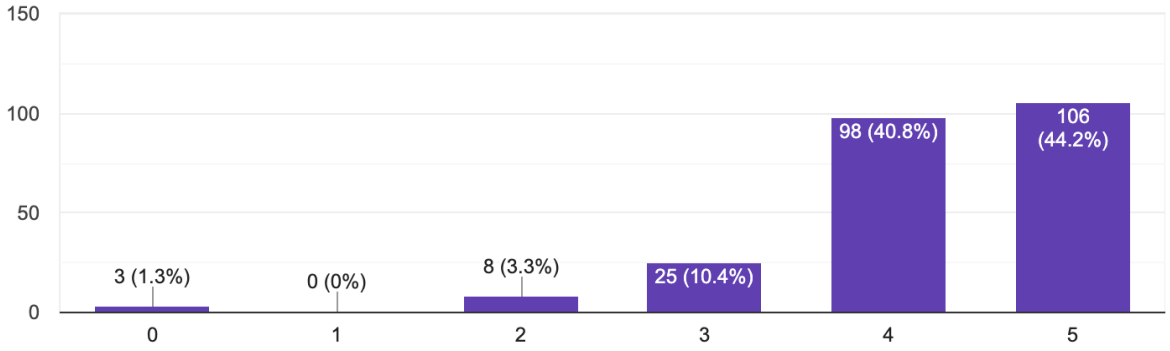


デジタル環境

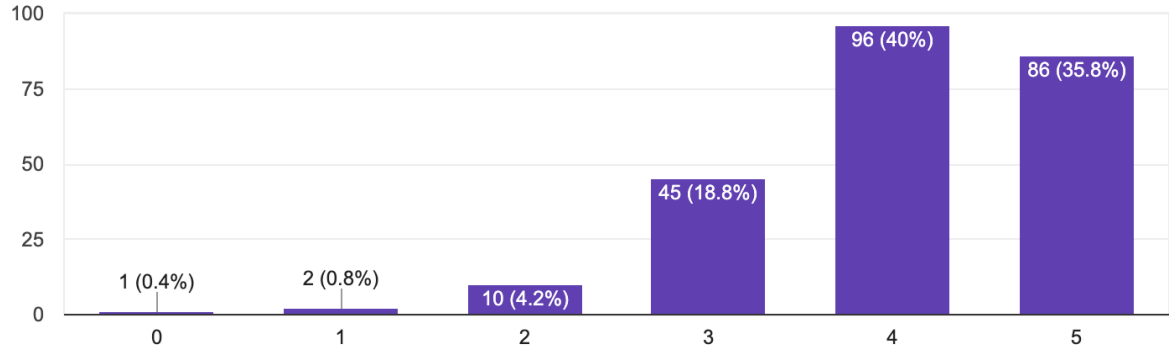
20）学校でのICT環境は充実している。（デバイス、Wi-Fi、プリンターなど）



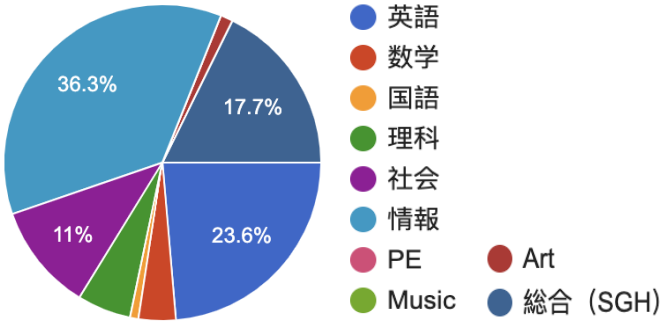
21）ICT機器やインターネット(携帯電話・スマートフォンを含む)を使うときに気を付けるべきこと（犯罪行為、いじめなど）についてよくわかっている。



22）ネットワーク上で個人情報を守る方法についてよく知っている。

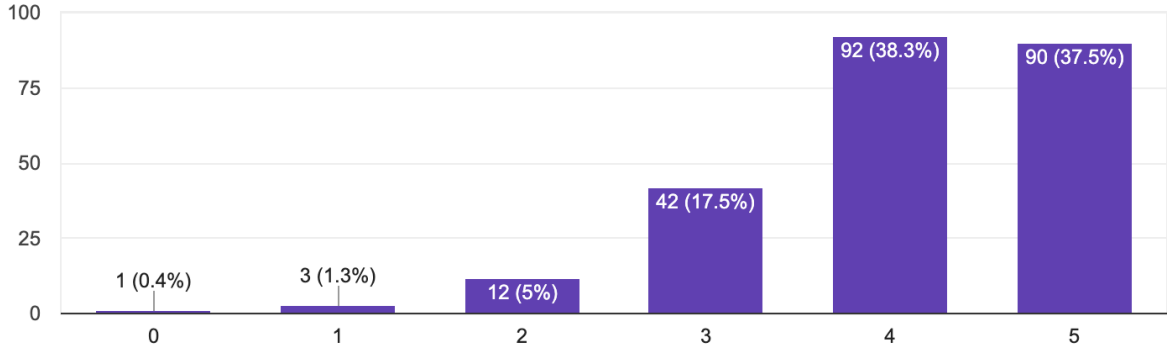


23）授業中にICT機器を最も活用している教科を以下の中から選んでください。

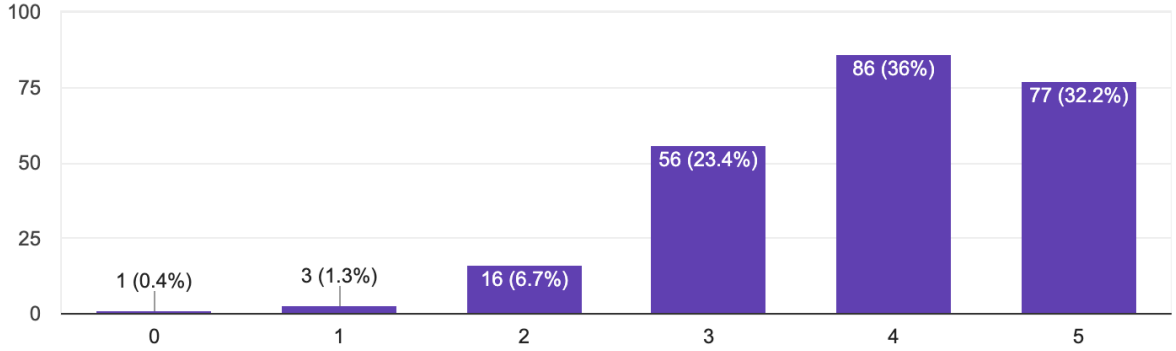


24）BYODによる以下の４つのことについて効果的だと思いますか。

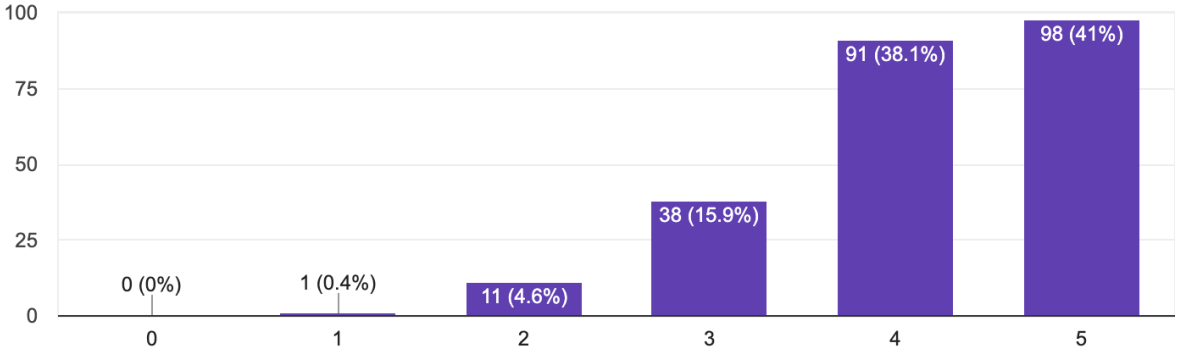
a) 授業での活用



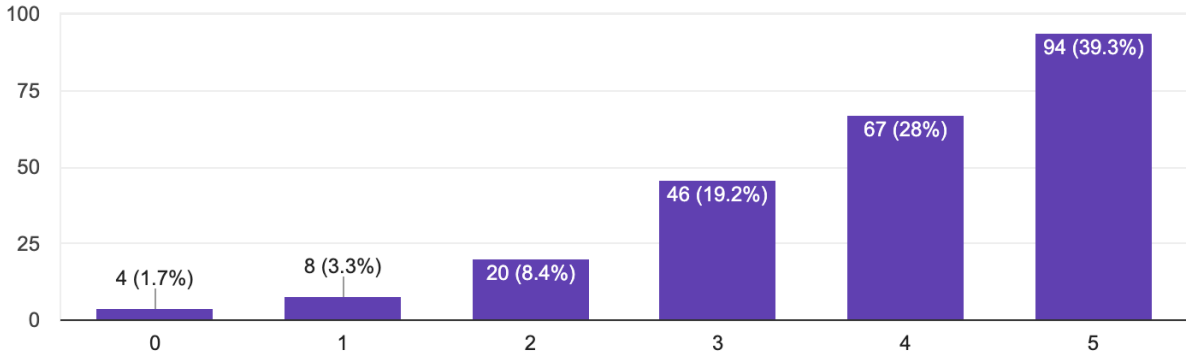
b) 授業以外の学校活動



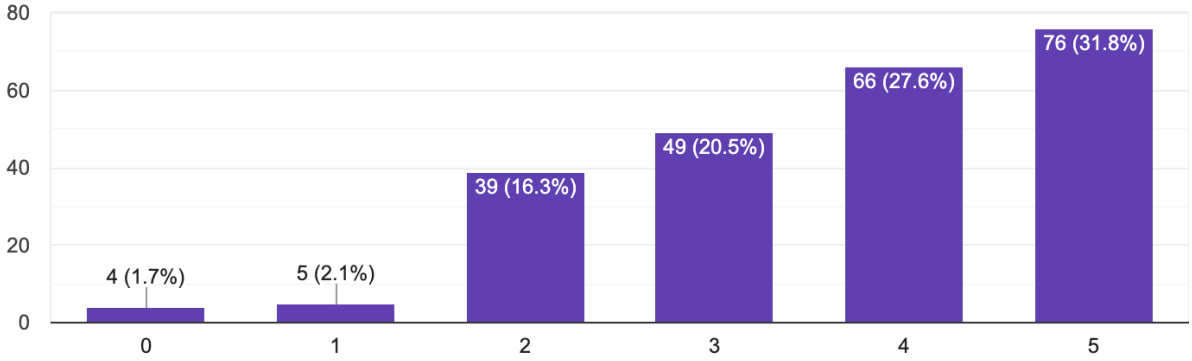
c) 学校とは別の個人的な活用



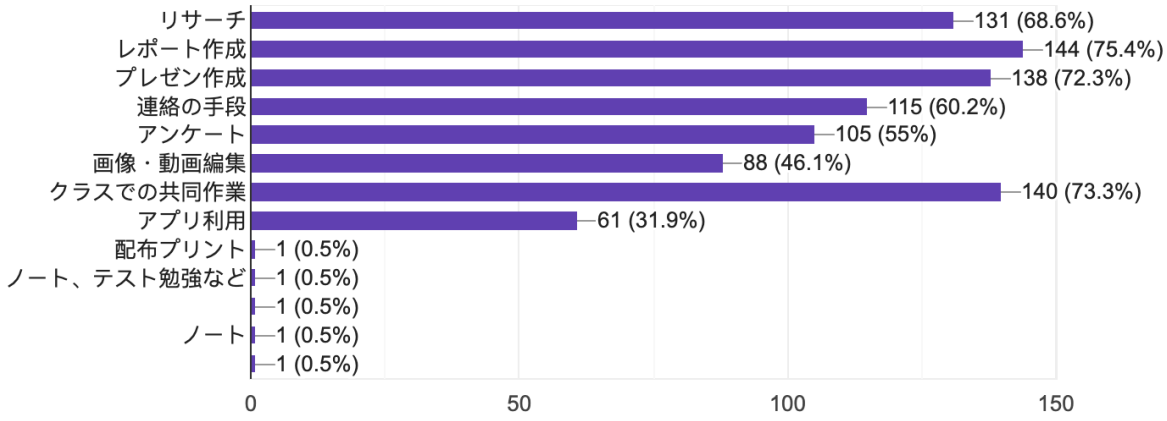
d) 資料の配信などで、紙の使用量削減



25）教員に今よりもっとICTを活用してほしいと思いますか。

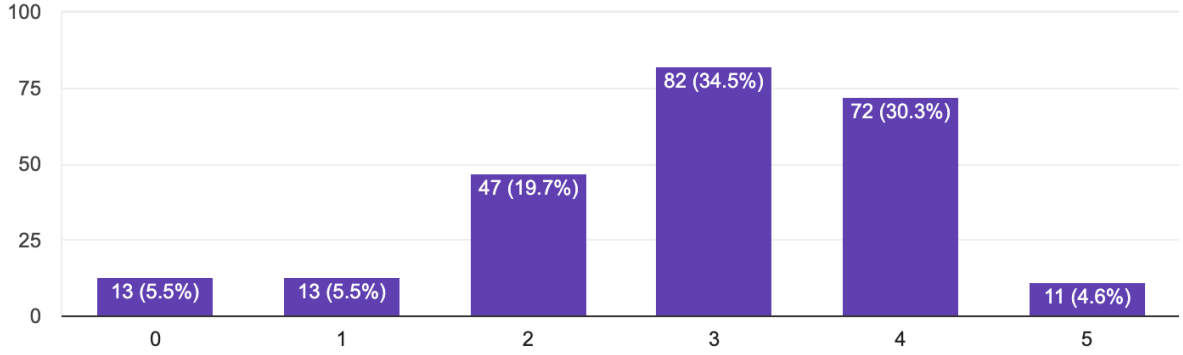


26） Q.25で3以上と答えた人、その活用方法としてあてはまるものにいくつでもチェックをしてください。

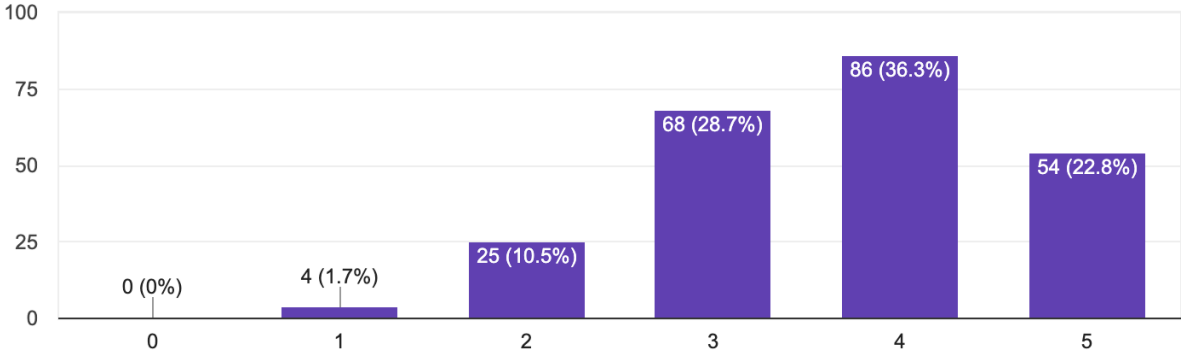


進路

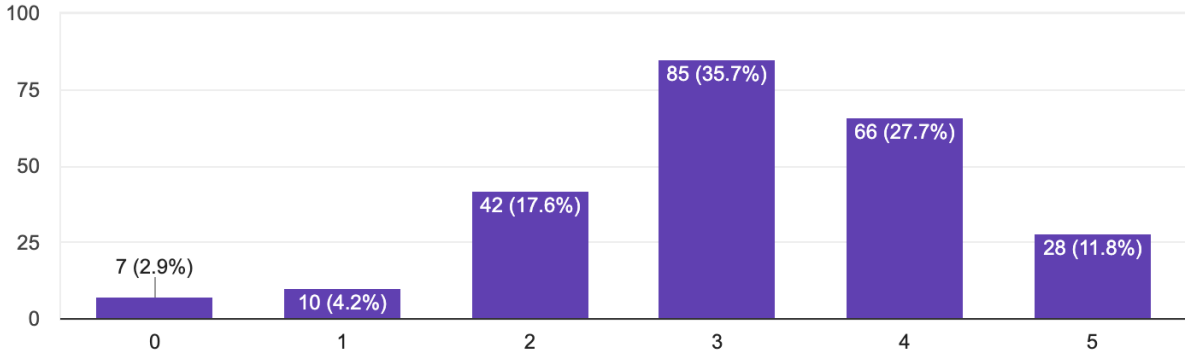
27）国内の進路先に関する情報についての情報が、充分に収集・公開・提供されている



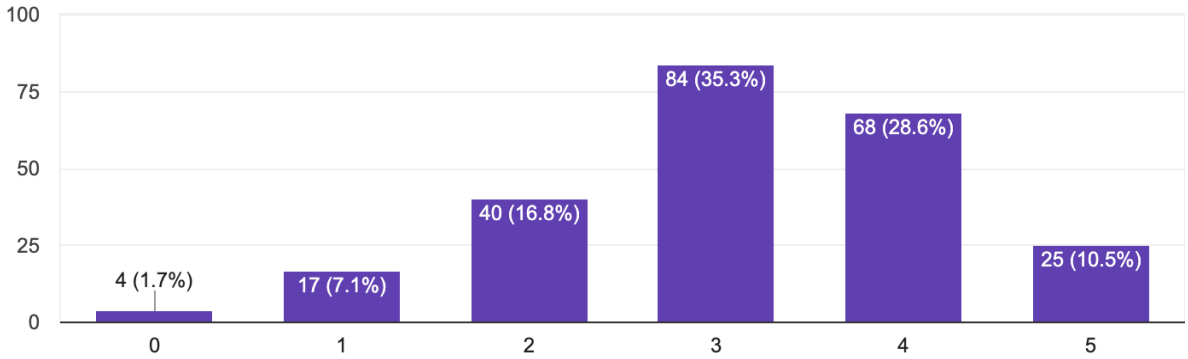
28）関西学院大学についての情報が、充分に収集・公開・提供されている。



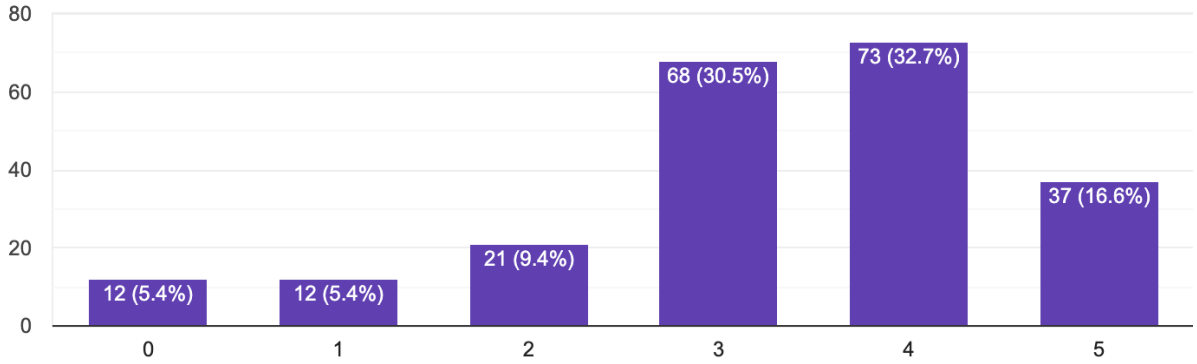
29）海外の進学先についての情報が、充分に収集・公開・提供されている。



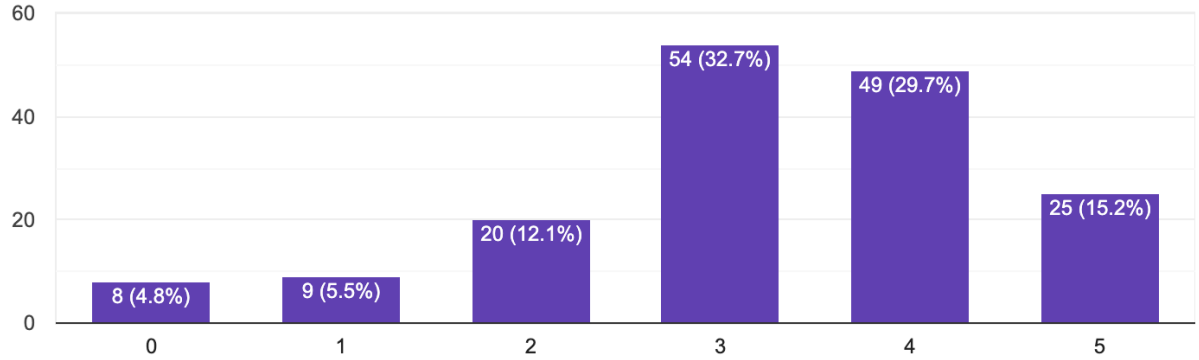
30）進路ガイダンスや個別の進路相談の機会が提供されている。



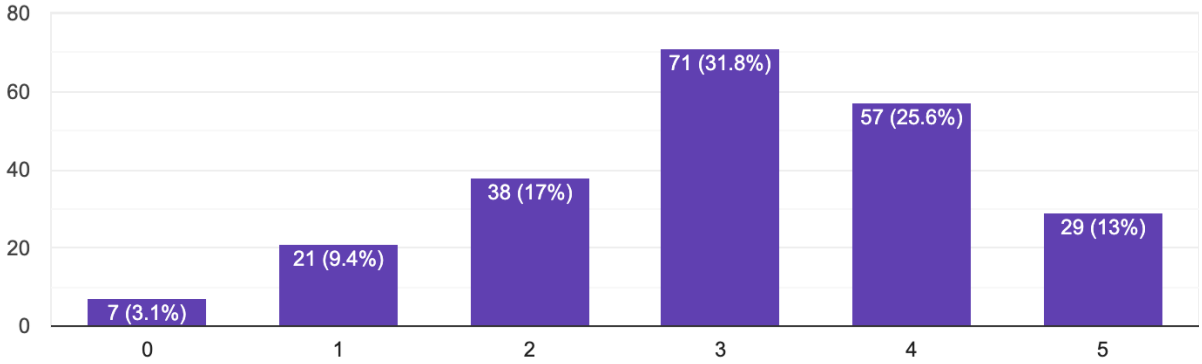
31）G10の秋に大学に行って授業に参加する機会は有意義であった



32）＜G11/G12のみ＞ G11の秋に参加した学部選択説明会は有意義であった。

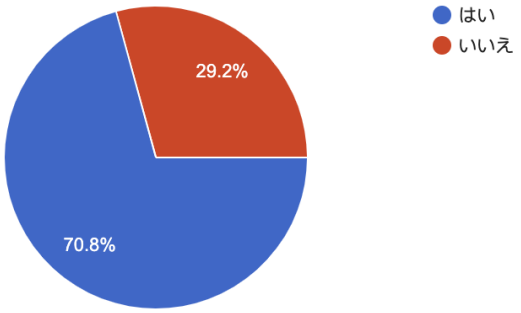


33）キャリア講演会（関西学院大学の先生のキャリア選択のお話を聞く）は、自分の進路を考えるのに役に立った。

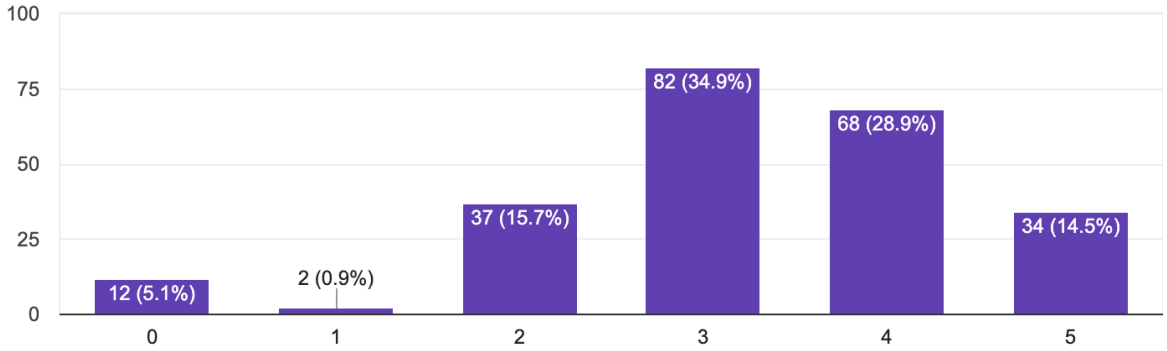


関西学院

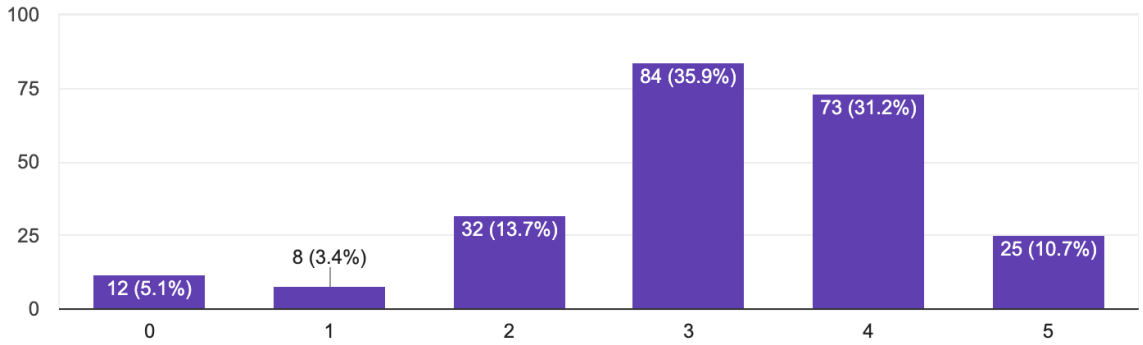
34）私は、関西学院のスクールモットーが"Mastery for Service"（マスタリー・フォア・サービス）であることを知っている。



35）私は、関西学院のスクールモットー"Mastery for Service"（マスタリー・フォア・サービス）に共感している。



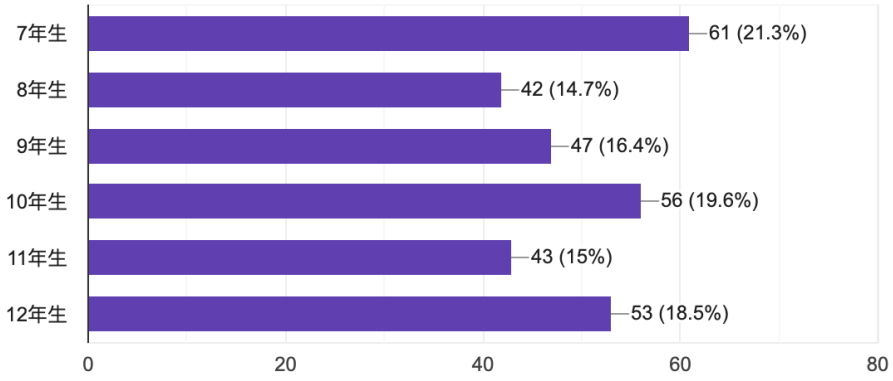
36）学校は、「"Mastery for Service"を体現する世界市民」の育成につながる教育を実践している。



2019年度　関西学院千里国際中等部・高等部
学校評価　保護者用アンケート

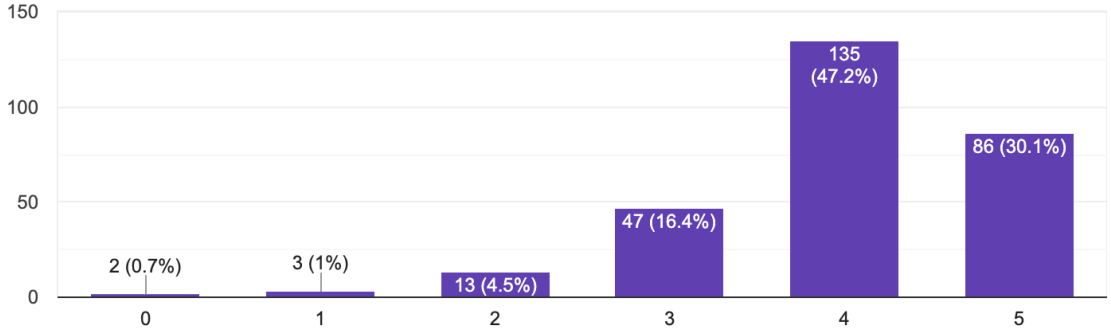
2019 SIS MS/HS SCHOOL EVALUATION REPORT - PARENT QUESTIONNAIRE

家庭数 491
回答数 286
回答率 58.2%

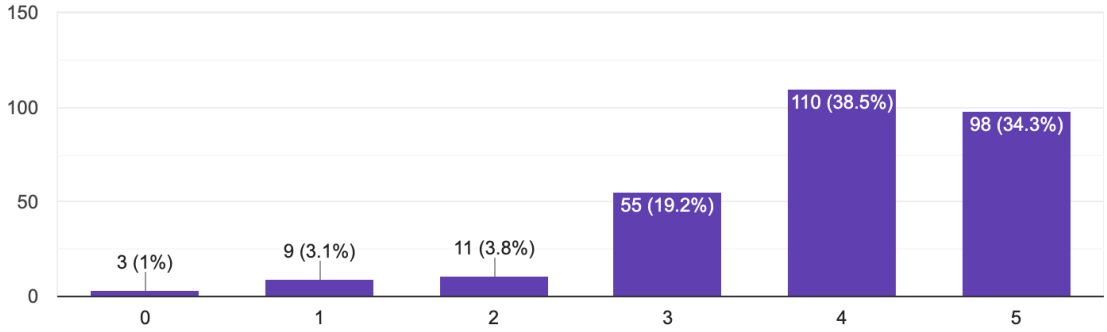


学校生活・学習

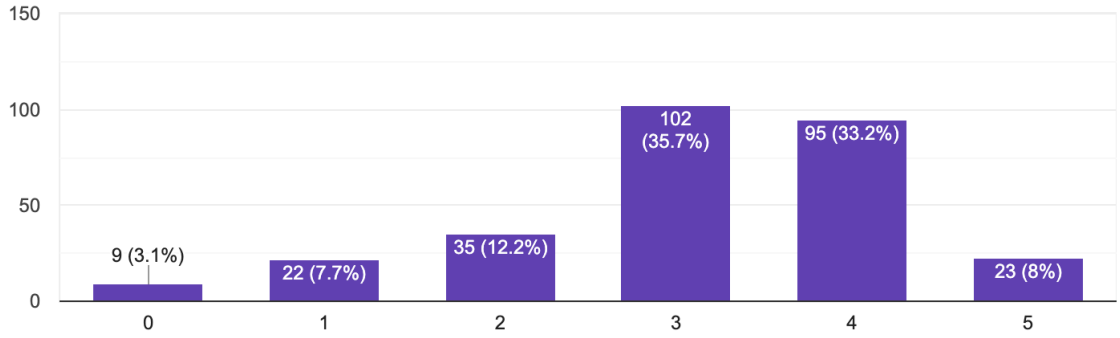
1）生徒は学校で自分らしく過ごしている。



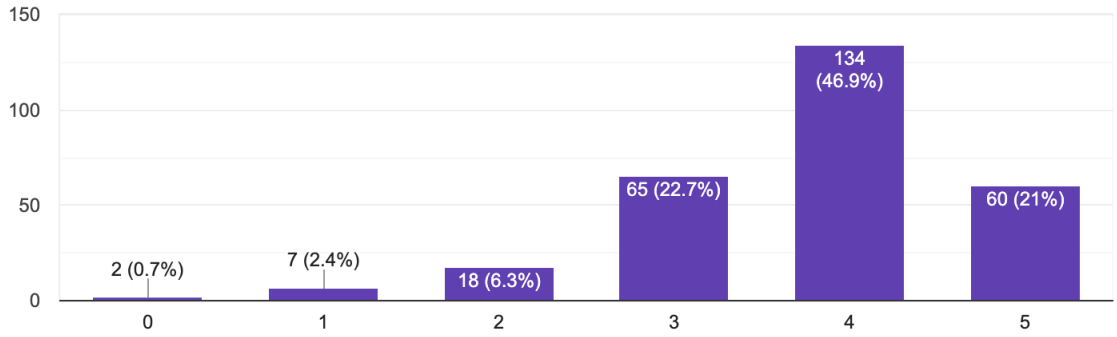
2）SISに入学させてよかった。



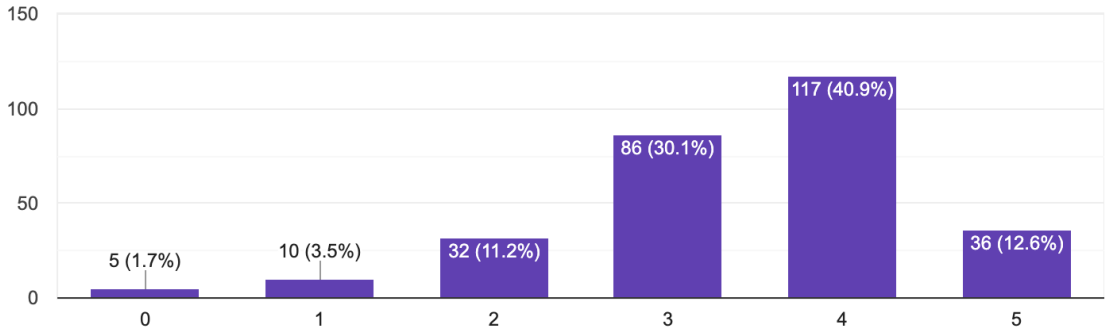
3）学費に見合う教育を受けていると感じる。



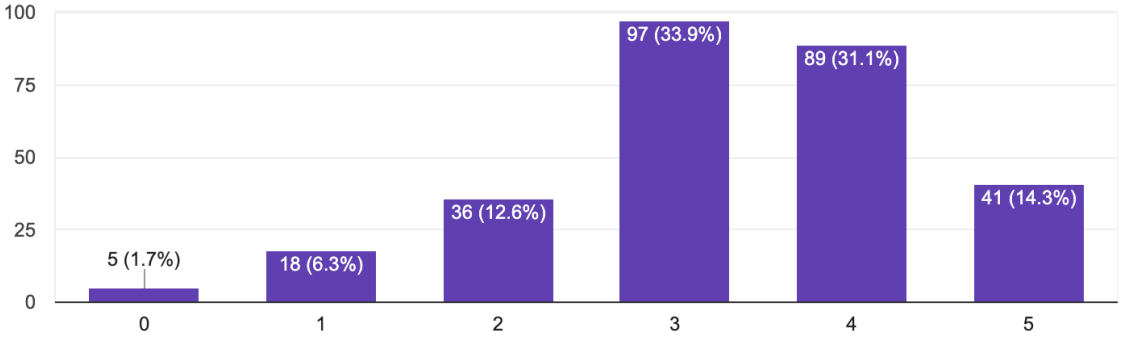
4）生徒は学校での授業を全体的に楽しく取り組んでいる。



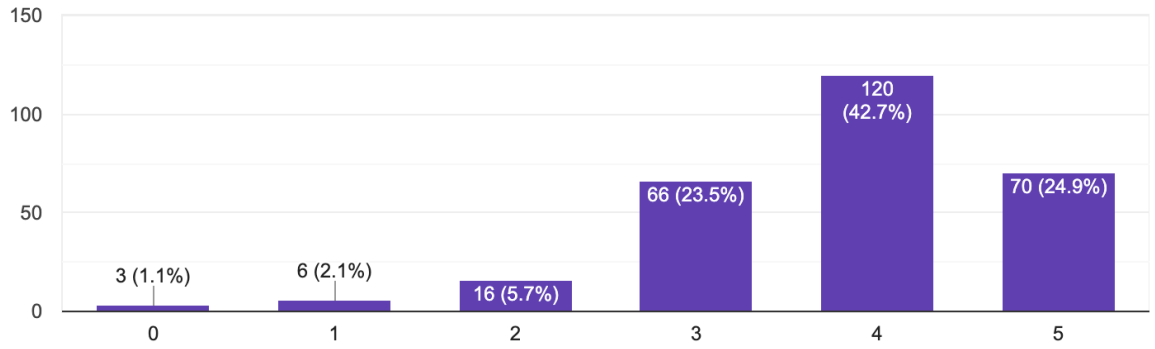
5）生徒の学習する力が伸びていることを感じる。



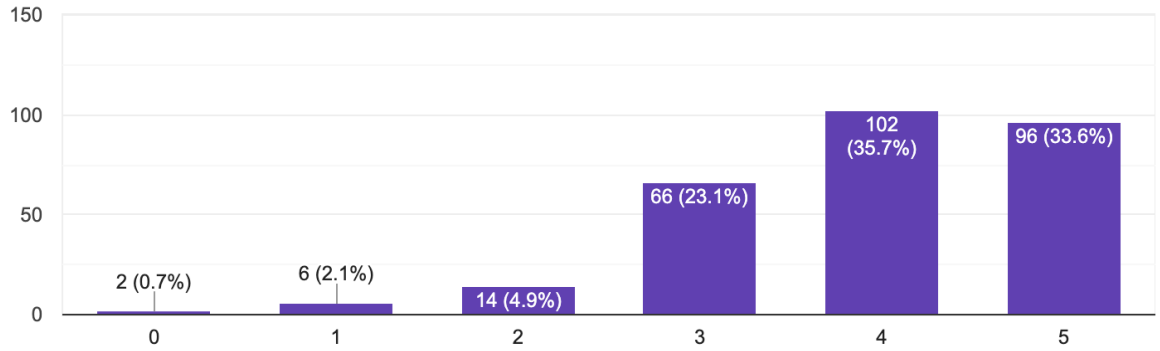
6）授業の進め方や成績のつけ方などについての情報をしっかり受けていると感じる。



7）高校生になると、授業を選択し生徒が自分で時間割を作成するというシステムに満足している。

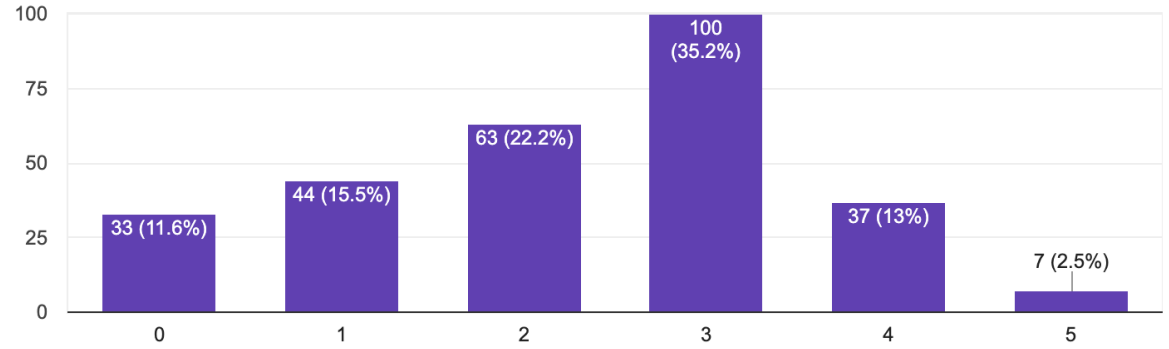


8）生徒はリサーチの仕方やプレゼンテーションについて楽しく意義のある学びをしている。

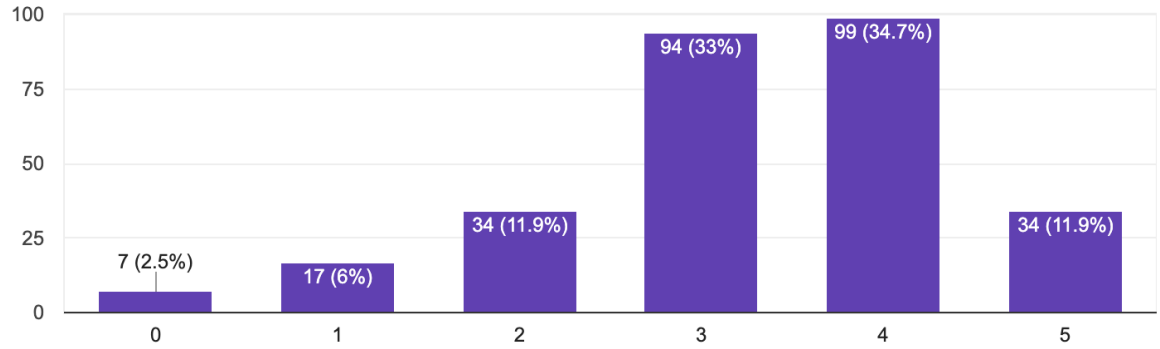


Two Schools Together

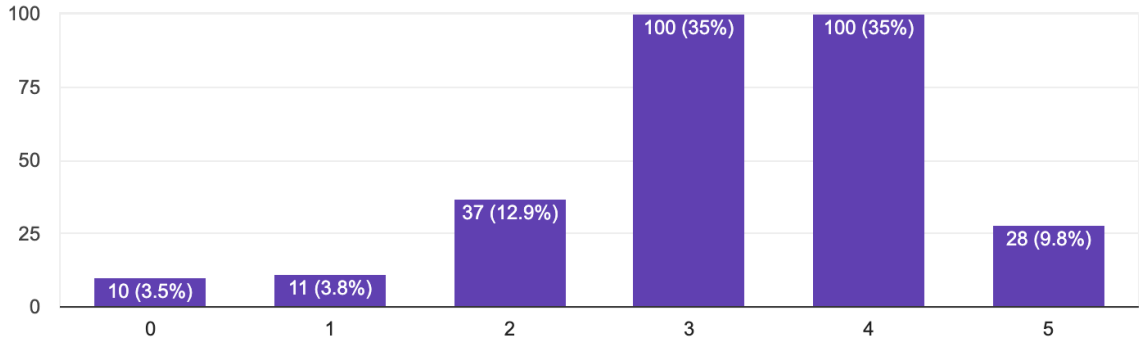
9）OIS保護者との基本的な信頼関係や交流が十分にある。



10）SISとOISは、よりよい国際教育を目指す上で相互によい効果をもたらしている。

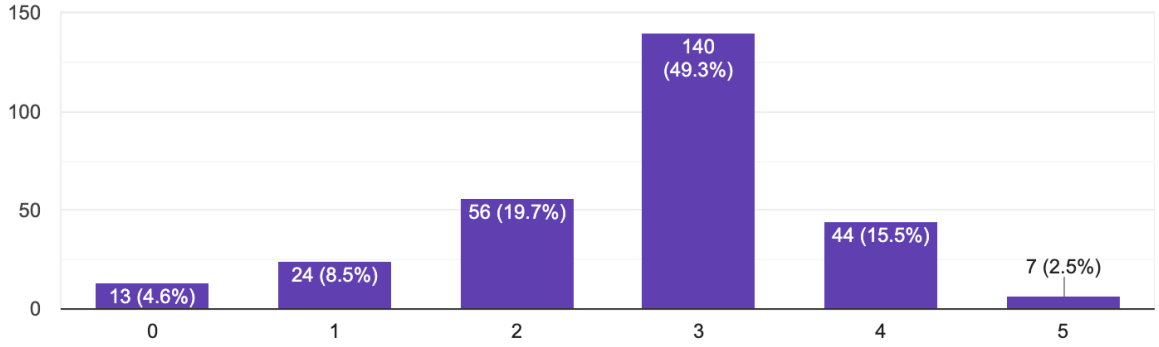


11）SISはOISと共有するスクールミッションである「知識と思いやりを持ち、創造力を駆使して世界に貢献する個人」を育てている。

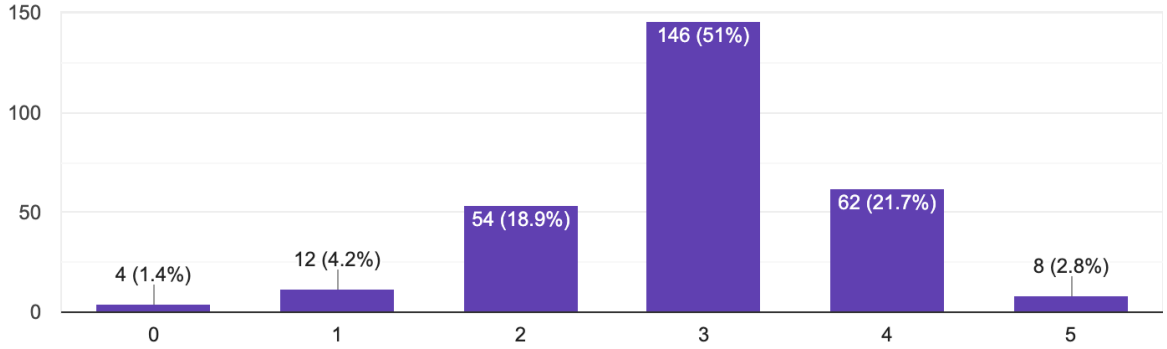


授業外活動・国際理解教育

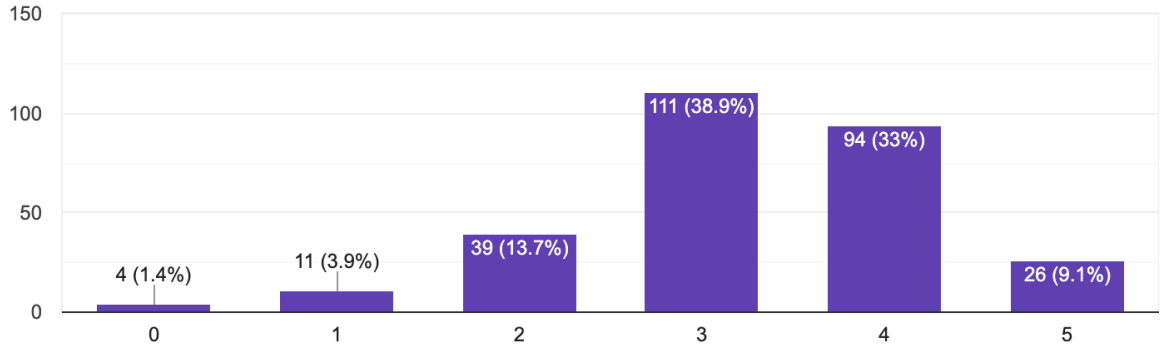
12）SISが提供している授業外の活動（クラブなど）の機会は適切なものである



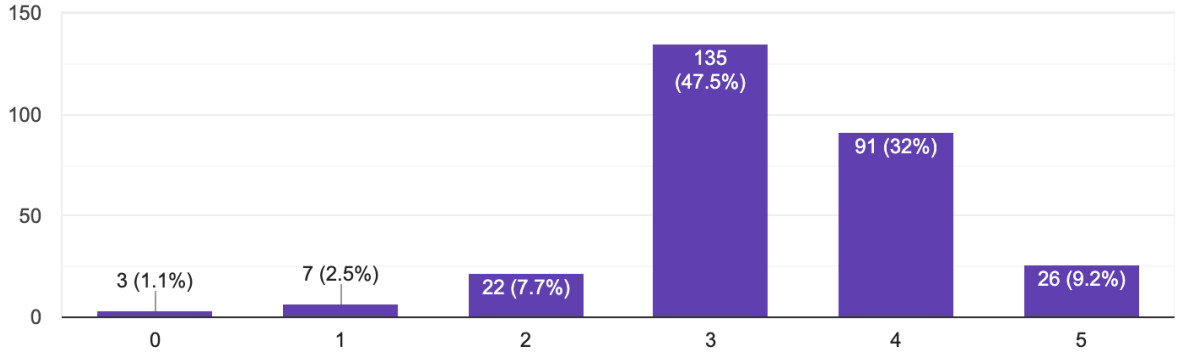
13）いろいろな活動やイベントについての情報の量は適切である。



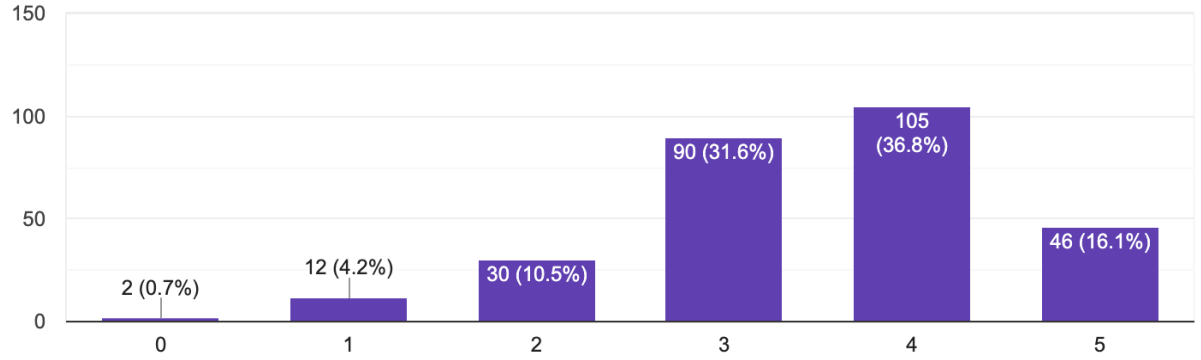
14） 夏休み期間中の活動（キャンプ、フィールドスタディ、その他）や学外活動の案内は充実している。



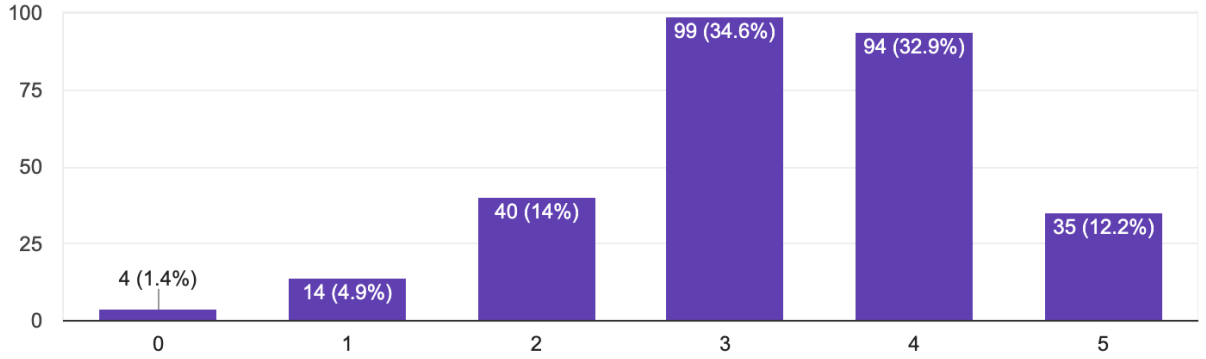
15）各活動の費用負担は適切である。



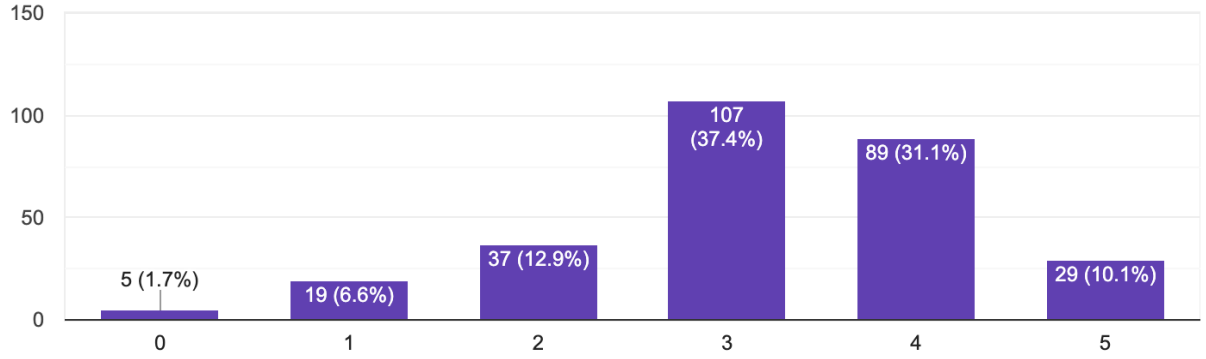
16）SISでは、国際的な視野が広がるプログラムが十分用意・紹介されている。



17）SISでは、生徒は授業や授業外活動を通じて、地球市民として生きていることを意識する機会が多くある。

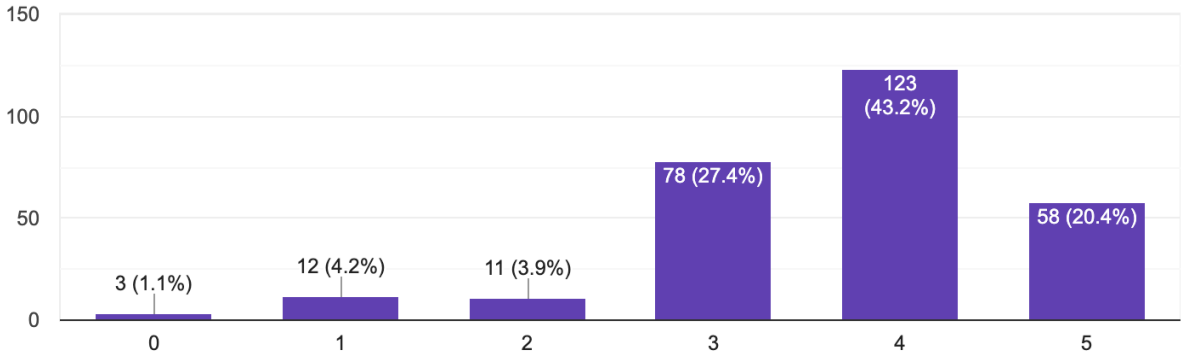


18）生徒は、地球規模で物事を考える力が伸びている。

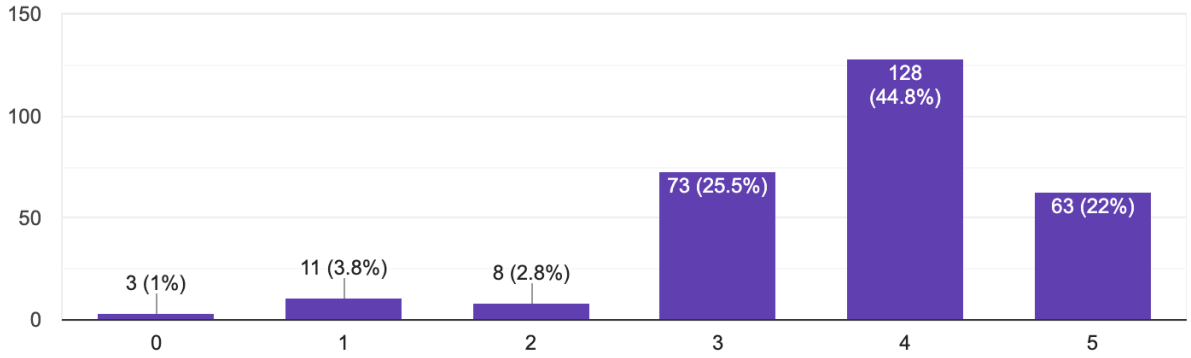


デジタル環境

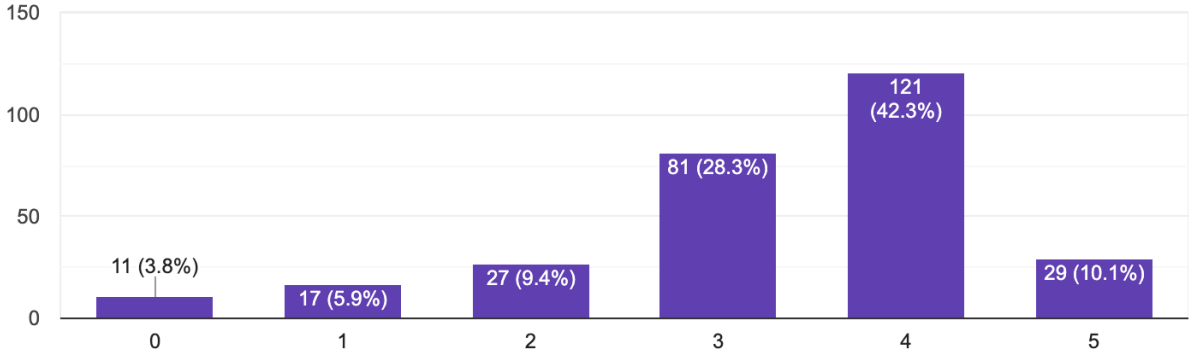
19）生徒は、学校でICT機器（コンピューター、タブレット、インターネットなど）の使用やそのサポートが十分にある環境にある。



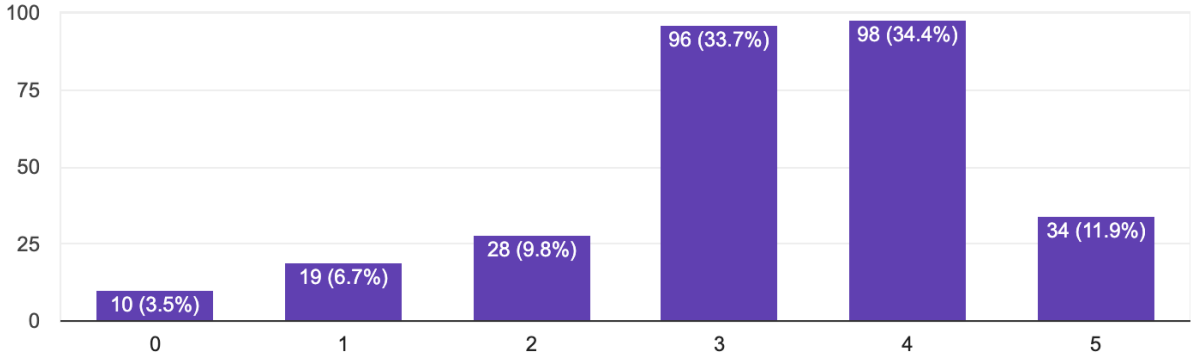
20）生徒は、授業を通じてICTの技術が向上している。



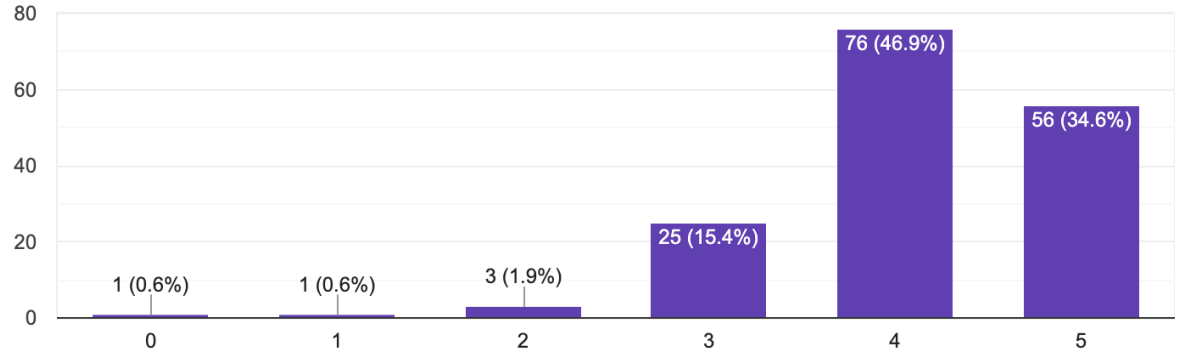
21）生徒は、ICT機器やインターネット(携帯電話・スマートフォンを含む)を使うときに気を付けるべきこと（犯罪行為、いじめなど）についてよくわかっている。



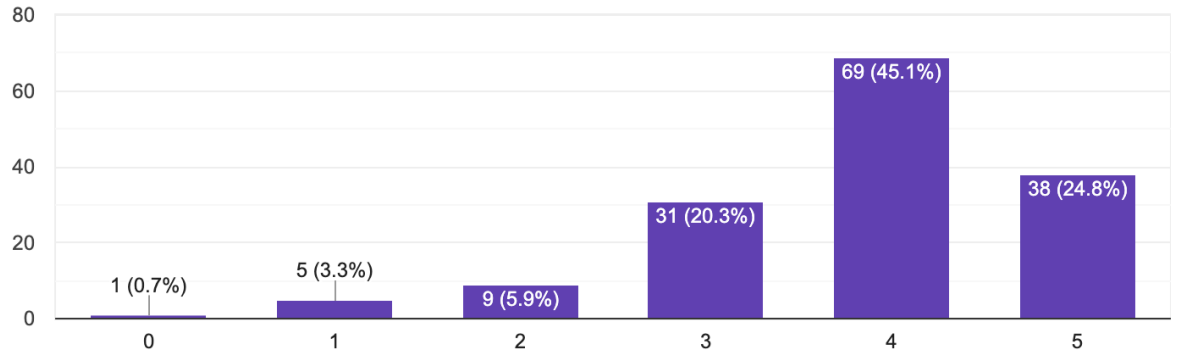
22）生徒は、ネットワーク上で個人情報を守る方法について理解・実践している。



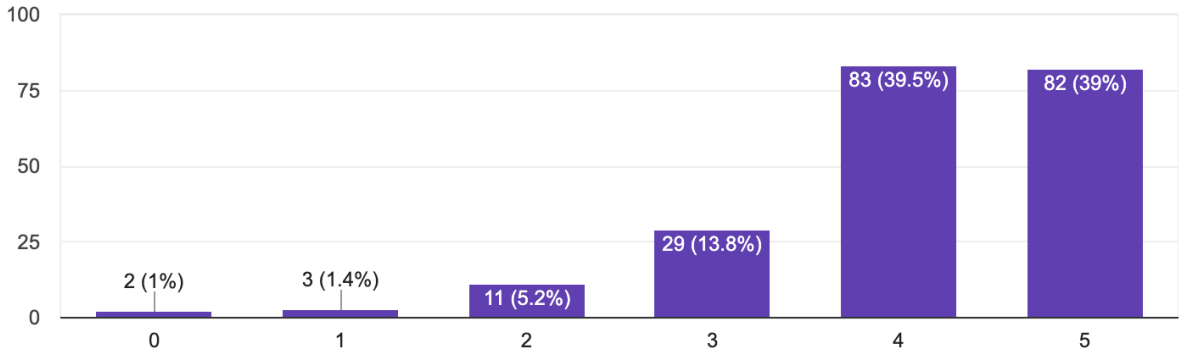
23）（高校生の保護者のみお答えください）生徒は自分のデバイスを学習に有効に活用している。



24）（高校生の保護者のみお答えください）生徒は自律心を持って自分のデバイスを役立てている。

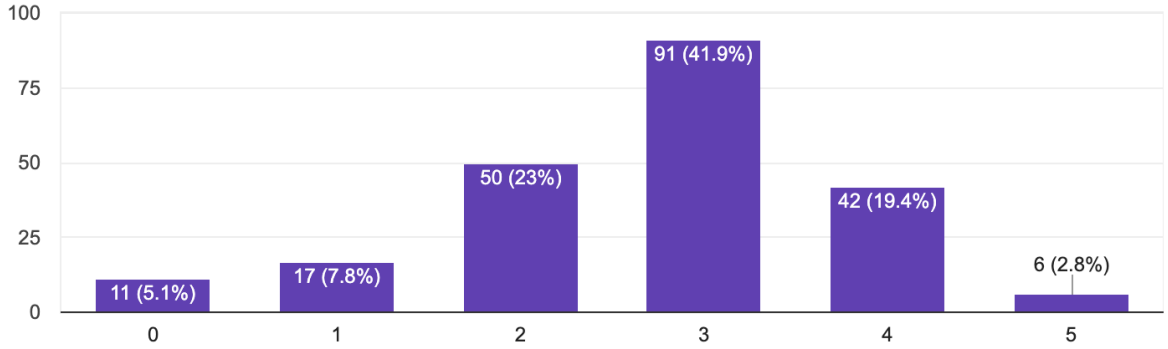


25）BYOD（高校生はパソコン等のデバイスを個人で学校に持ち込む）という学校の方針を理解・共感している。

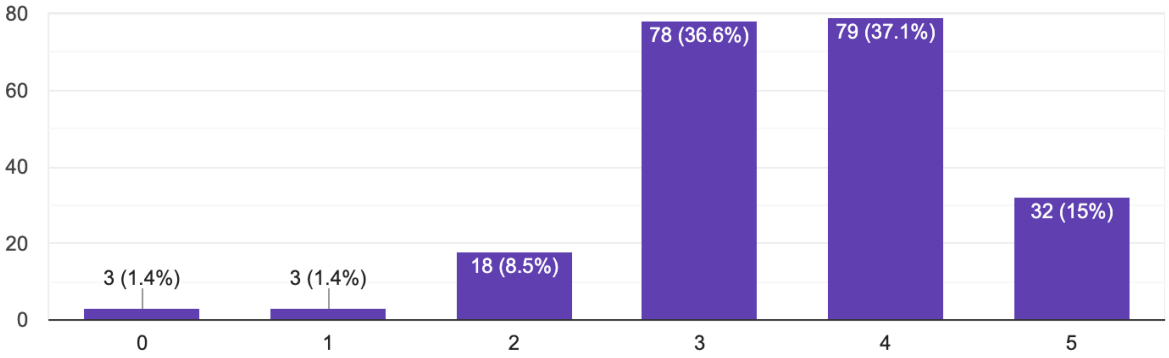


進路

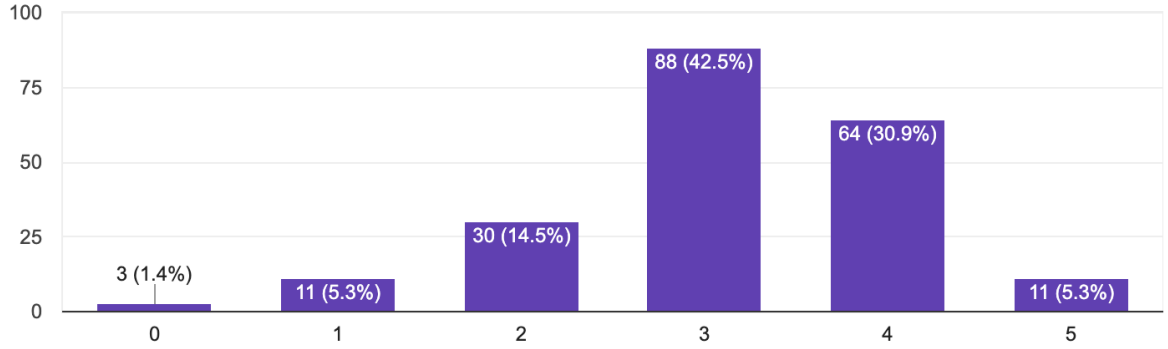
26）国内の進路先についての豊富な情報が収集・公開・提供されている。



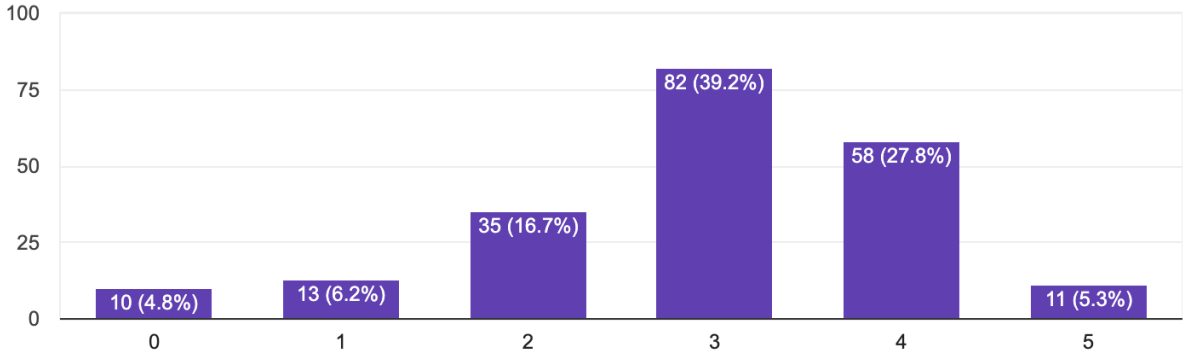
27）関西学院大学についての豊富な情報が収集・公開・提供されている。



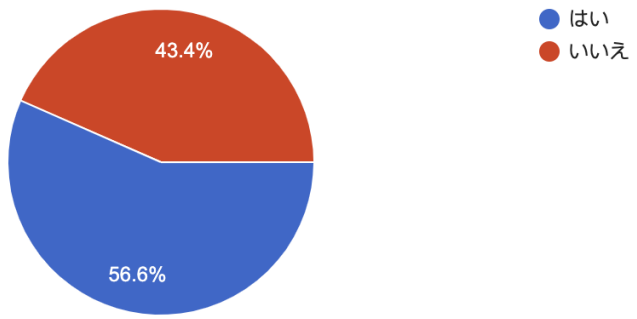
28）海外の進学先についての豊富な情報が収集・公開・提供されている。



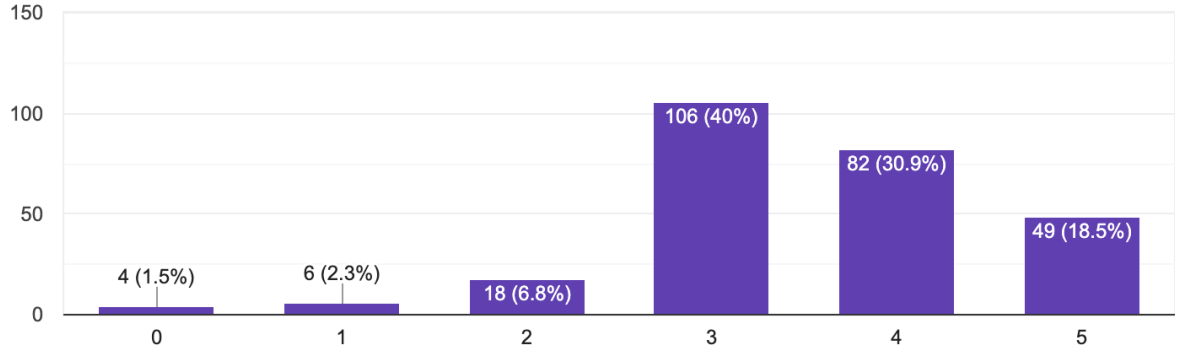
29）生徒本人の意向を尊重した、充分な進路ガイダンスと個別の進路相談の機会が提供されている。



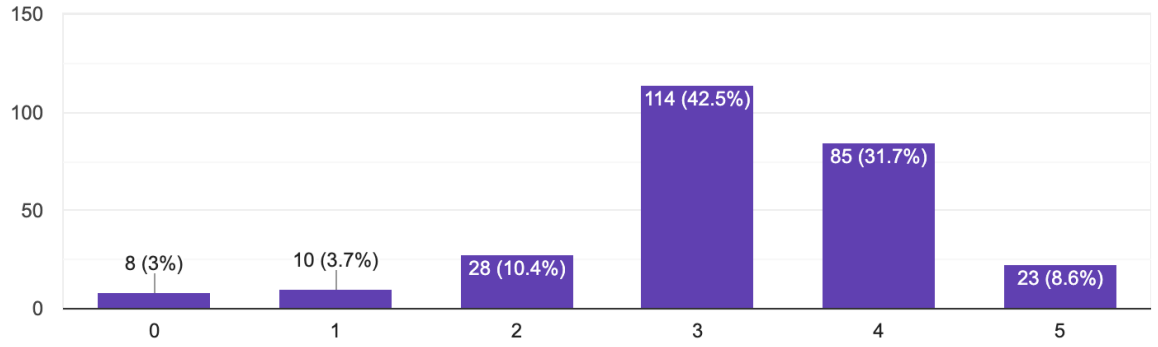
30）私は、関西学院のスクールモットーが"Mastery for Service"（マスタリー・フォア・サービス）であることを知っている。



31）私は、関西学院のスクールモットー"Mastery for Service"（マスタリー・フォア・サービス）に共感している。



32）学校は、「"Mastery for Service"を体現する世界市民」の育成につながる教育を実践している。



2019年度　関西学院千里国際中等部・高等部
学校評価　教員アンケート

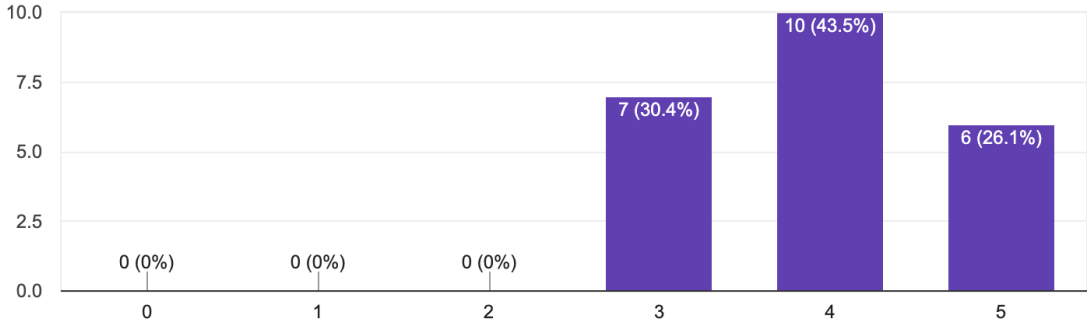
2019 SIS MS/HS SCHOOL EVALUATION REPORT - FACULTY QUESTIONNAIRE

対象教員数 Faculty number: 65
回答数 Responses: 23
回答率 Response percentage: 39.6%

全般 General

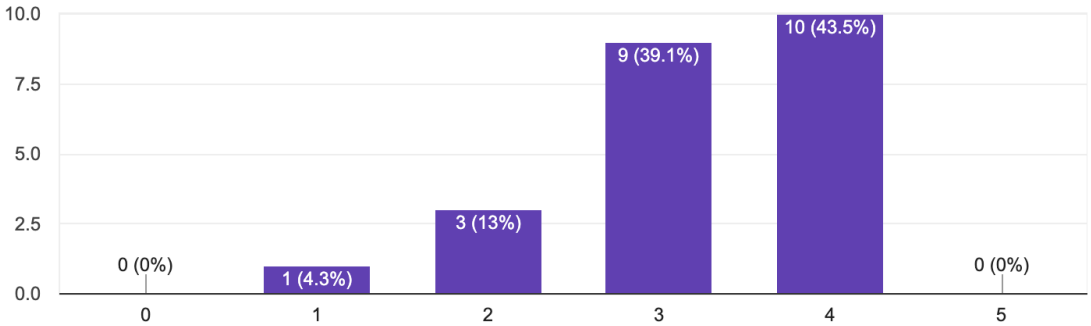
1）自分は教員として充実した気持ちで教育活動に取り組めている。

As a teacher, I am approaching educational activities with positive enthusiasm.



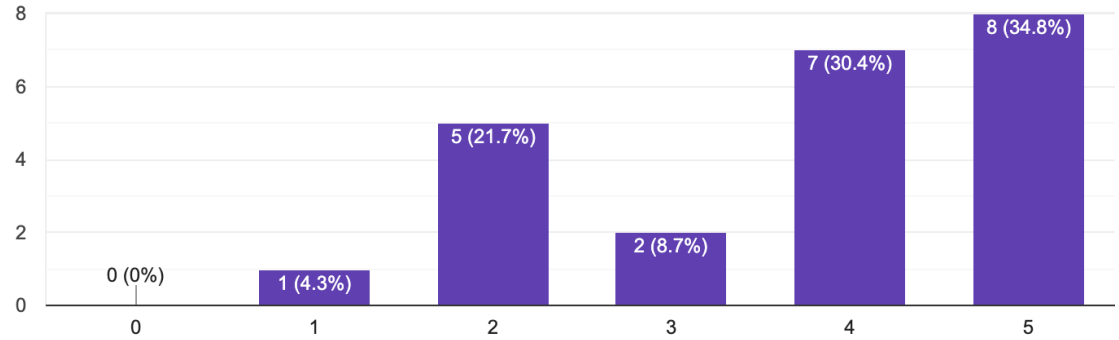
2）生徒・卒業生や保護者のSISに対する満足度は高いと思う。

I think students, graduates and parents have a high level of satisfaction with the school.



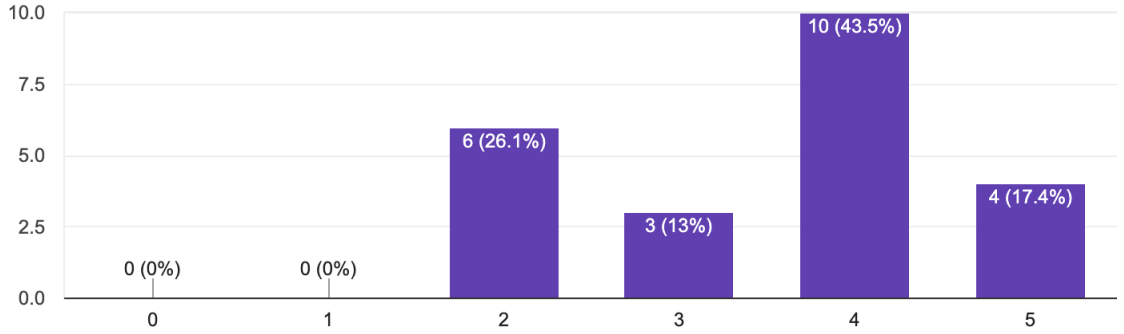
3）少人数の授業環境を活かし、生徒ひとりひとりの状況を把握することが出来ている。

I make the most of the small-group educational environment and am able to recognize each student's academic state.



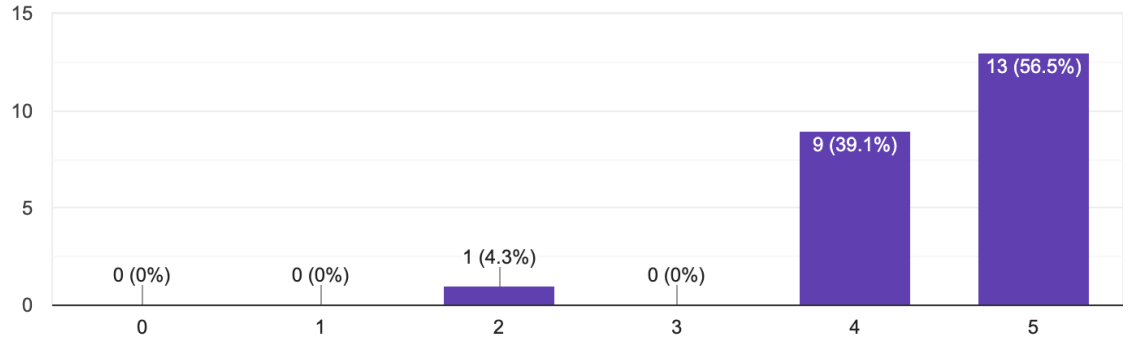
4） 質の高い授業を目指し、教材研究や教授法の研究、授業研究を十分に行っている。

I aim for quality lessons and conduct careful preparation of lessons to that end.



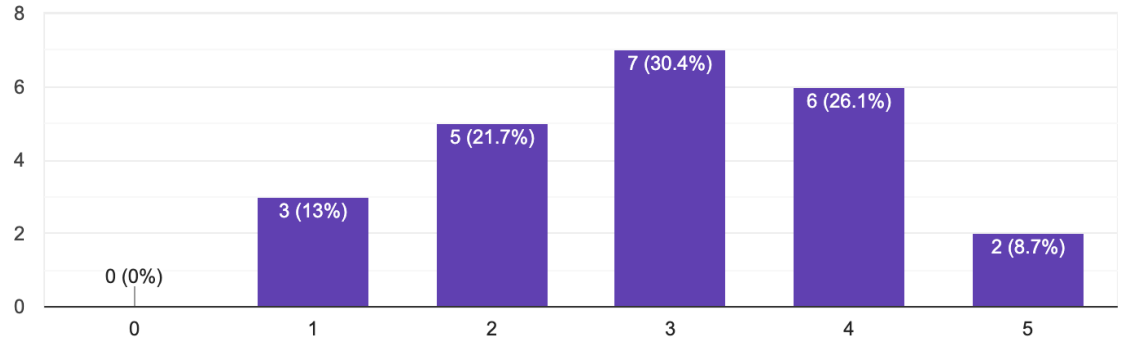
5）授業のすすめかた・成績のつけ方等を、授業開始時に説明している。

I explain the overall lesson approach and grading standards to students at the beginning of each course.



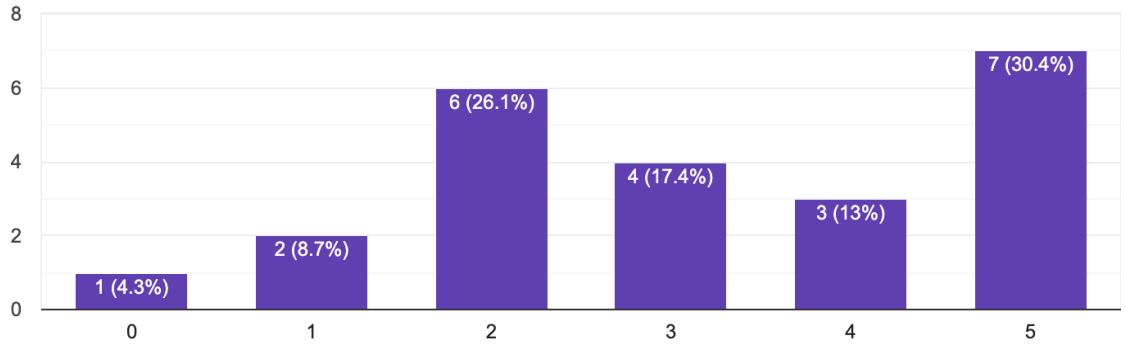
6）授業を選択し、生徒が自分で時間割を作成するシステムは有効に機能している。

The system whereby students choose their own classes to create their schedules is functioning effectively.



7）学期の最後に授業評価のアンケートを履修生徒に行っている。

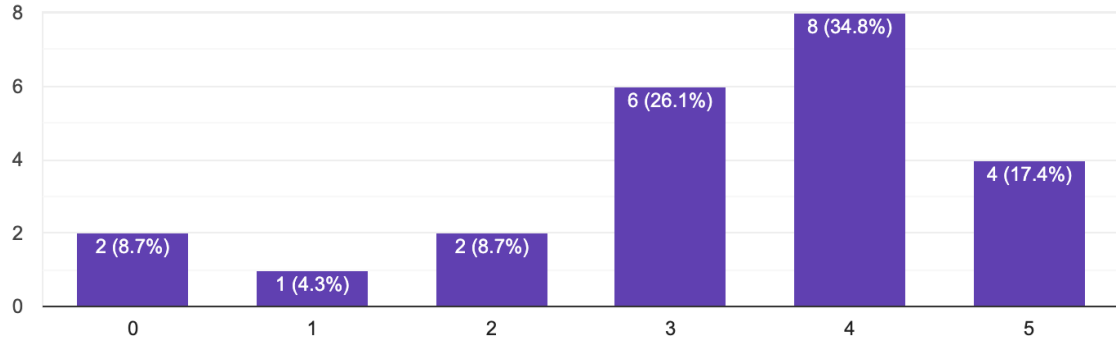
I am taking surveys at the end of the semester from all my students.



Two Schools Together
生徒活動・国際交流　Activities and International relations

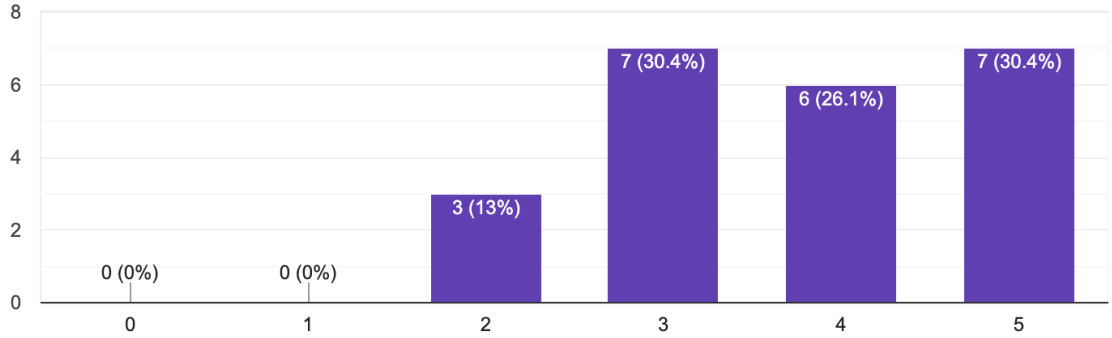
8) SGHプログラムが、生徒の探究型学び、本物に触れる機会、発表の機会の拡大などにつながっていることを実感している。

I feel that the SGH program is giving increased opportunity for authentic, inquiry based learning and presentations.



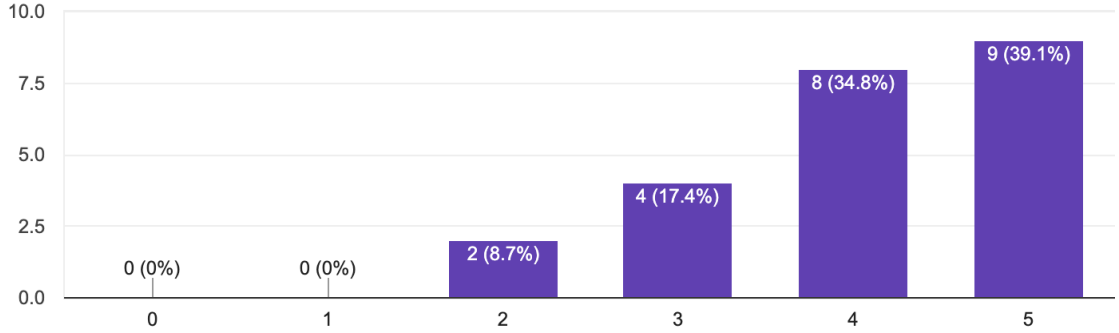
9) アカデミック・オネスティについての指導を授業などで生徒にしている。

I am giving enough information about Academic Honesty to my students.



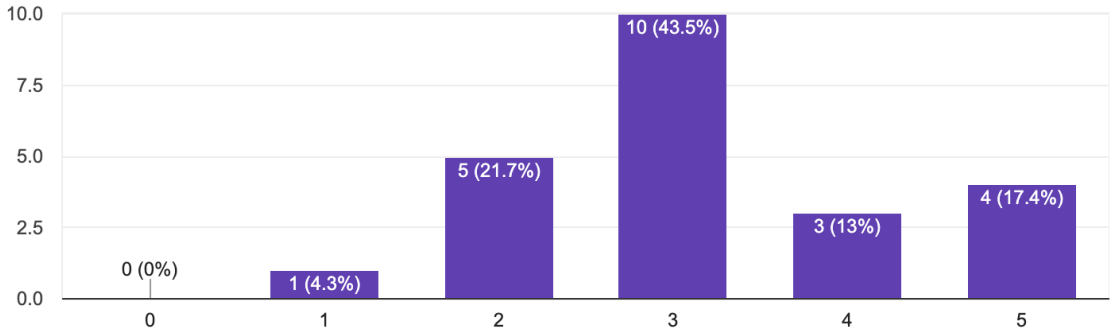
10) アカデミック・オネスティに反する行いを発見した際には、適切な指導を行っている。

I am advising my students when I see cases where Academic Honesty expectations are not being met.



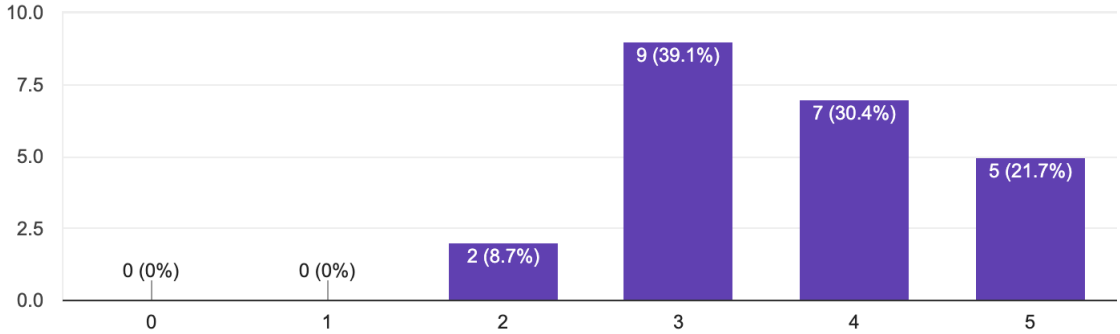
11) OISの教員や生徒との交流が日常的に行われている。

I interact with faculty and students of OIS on a daily basis.



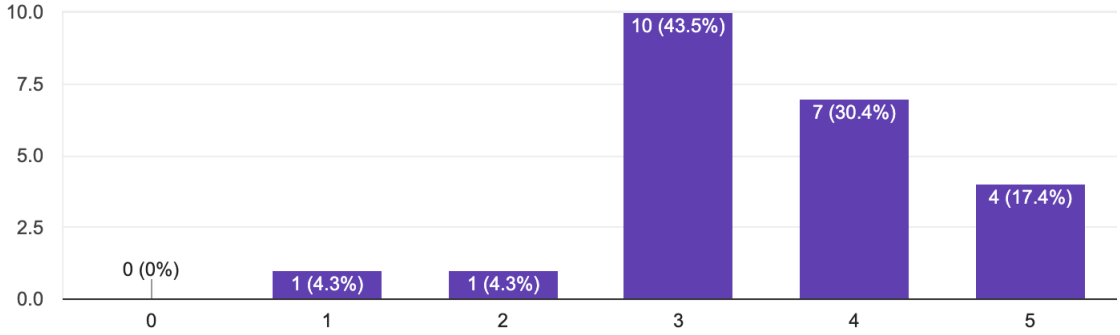
12) SISとOISは、よりよい国際教育を目指す上で、相互によい効果をもたらしている。

SIS and OIS complement each other in a way that, aims to improve international education and achieves effective results for both schools.



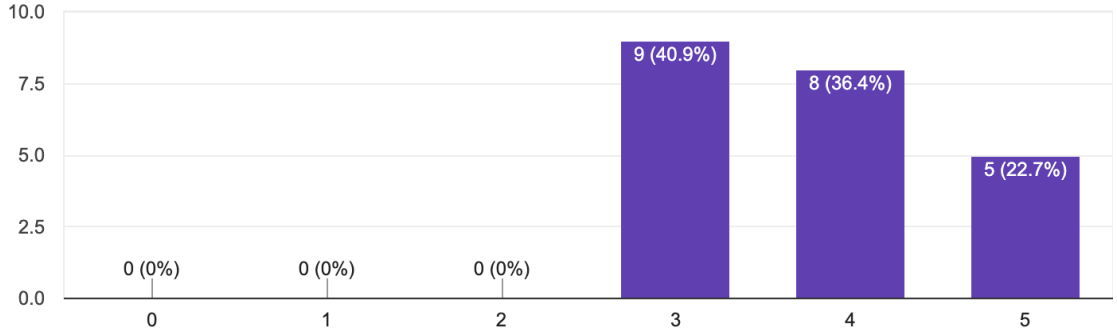
13) SISは「知識と持ち思いやりを持ち創造性を駆使して世界に貢献する個人」を育てている。

SIS works to promote the shared mission of developing "Informed, Caring, Creative Individuals Contributing to a Global Community".



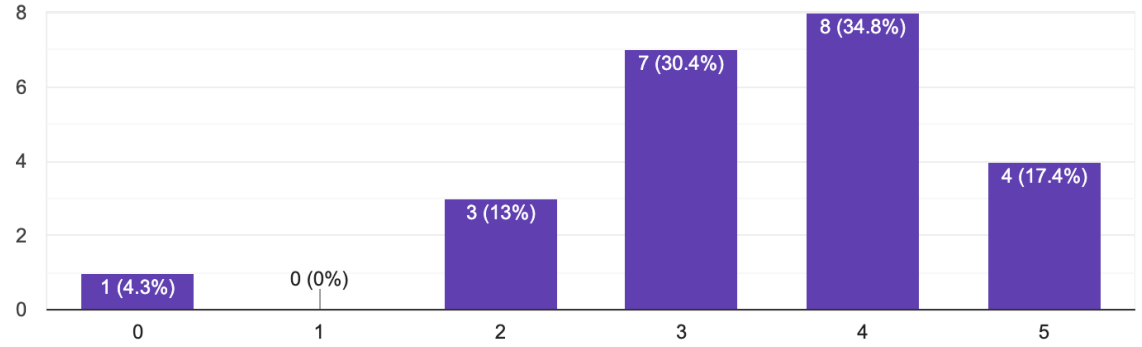
14) SISが提供している授業外の活動（クラブなど）の機会は適切なものである。

Opportunities for extra-curricular activites (clubs, etc) provided by SIS are appropriate.



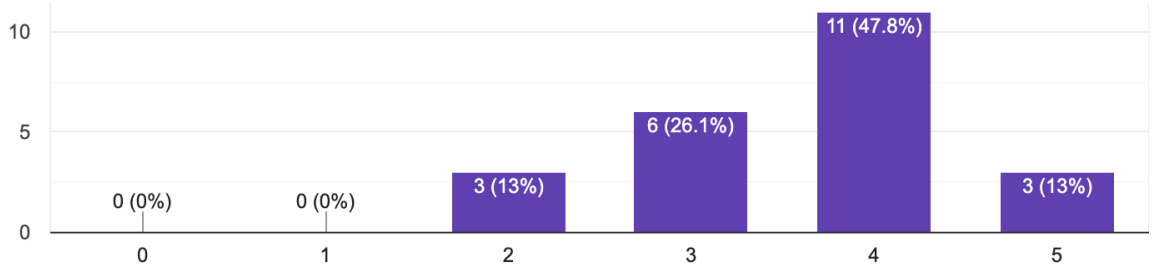
15) SISは、キャンプや遠足などの体験学習により、生徒の自主性、創意工夫や協力する心を養っている。

At SIS student independence, creativity and cooperative spirit are encouraged through camps, trips and hands-on learning experiences.



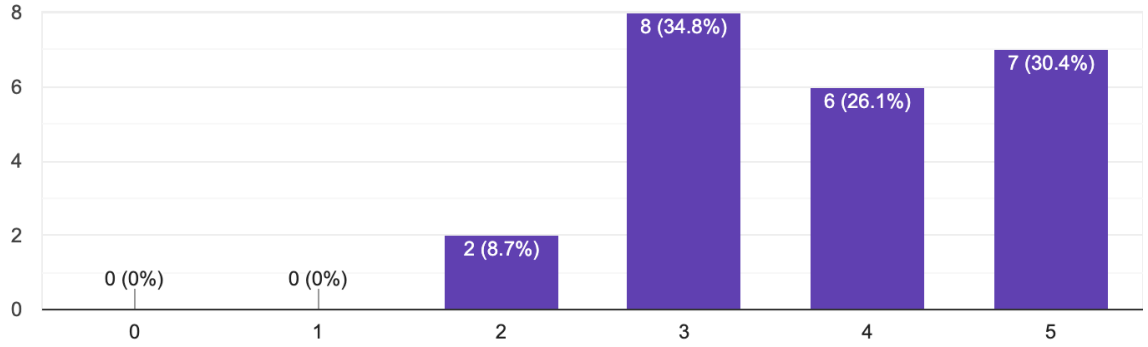
16) 夏休み期間中の活動（キャンプやフィールドスタディ）は充実した教育活動である。

Programs provided by school for summer such as camps and field studies are educationally significant.



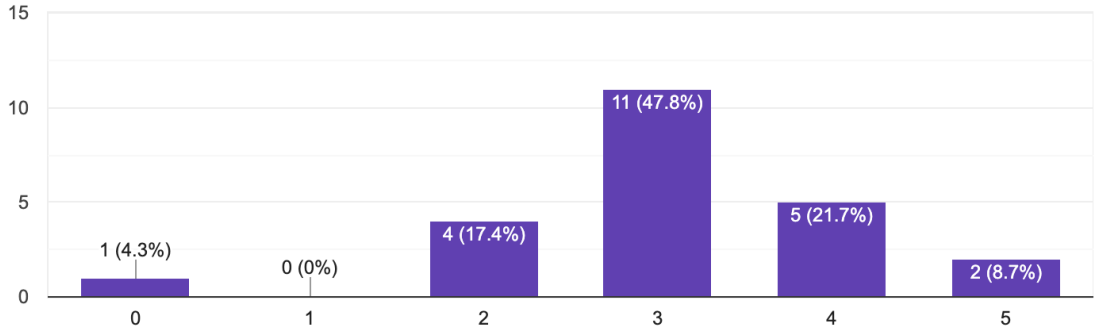
17) 国際的な視野が広がるプログラムが十分用意・紹介されている。

SIS provides and introduces programmes with a wide international perspective.



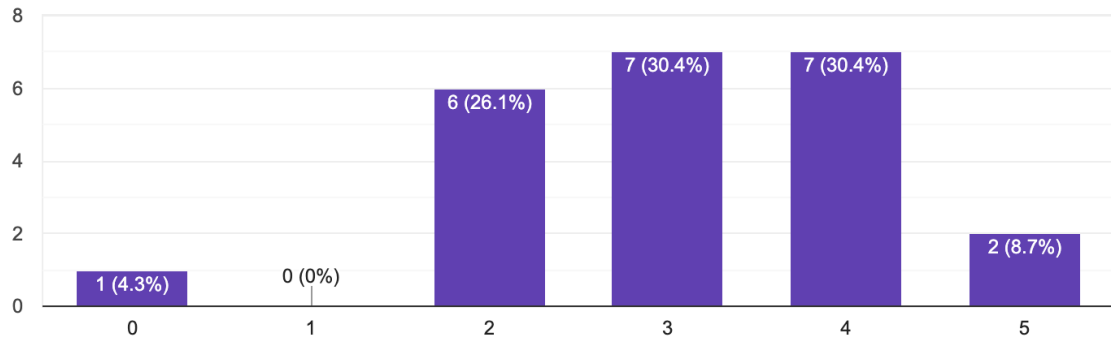
18) 私は、授業やホームルームを通じて生徒に、世界市民として生きていることを実感できる機会を与えている。

Through lessons and homeroom I provide students with real opportunities to give them the sense that they are living as a global citizen.



19) 生徒は、地球規模で物事を考える力が伸びている。

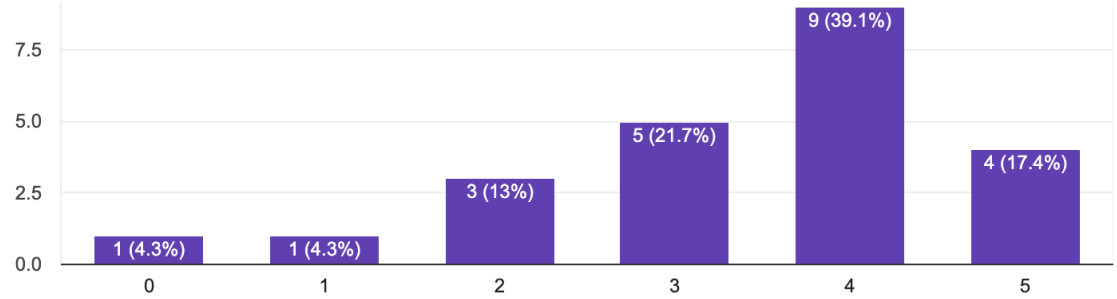
Students are developing the ability to think about things from a global perspective.



ICT

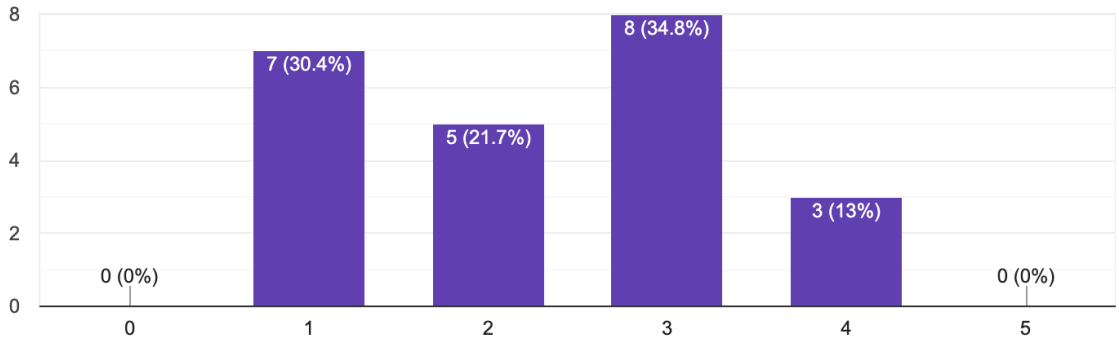
20) 私は授業でICTを効果的に取り入れている。

I am making effective use of ICT technology in my classes.



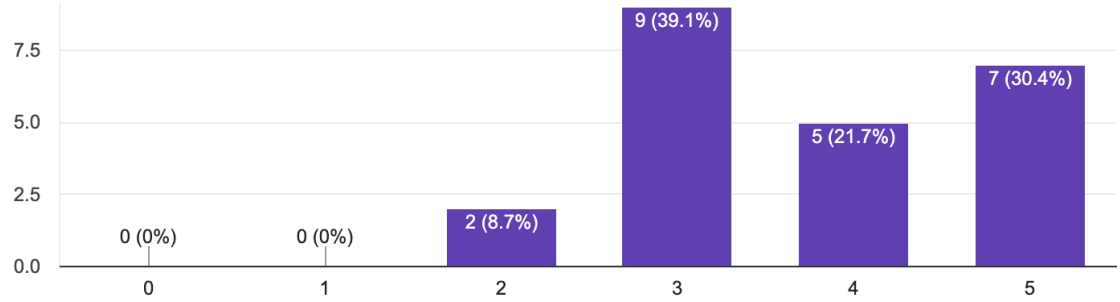
21) 生徒は、ネット上での個人情報の守り方を熟知している。

Students are familiar with ways of protecting their personal information on-line.



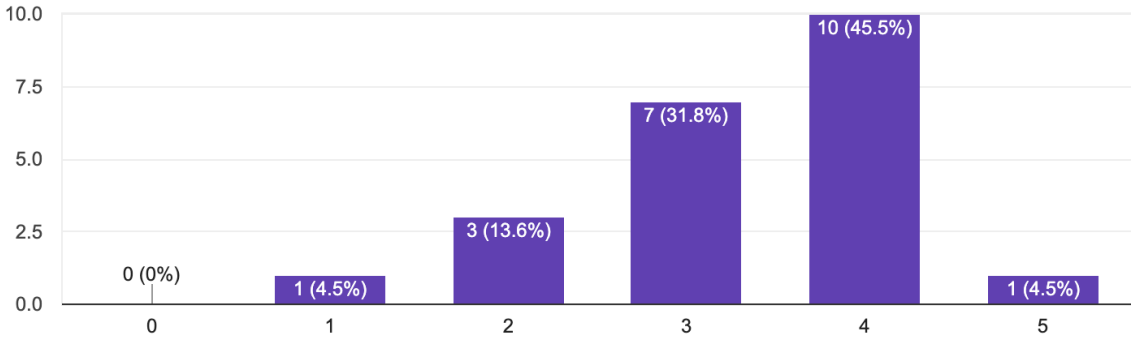
22) 高等部でのBYODは教科の授業・課外活動などでの活用が定着している。

BYOD, use in the classroom, in extra curricular activities, etc is now well established.



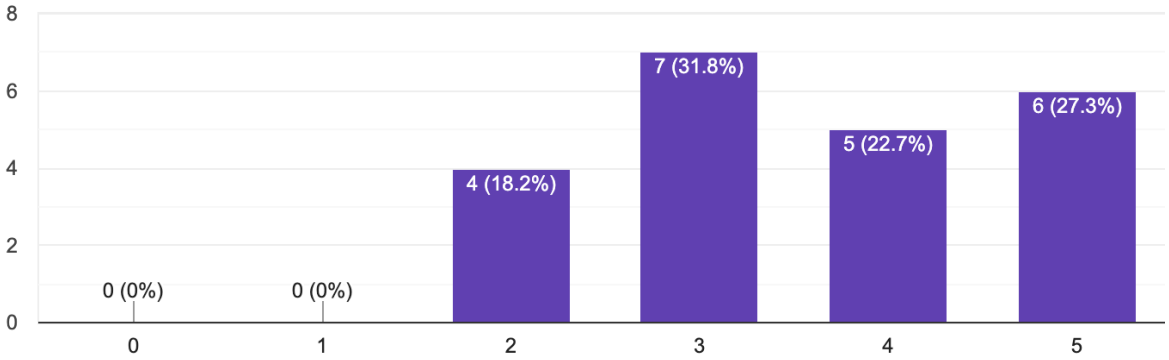
23) 校内のWiFiシステムは有効に機能している。

Is WiFi fit for purpose?



24) BYODの体制で、生徒が違った機器を学校に持ち込むが、その状況でもICTを活用していける準備が整っている。

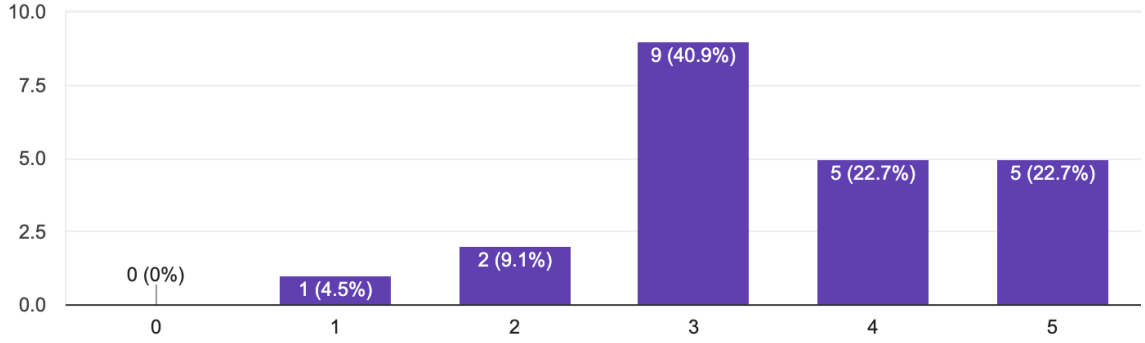
In regard to the BYOD system, students bring different devices to school, preparation is sufficient for ICT use.



進路 Shinro

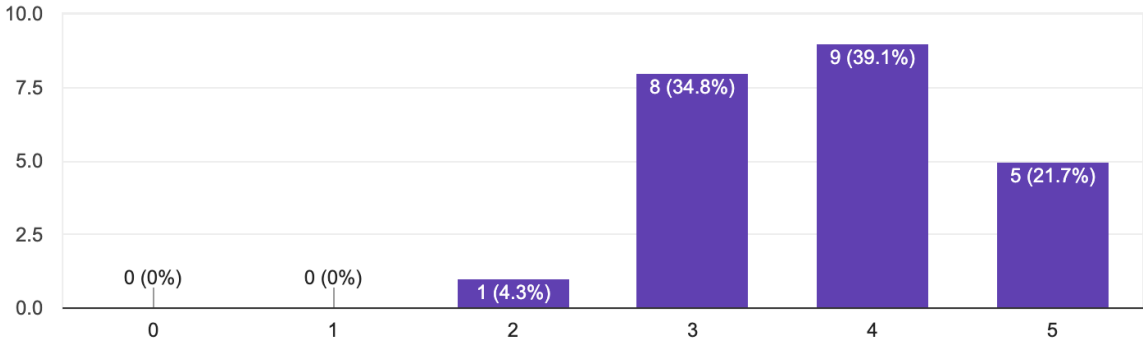
25) 学校は国内の進路先に関する情報についての豊富な情報を提供し生徒をサポートしている。

The school is collecting and making available a wealth of information related to domestic universities, colleges, vocational schools, etc. and support students.



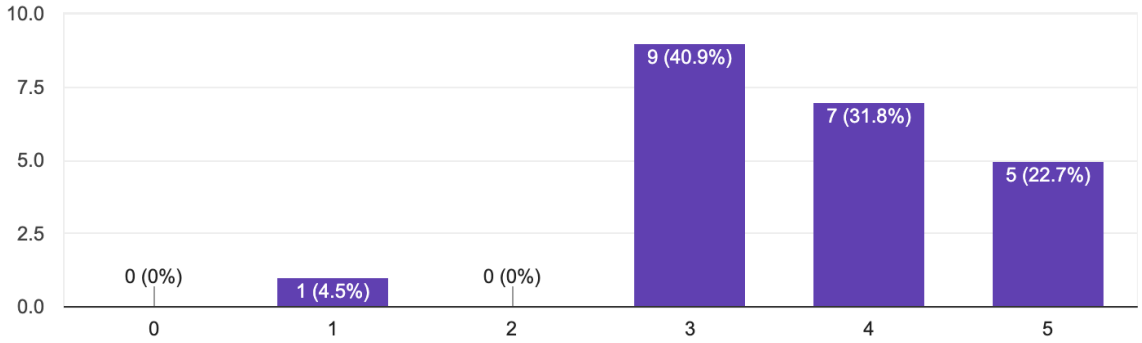
26) 学校は海外の進学先についての情報を豊富に収集・公開・提供している。

In cooperation with the OIS counselor, the school is collecting and making available a wealth of information related to overseas universities, colleges, vocational schools, etc.



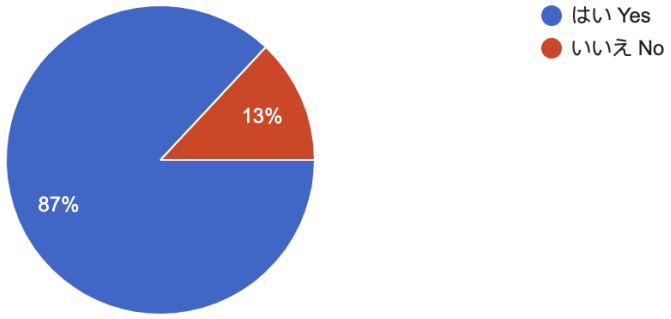
27) 学校は、本人の意向を尊重した充分な進路ガイダンスと個別の進路相談とを行っている。

The school carries out career counseling and guidance that respects the wishes of each individual student.

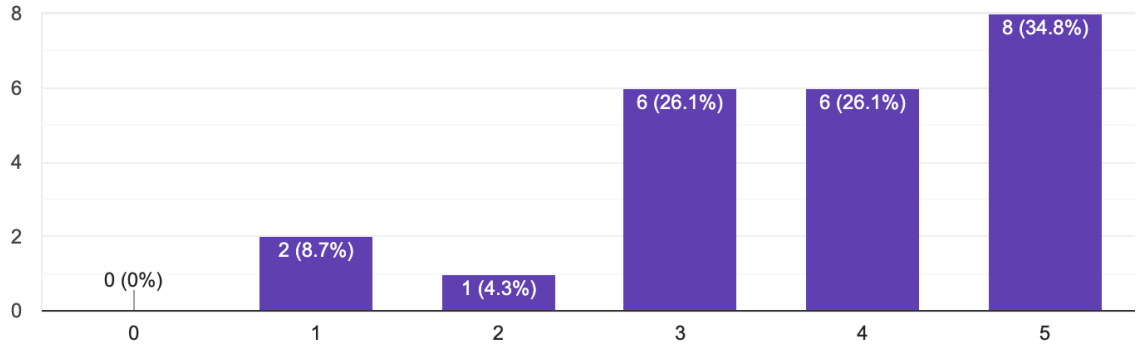
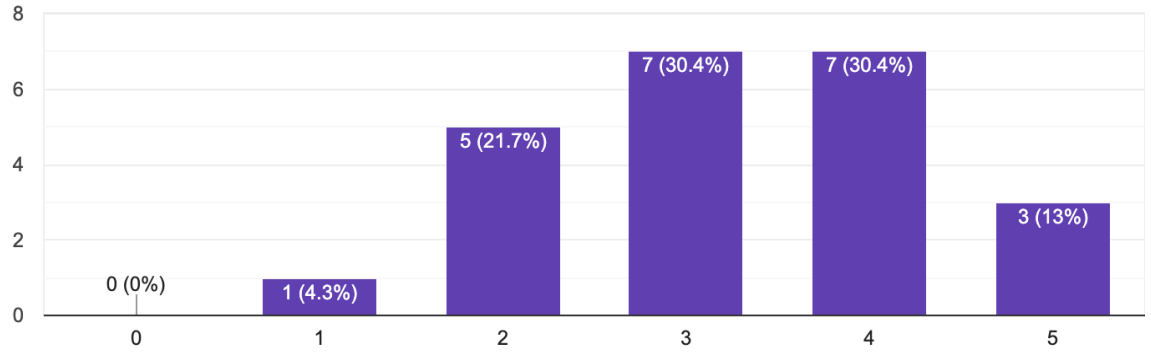


関西学院

28）私は、関西学院のスクールモットーが"Mastery for Service"（マスタリー・フォア・サービス）であることを知っている。



29）私は、関西学院のスクールモットー"Mastery for Service"（マスタリー・フォア・サービス）に共感している。I empathize with the KG's school motto "Mastery for Service".



30）学校は、「"Mastery for Service"を体現する世界市民」の育成につながる教育を実践している。Our school puts the education for giving students the opportunity to be live as global citizens into practice.。